

目 録

紀元二千六百

特233

530

主催 東洋経済新報社

後援 外務省 大蔵省
農林省 商工省
逓信省 鉄道省



昭和
和正治

経済文化展覧会

生私達の祖父母や父母達はどんな時代を
きてきたか。経済の発達が誰にも判る

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





長崎ヨリ諸國ニ海陸道規

京都	陸三千里	海三千里
大坂	陸二千里	海二千里
宇治	陸一千里	海一千里
...

此圖は長崎の地勢を詳しに描き、海陸交通の便を明かに示す。其の地味は、西の山脈に接し、東の海に臨む。故に商賈の集まる所なり。其の地味は、西の山脈に接し、東の海に臨む。故に商賈の集まる所なり。

長崎	日向二里	日向一里
...

特233
536



紀元二千六百年記念

經濟文化展覽會 目錄

主催 東洋經濟新報社



趣 旨

明治維新の大業が成るや、政府は庶政の革新を斷行すると共に何よりも先づ「殖産興業」に力を注いだ。「殖産興業」無くしては「富國強兵」は有り得なかつたからである。爾來我國の産業は只管發展の一路を辿つて、今日の隆昌を見るに至つたのであるが今にして八十年の來し方を顧みると、其變遷の著大なる、眞に「隔世」の感に堪へざるものがある。

思ふに「經濟」は、社會生活の「基礎」を成すものである。如何なる場所、如何なる時でも、「經濟」を閉却して繁榮した國家は無かつた。今我國が國力を擧げて東亞新秩序の建設に邁進して居る時——殊に歐洲では、第二次の世界大戦争が、發展擴大しつつある時——かゝる時にこそ、一國經濟の持つ意義は、一層重大であると云はねばならない。我が社が紀元二千六百年を記念して、本展覽會を開催する所以のものも、要するに國民大衆と共に、「經濟」の、過去に於ける業績を回想欽仰し、且つ其刻下の焦眉的重大性を正しく認識把握して、苟くも過誤違算無からしめんとの微衷に出でたるに外ならない。幸ひ此小企畫が幾分でも其目的を達し得たとしたら、それは單り、主催者側の喜びたるのみでは無いと信ずる。

昭和十五年六月二十一日

東洋經濟新報社

展 覽 要 項

- 一、本展覽會では年代の經濟史的區分を左の如く規定する。
 - 一、幕末封建下の近代産業黎明期……………(嘉永より慶應まで)
 - 二、封建諸制度變改並新産業輸入期、附・不換紙幣濫發……………(明治元年より同十二年まで)
 - 三、官業拂下民業保護期、附紙幣整理……………(明治十三年より同二十三年まで)
 - 四、第一次産業飛躍期 (産業資本成立期)……………(日清戦役前後)
 - 五、第二次産業飛躍期 (産業資本發展期)……………(日露戦役前後)
 - 六、第三次産業飛躍期 (金融資本確立期)……………(歐洲大戰前後)
 - 七、不況と恐慌の時期……………(大正九年より震災を経て昭和五年まで)
 - 八、準戦時及戦時體制期……………(滿洲事變より現今に至る)
- 二、場内を分つて左の如く區劃する。
 - 第一部、右の歴史過程を、繪畫・寫眞・圖書・モンタージュ・パノラマ・デオラマを以て示す(年次別に陳列)
 - 第二部、經濟の發展を平易なグラフで示す
 - 第三部、經濟文化發展の指導者及び外人功勞者
 - 第四部、實物參考品

明治・大正・昭和經濟文化展覽會目錄

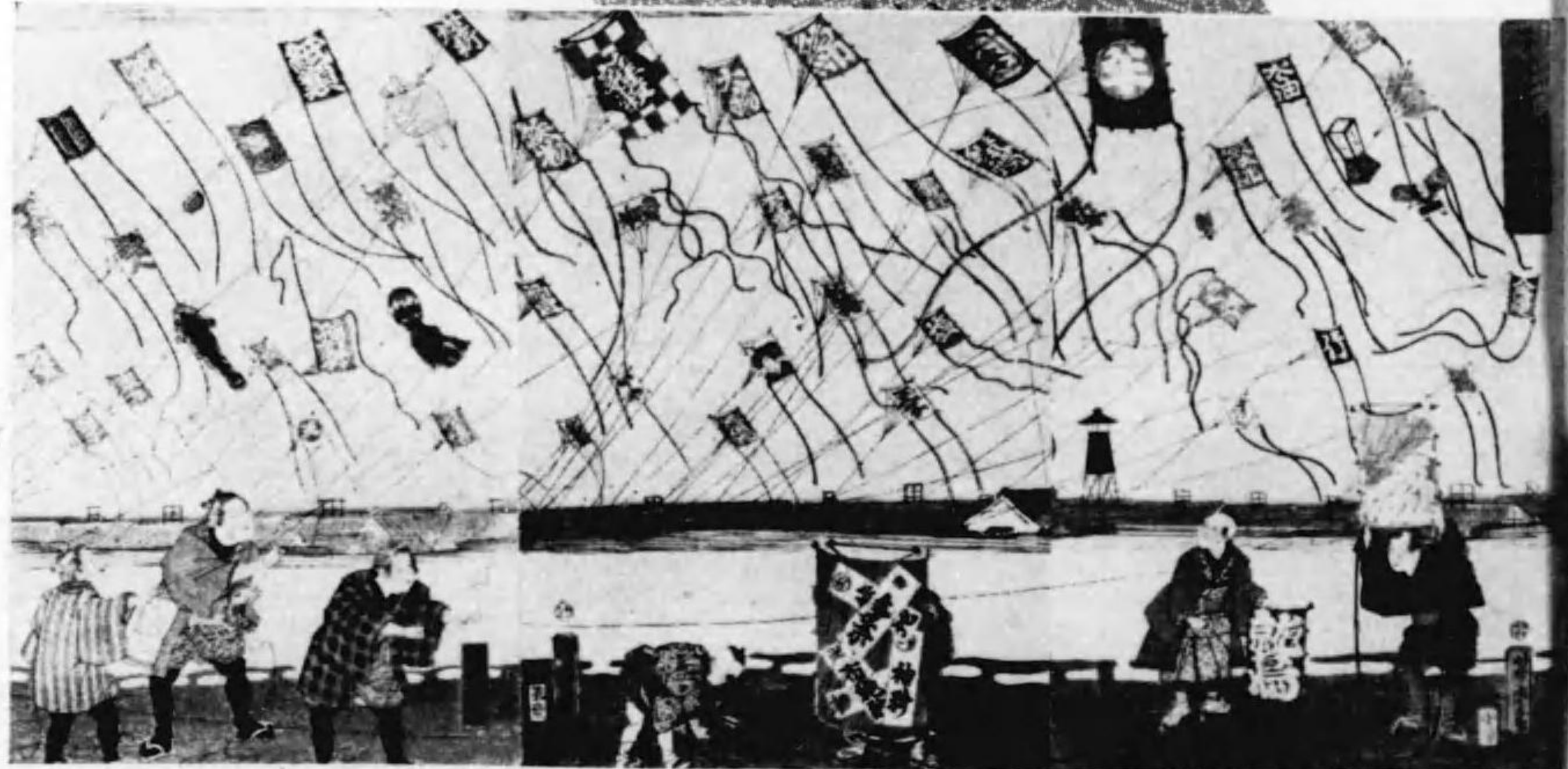
目次

趣旨	三
展覽要項	一
第一部	
錦繪・地圖・版畫目錄	五―三
陳列文獻目錄	三―五
第二部	
圖表目錄	七―九
第三部	
經濟文化貢獻者略記	九―一〇
明治經濟文化關係歐米人一覽	一〇―一七
明治・大正・昭和經濟略年表	一六―一四
附・明治前西洋交涉略年表	一六―二三
編輯後記	一四

(年元延萬) 港開新濱横川名神

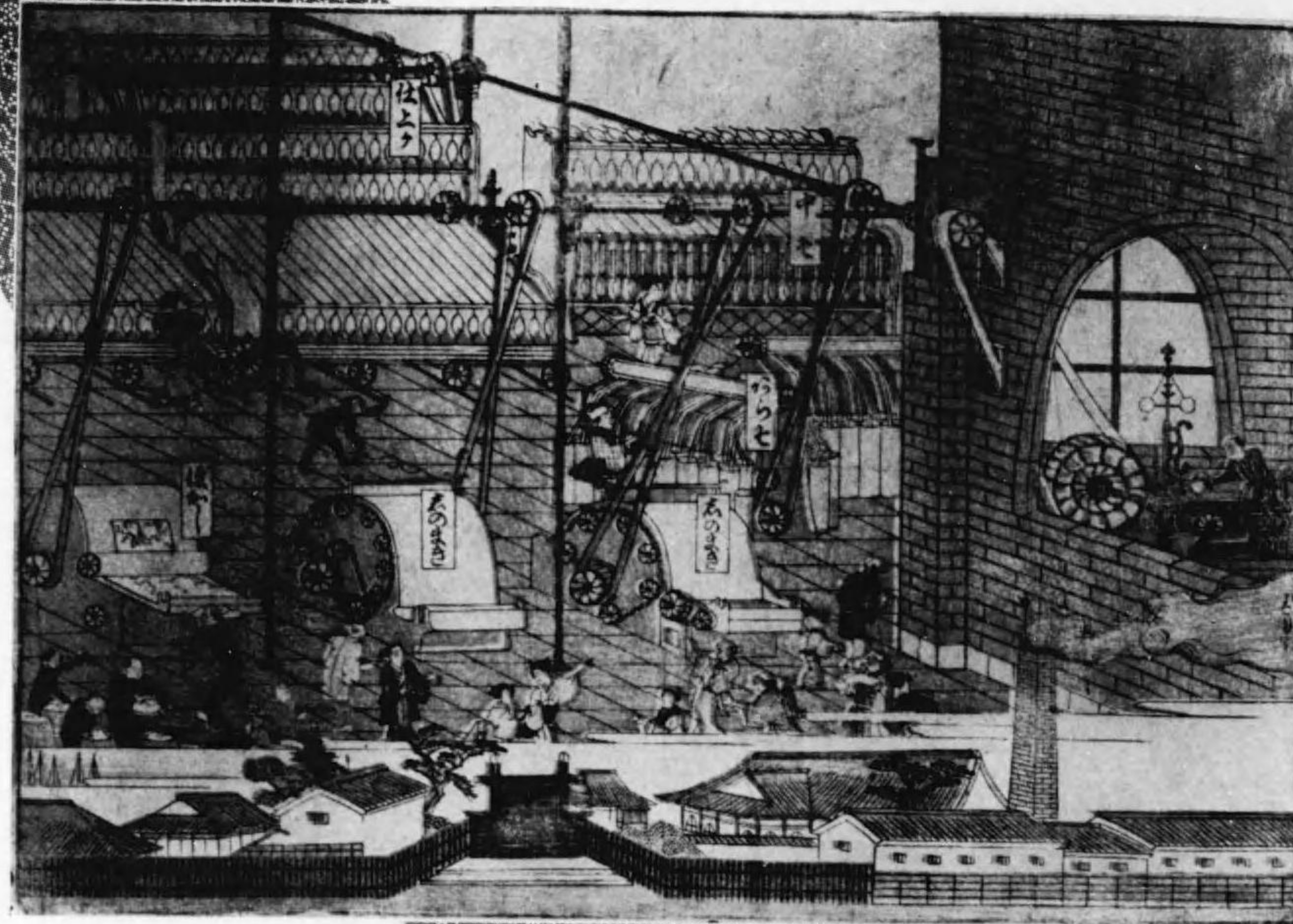


圖新橋川神
港濱名

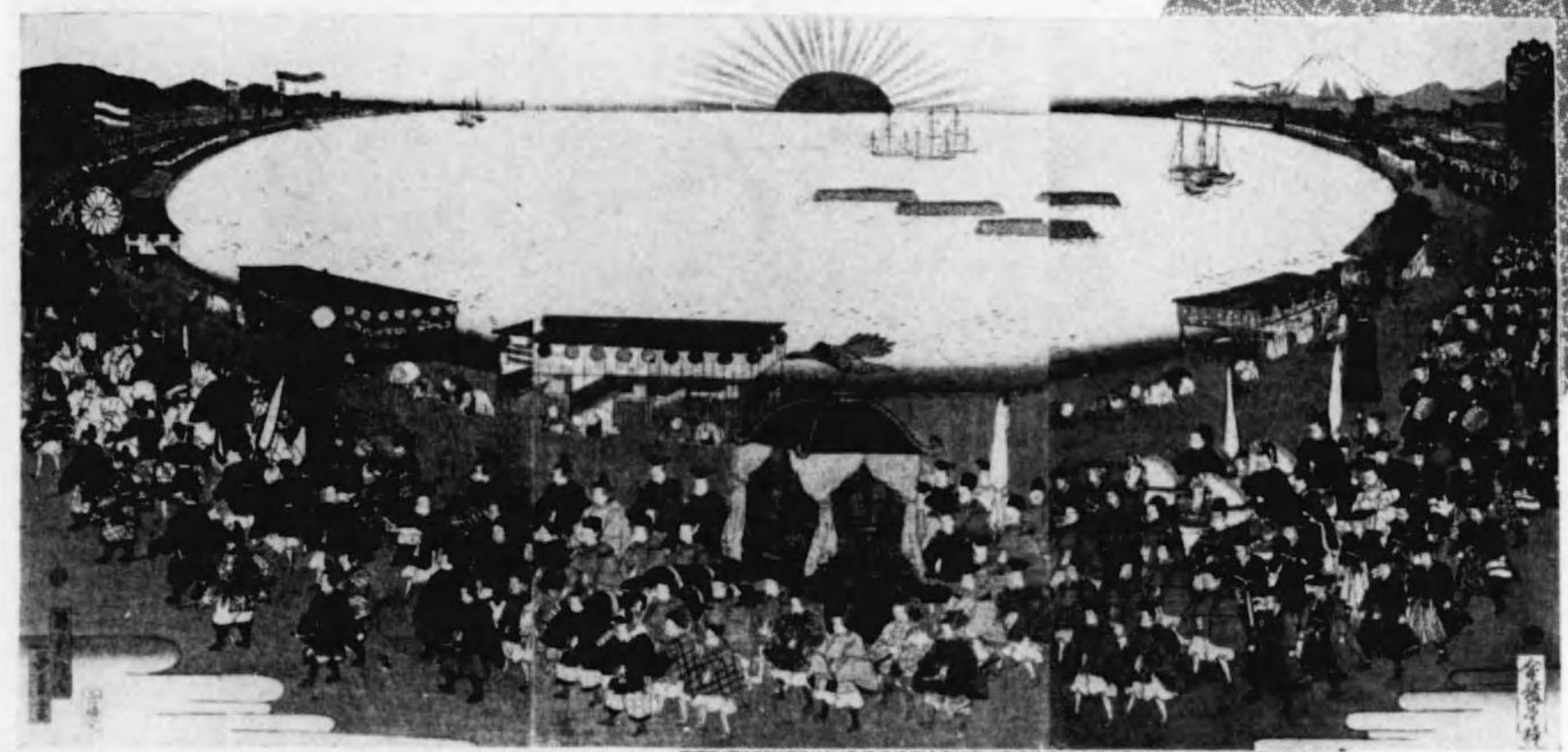


(年元應慶) (圖貴賤價物) げあこた

(年三治明) 所績紡堺



(年元治明) (圖幸東御) 浦ヶ袖京東



海運橋通坂本町
生産引立會所
(明治二年)

圖之所張元京東

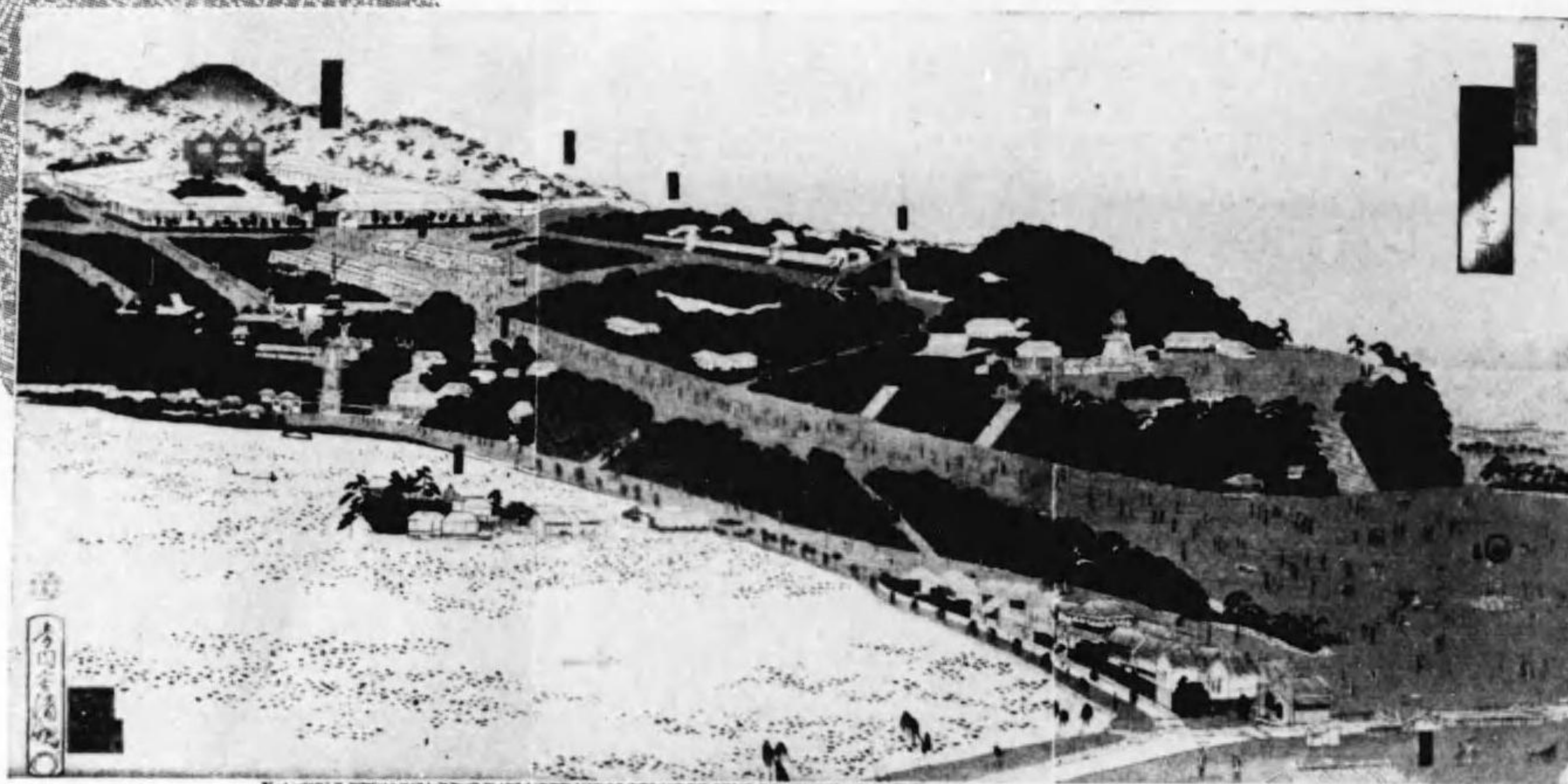


(年二治明) 座銀の前以り造瓦煉町張尾

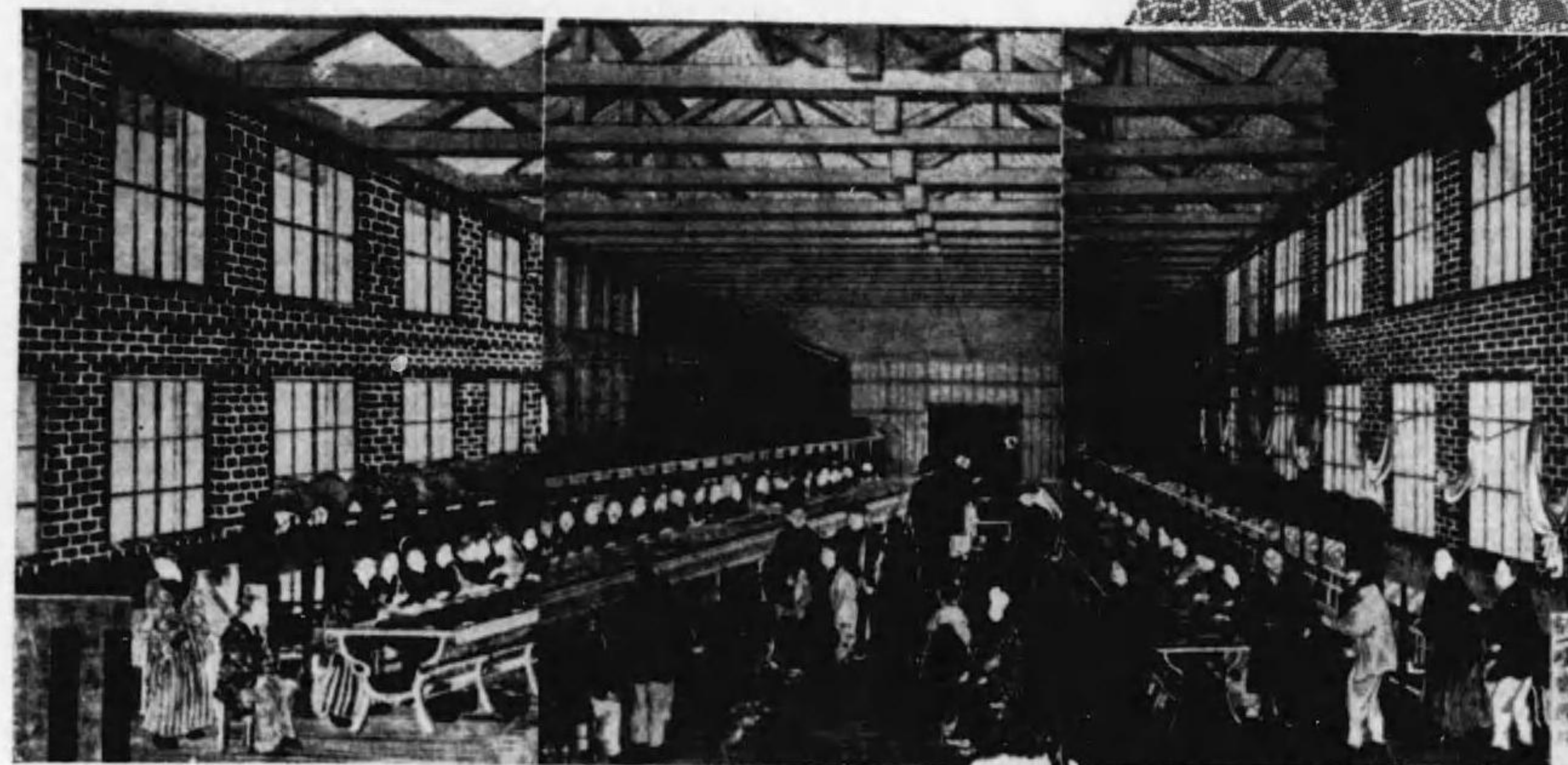


(年四治明) 圖繁館商西利吉英濱橫

（畫親請 年十治明） 會覽博業勸國內回一第



（年五治明） 場 絲 製 岡 富

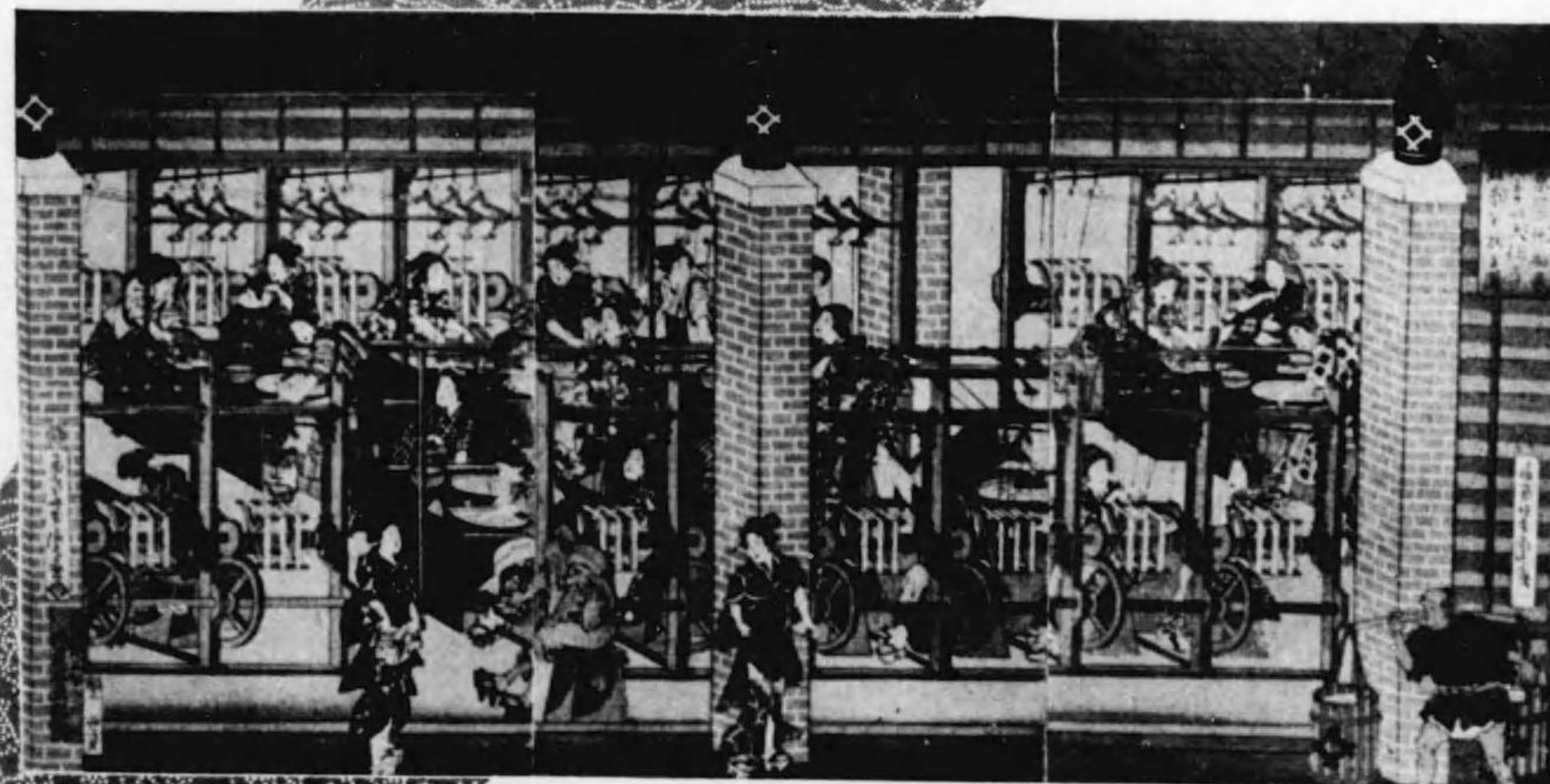


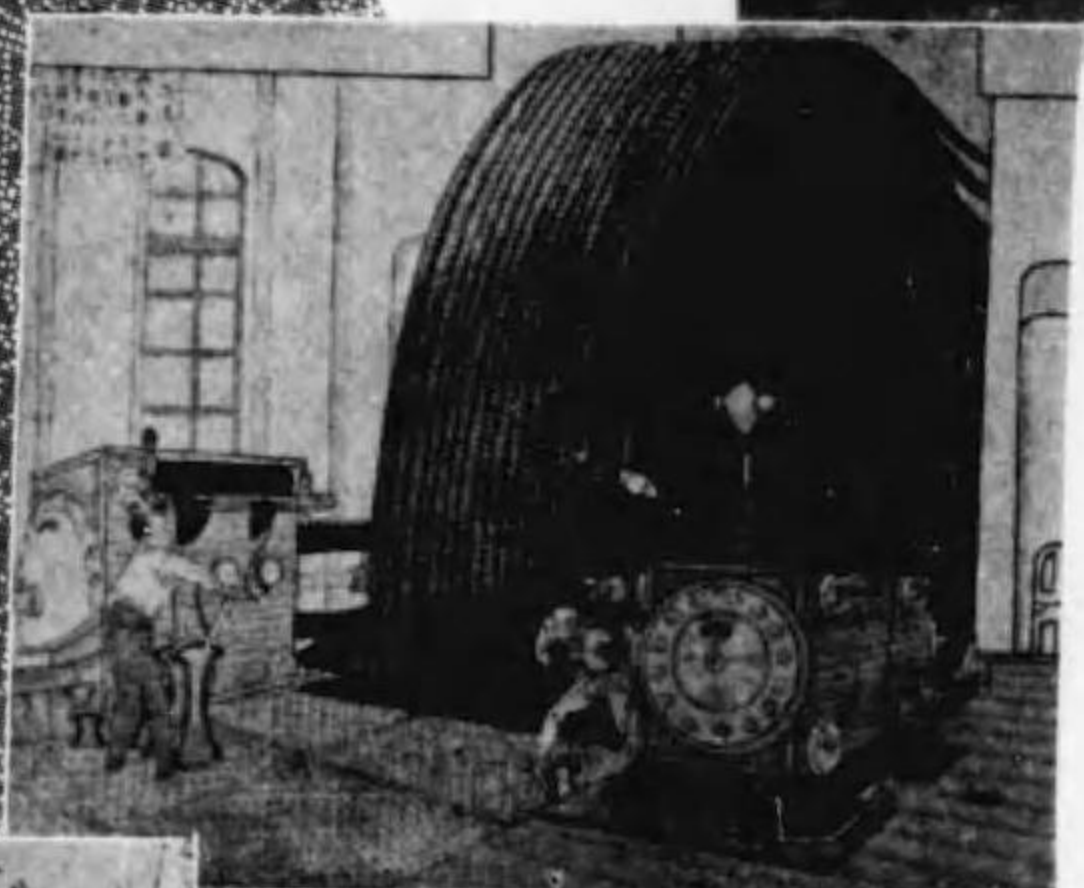
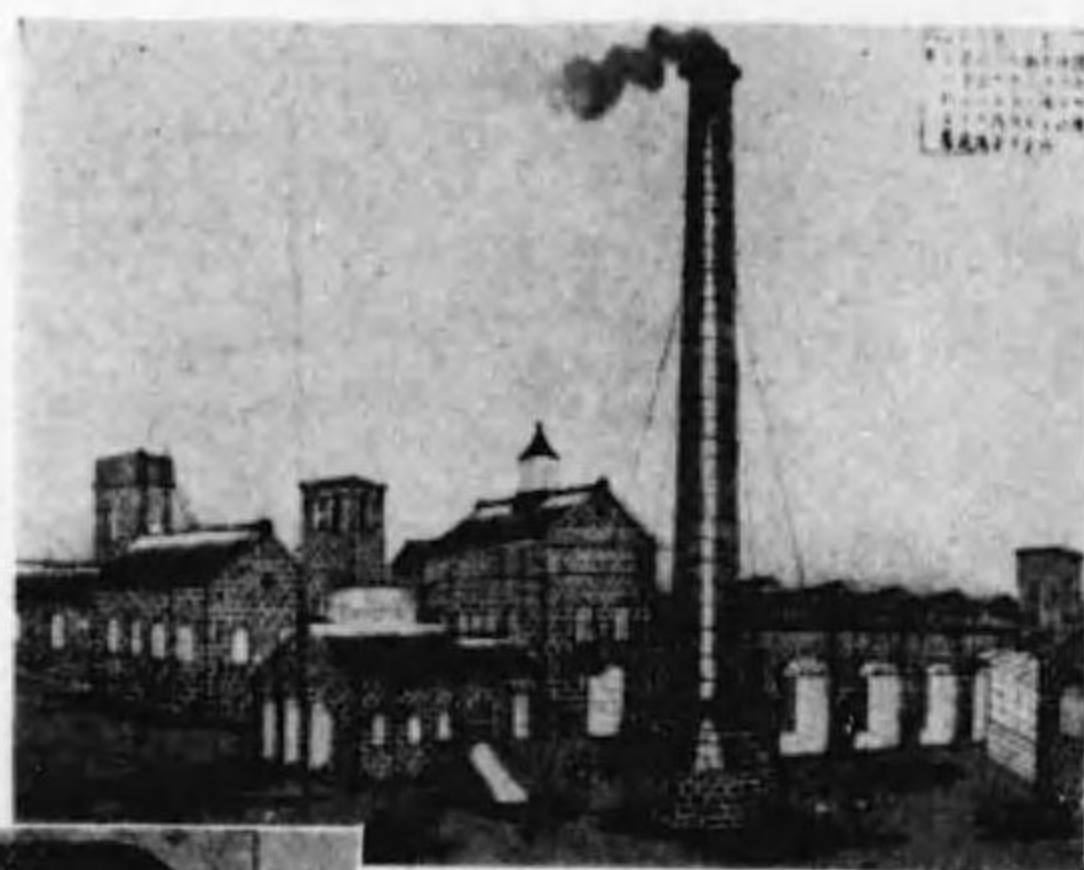
川口鍋釜製造圖



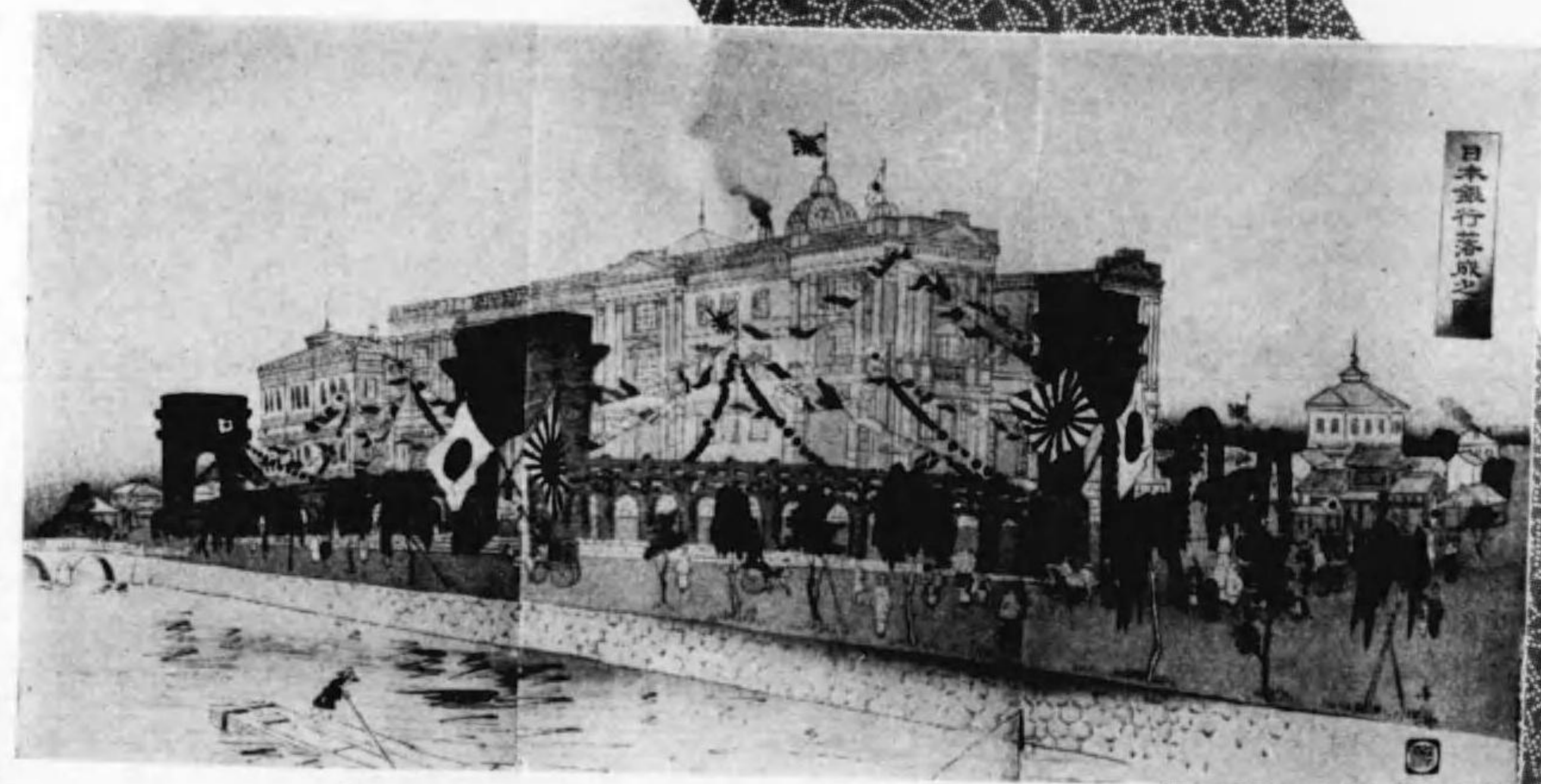
（年二十治明） 競 業 職 工 諸

（年五治明） けか仕大いまんぜ來舶地築京東



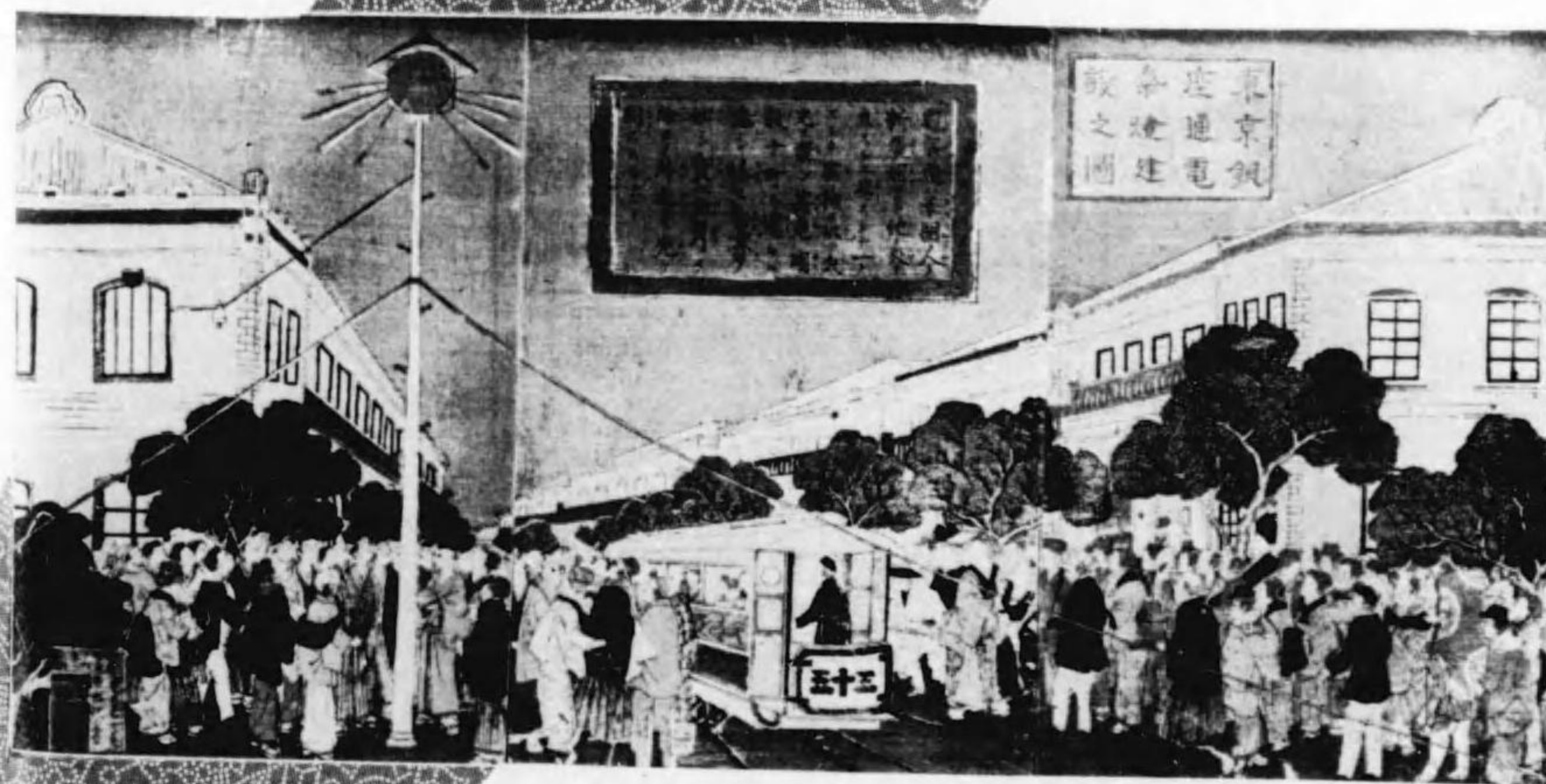
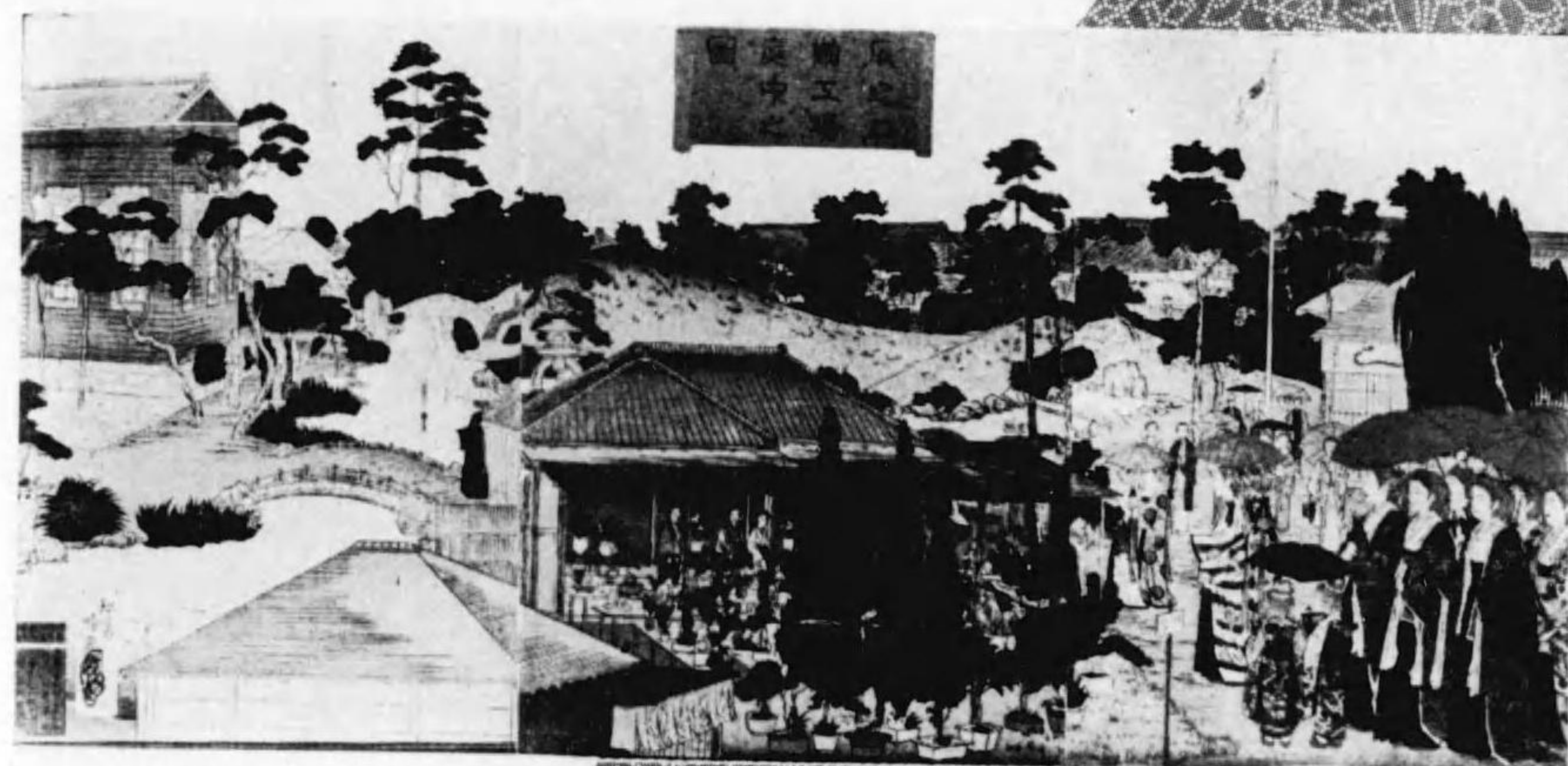


鐘淵紡績會社圖
(明治二十八年)

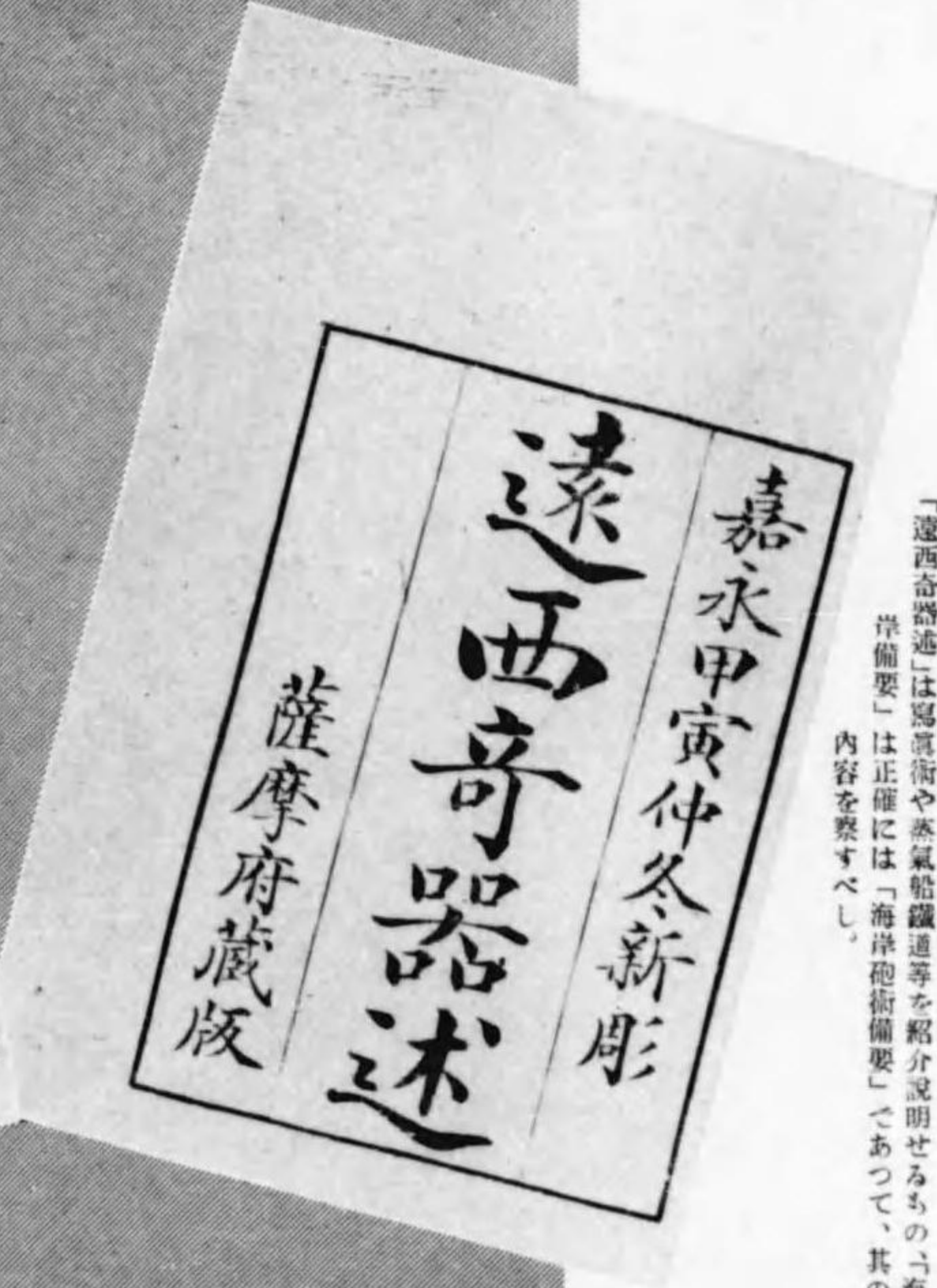
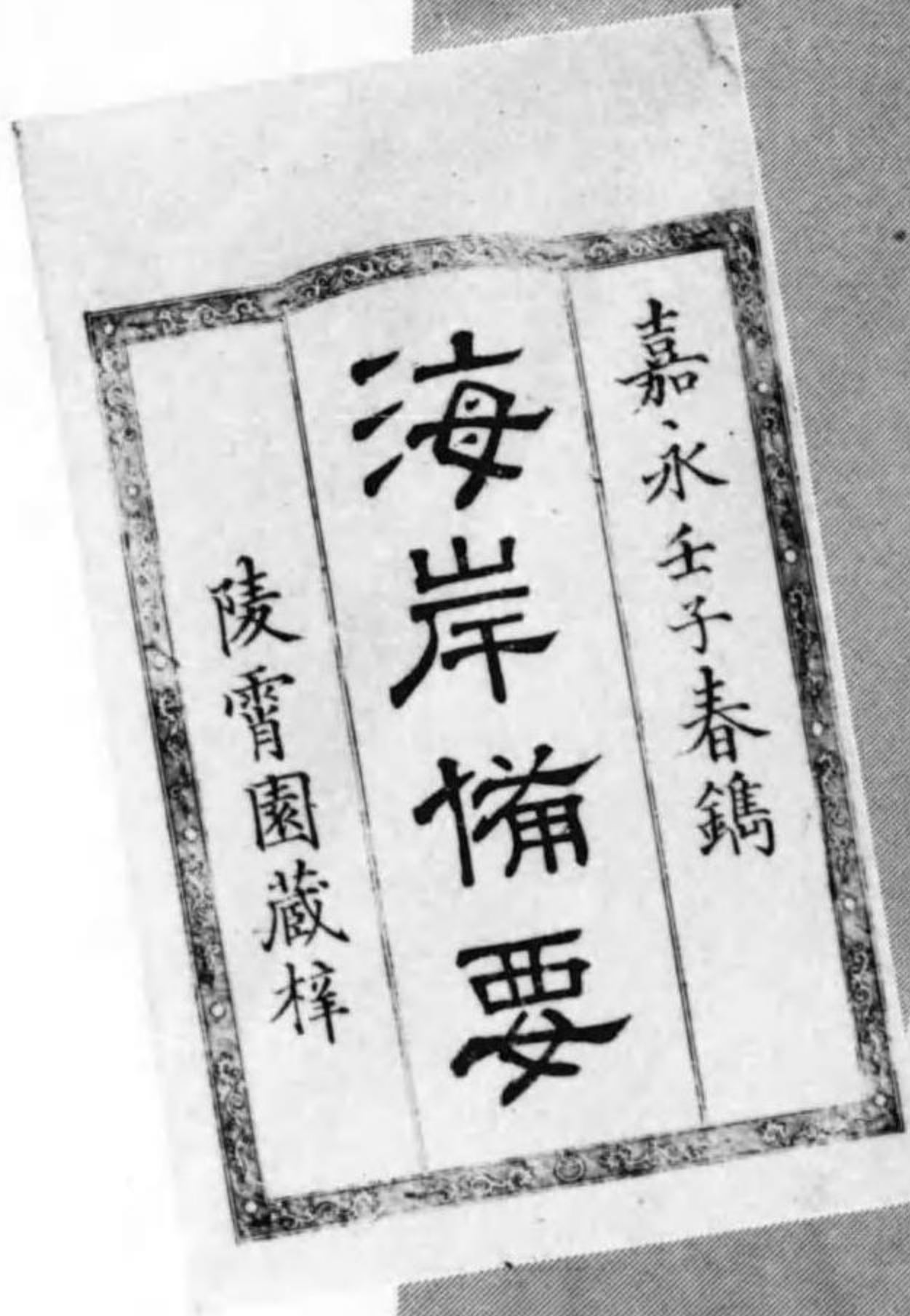


(明治廿九年) 日本銀行落成

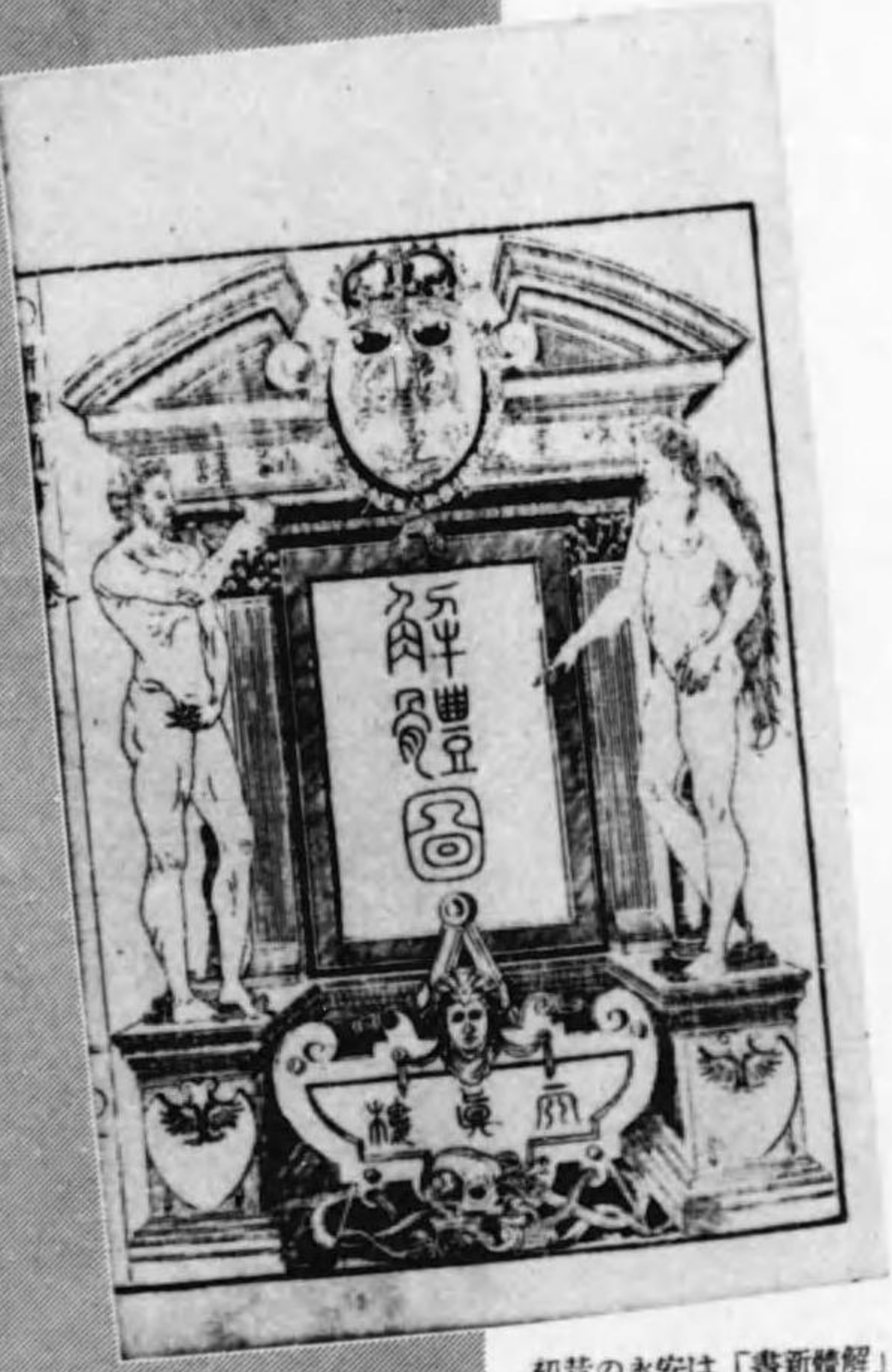
(明治五十年) 辰ノ口勸工場



(明治五十年) 東京銀座通電氣燈之圖



「遠西奇器述」は寫眞術や蒸氣船鐵道等を紹介説明せるもの。海
洋備要」は正確には「海岸砲術備要」であつて、其の
内容を察すべし。

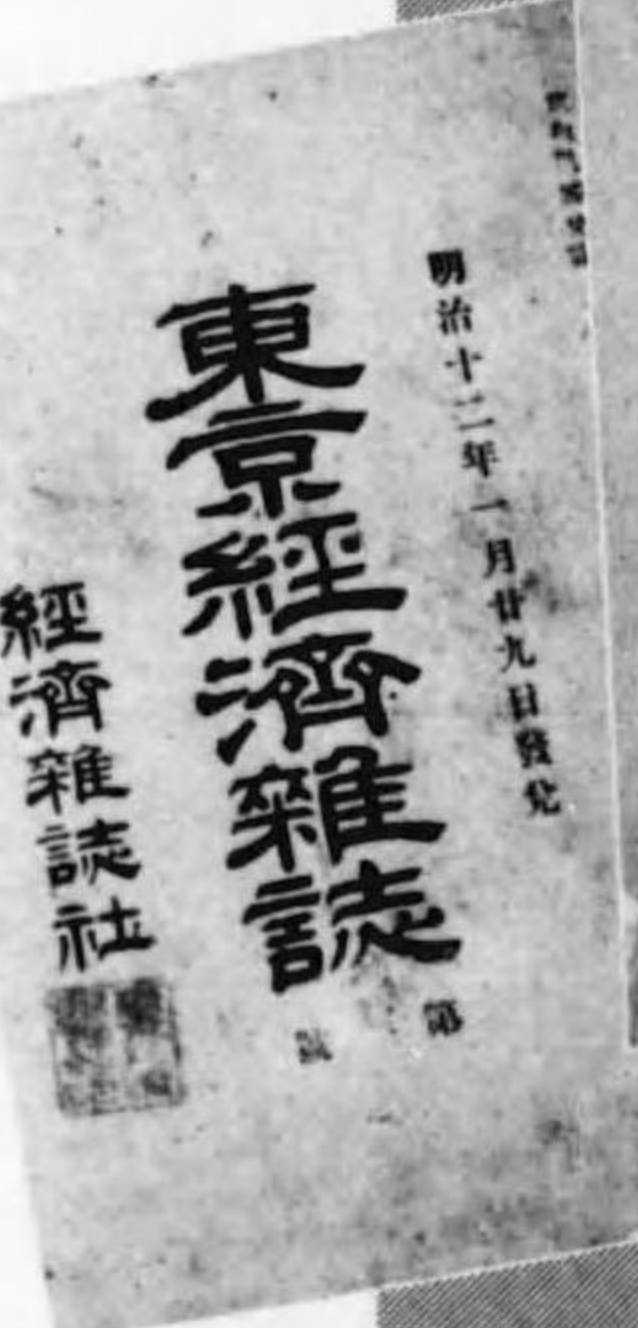
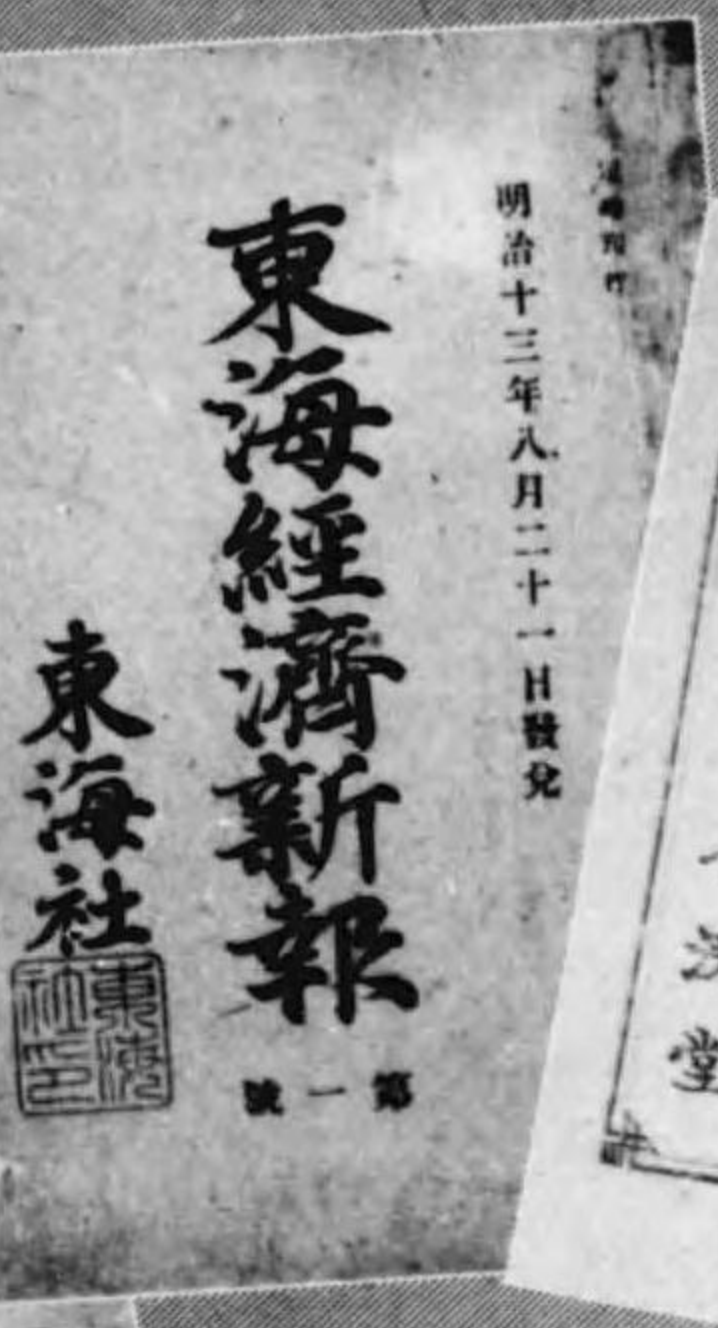
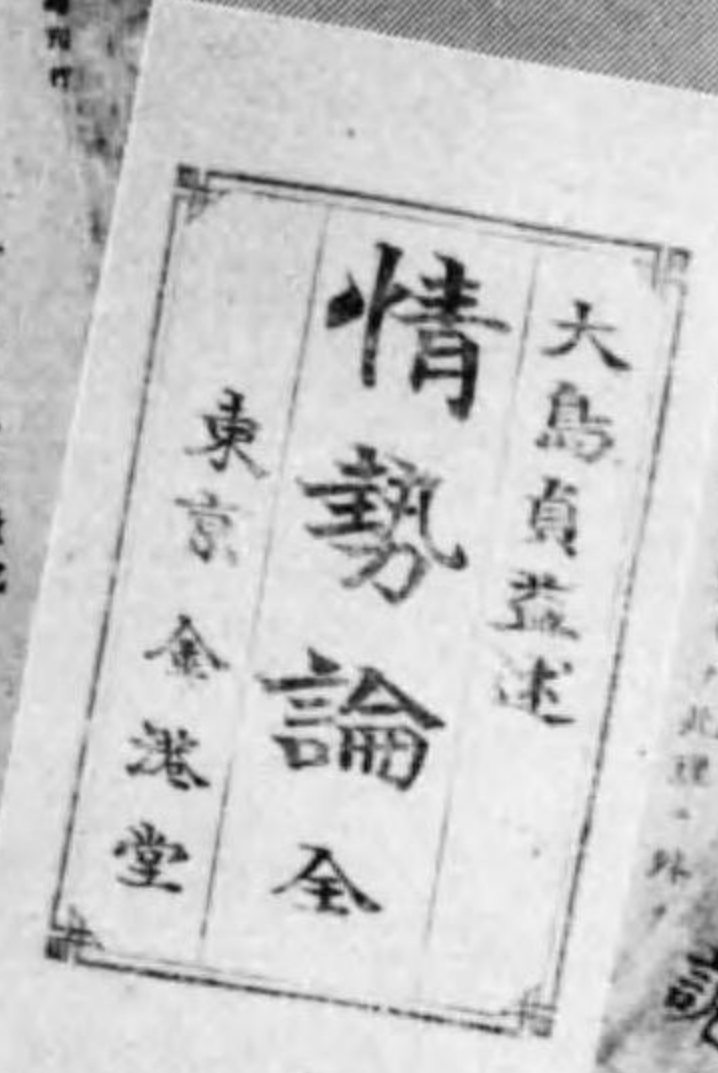


初巻の永安は「書新體解」
出譯りよ書讀し驗實てめ
。書割體人の初最たし

人邦は「書新馬解」
馬の初最る成に手の
。書割體人の



自由と保護主義の代表的著書に雜誌を示
す「東京經濟」は自由主義「東海經濟」は保
護主義「保護稅說」は明治四年「自由保護貿
易論」は十三年「自由貿易論」は十四年「情
勢論」保護貿易論は廿四年刊。



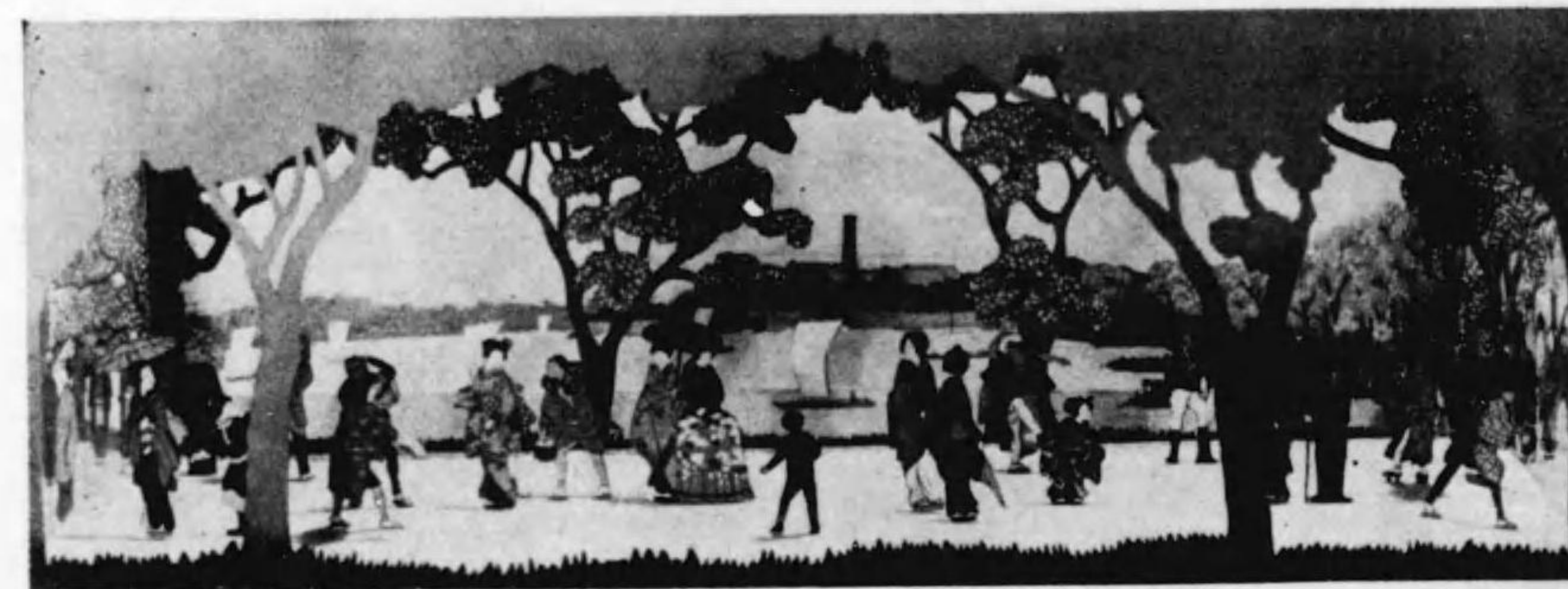
景三マラオヂ



(年元延萬) む望を濱横りよ臺川名神



(年三治明) む望を館商國外りよ場止波濱横



(年二十二治明) む望を社會績紡濶鐘りよ堤墨

海國圖志敘
海國圖志六十卷何所據一據前兩廣總督林尙書所譯西夷之四洲志再據歷代史志及明以來島志及近日夷圖夷語鈎稽貫串創榛闢莽前驅先路大都東南洋西南洋增於原書者十之八大小西洋北洋外大西洋增於原書者十之六又圖以經之表以緯之博參羣議以發揮之何以異於昔人海圖之書曰彼皆以中土人譚西洋此則以西洋人譚西洋也是書何以作曰爲以夷攻夷而作爲以夷款夷而作爲師夷長技以制夷



理學入門は邦人の手に成る繡刻木版印刷の蘭文書

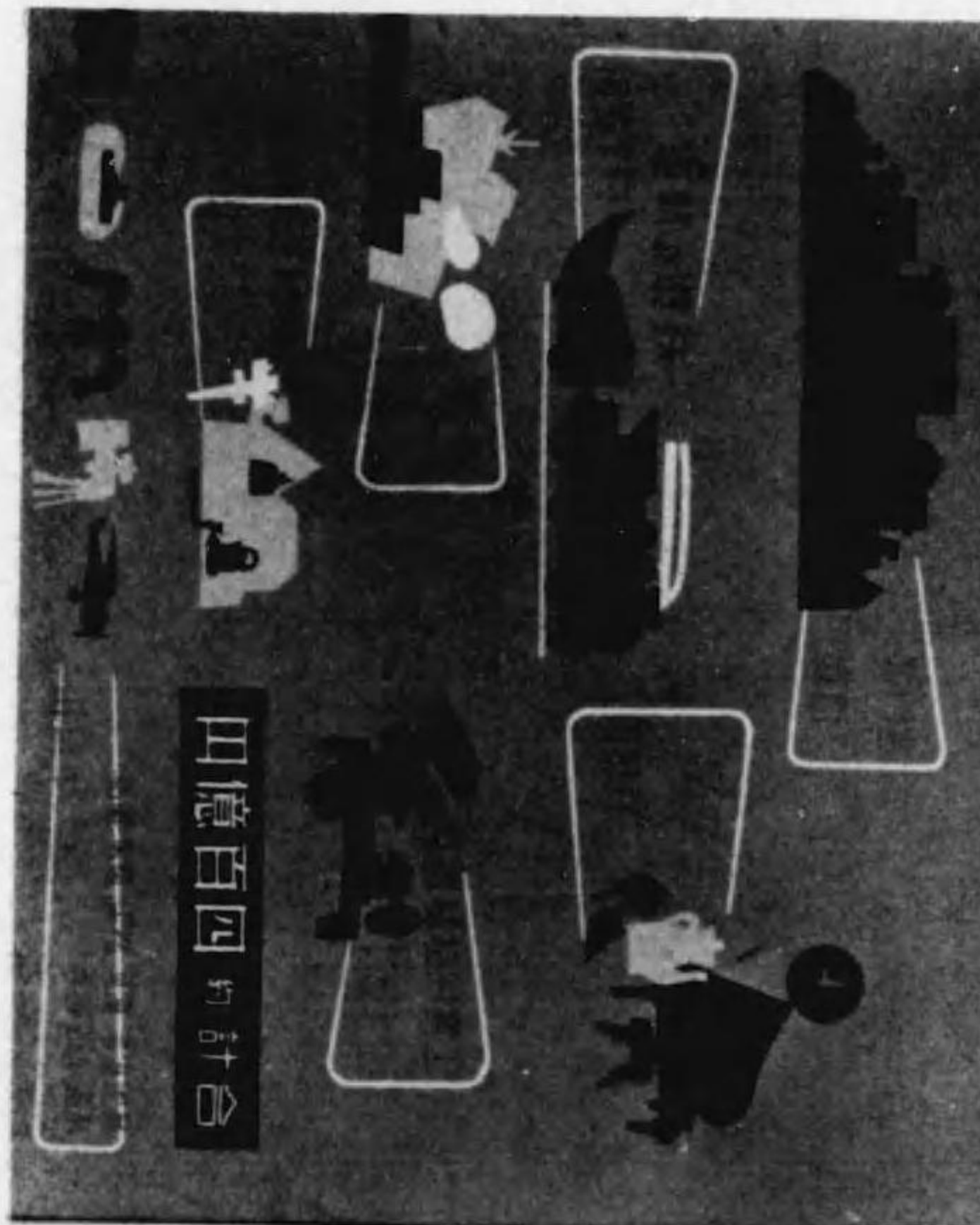


此の繪は文久三年刊行著「濃濃記」の挿繪で、蒸氣車を出す見世とは米國の停車場のこと

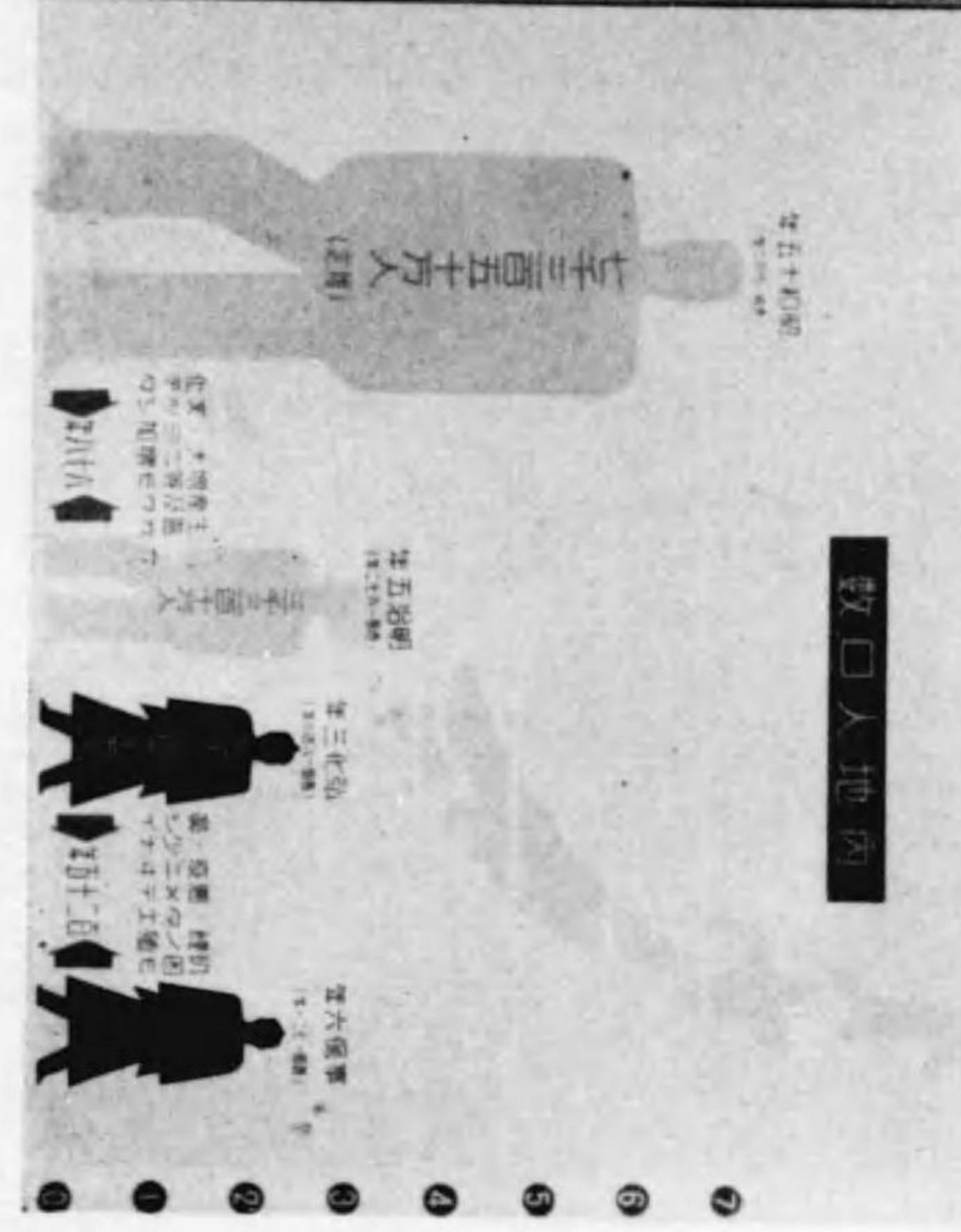


鹿兒島藩藏版

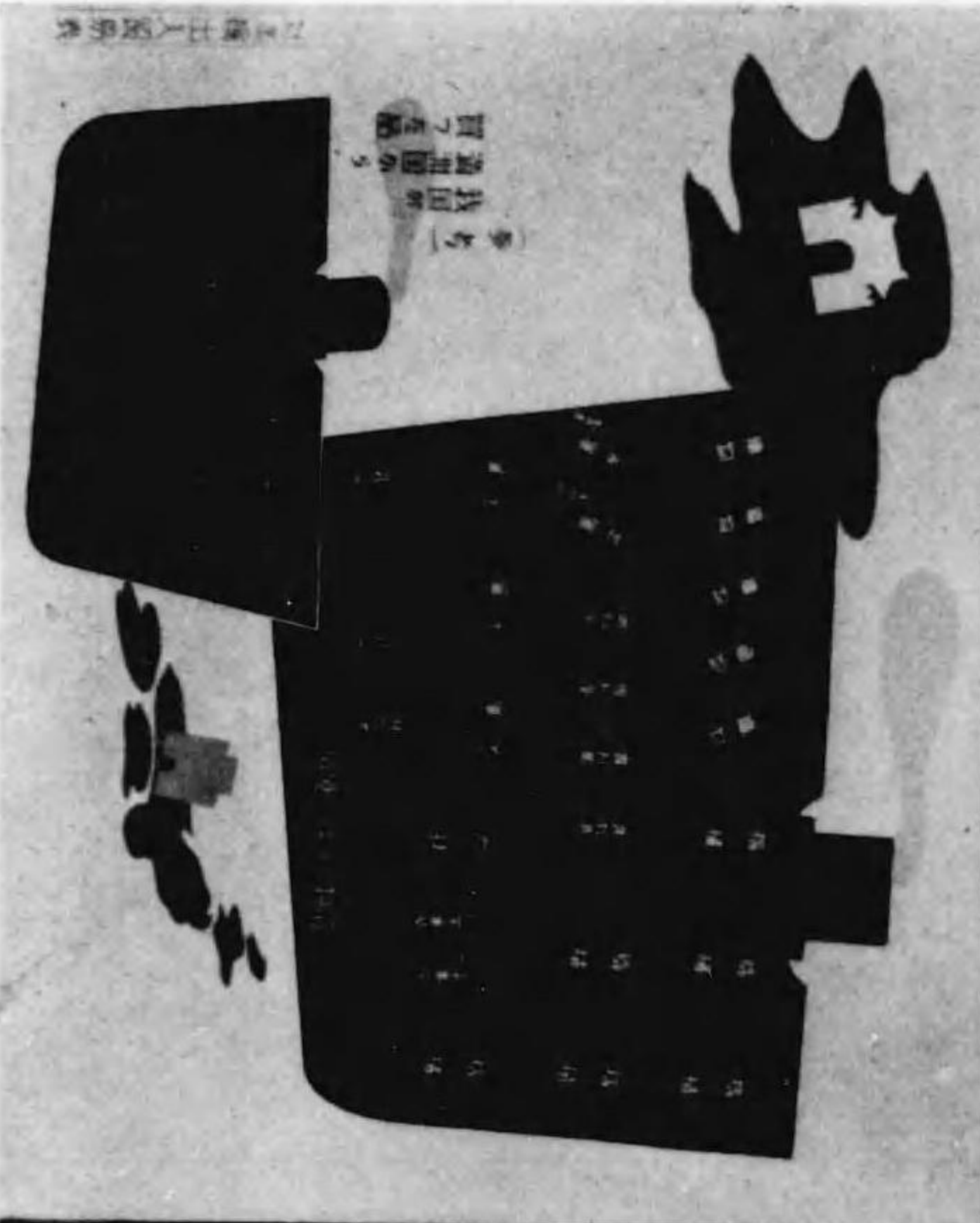
■結は力努の祖父の遺私——物
 367ツなと物の額巨テシ



鐘印ハ遺私ハレ又較比二代時川徳
 ルテ示福幸モ示ケルナナハ遺二疫垂



■年四十外年二十期
 人



活生費消の国列



部一の面場列陳場會覽展
(店本越三 京東)



錦繪・地圖・版畫目錄

錦繪や其他の版畫類では、經濟現象を描寫したものは至つて少ない。多くのものは、凡そ其れとは、全く對蹠的な、頗る縁の遠い存在なのである。だから之等の繪畫を以て、經濟現象を説明するとしたら、素より無理で、反對に觀者が、之等の物の中に、經濟史的な何物かを發見して満足すると云ふより仕方が無い。

左に選擇したのも、多くは此範圍を出ないものであるが、それにしても出来るだけ、經濟文化の條件に、則するものを集めたつもりである。

又中には、繪畫と、説明のピントが、しつくり合つて居ないものも多いことは争はれない。併し乍ら之れを以て、觀者を満足せしめ得ないとしても、其一半の責任は資料の性格に根本原因があるのであり、單に編者の怠慢の爲めばかりで無いことは、よく諒解していただけることと思ふ。

享和二年

肥州長崎圖 縦二尺七寸(鯨) 繪圖 一枚

諸國名所百景 大錦 一枚 廣重
長崎丸山之景(安政六年)

日本と歐洲との貿易關係は、今から凡そ四百年前、天文十二年八月葡萄牙人が始めて種子島に渡來した時が濫觴であつて、その後百年の間、彼我貿易は、盛んに行はれ、内外文化の交流著しいものがあつたのである。即ち築城、兵器、衣服、食物、什器は素より、言葉等に於ても、今日我等の日常語となれるもので、其當時洋語なりしものは甚だ多く、日本歴史上の、「戰國時代」の清新澁潮さも、正に之れに照應して考へられねばならぬものであつた。

其後寛永十六年、徳川家光が鎖國條例を布いて以來、通商はたゞ長崎で、和蘭一國のみが許さるゝこととなり、嘉永六年ペリー來航まで約二百年、其間貿易も著しく衰微したのであつた。

だが蘭學を通じて此町から輸入された西洋文化は、幕末開國の上に、極めて重大な役割を爲したのである。

文政年間

江都勝景日比谷外之圖 大錦 一枚 廣 重

江戸は、大名屋敷、旗本御家人等の邸宅が揃比して居て、通常町家の區域は狭少なものであつた。江戸町人の多くは、これら封建武士階級に依存して居たから、只管御治世の泰平を謳歌して餘念はなかつた。だが此頃になると無意識的であるが、社會的には或る胎動するものを感じて來たのである。

天保五年

毛そり九右衛門

市川海老藏

大錦

一枚

國

貞

昔の芝居に出た洋服姿、近松の書いた「博多小女郎浪枕」から、市川海老藏が補修した密貿易者「毛刺」である。

天保五年正月興行の市村座の芝居で、科白にバツテン言葉を探り入れ、舞臺にビードロ、ギアマン、吳呂服、フラッコ、テレンフ等の珍品を陣列して見せたといふ。

天保八年

大日本廻船針筋之圖 13X13 錦 (一枚續き)

弘化初年

諸商賣忠義若者出世考見(弘化物價騰貴)

中版 錦 三枚續

東都大傳馬街繁榮之圖(木綿店)

大錦

三枚續

廣

重

問屋は江戸に十組問屋、大阪に二十四組問屋等があり相連絡して盛んに商業を營んだ。問屋は幕府に冥加金を納める代償として、他方組合員にあらずして、其業を營む者を禁止した。其營業權は株式と稱し、一株の價五、六十兩より高きは三、四千兩に及んだといふ。明治元年五月商法大意の布達によつて、從來の特權制度を廢除し、こゝに始めて四民は職業の自由を得るに至つたのである。

嘉永初年

卯之花月裏長屋

大錦

三枚續

豐

國

「初聲」ソロバンの無い家で買ひ(古川柳) 江戸の街の裏長屋の光景である。

淺倉當吾百姓一揆

大錦

三枚續

國

芳

封建政府の財政は、田租畑租によつて賄はれたものであるが、幕末に至り幕府諸藩の財政が、益々窮乏するに從ひ、必然的に苛斂誅求を伴はざるを得なかつた。加ふるに、商業經濟が發展して來るにつれ、商業資本、高利貸資本等による收奪が行はれ、直接間接に、農民の窮乏化に拍車をかけた。幕末百姓一揆の累増は正にこの事を語るものである。

農家耕作之圖

大錦

三枚續

貞

秀

蠶繁榮之圖

錦

三枚續

國

安

嘉永六年

黒船來航、下田、浦賀、江戸灣内御固圖

大々判 瓦版 一枚

六月三日亞國水師提督ペルリ、浦賀に來りて互市を乞ふ。軍艦四隻の威力を以つて、頗る強硬に要求して來たのだから、幕府の狼狽、四民の驚愕一方ならず、此圖の如き御固めに狂奔したのであつた。だが、此現象を經濟史的の言葉で表現すれば、「當時既に高潮期に達した歐米資本主義の巨濤が當然日本にも打寄せて來た」のであつた。

泰平安民畫圖、御臺場御固圖(安政元年)

大判 瓦版 一枚

安政二年

下田 地圖

26X47

地圖 一枚

安政元年三月開港。安政四年、米國總領事タウンセン・ド・ハリス此地に在住す。五年六月、神奈川開港が決定せられ、萬延元年此港は閉鎖せられた。

江戸名所道戲盡

大錦

一枚

廣

景

安政六年に此カリカチュアあり。當時既に洋式訓練の盛んなりし様が想像せられる。

諸國名所百景

錦

一枚

佐渡 金山

慶長六年徳川家康の手に屬して以來、幕府の金銀通貨は、多くは佐渡産出の金銀を以つて製造せられた。佐渡は金山の代名詞となり、永い年の間、全く「佐渡へ佐渡へ」と草木も靡く一勢であつたのである。明治二年政府の官行となり、同二十八年三菱に拂下げられた。横濱明細圖 130X137 地圖 一枚 高島計之(紙袋付)

横濱圖として最初のものである。安政五年六月の條約では神奈川を開港することになつて居たのであるが、神奈川は東海道交通の要路であり、且當時攘夷論が盛んで、天下鼎沸の如き有様であつたから、不祥事などの頻發せんことを恐れ、幕府は遂に意を決して、神奈川から南方一里、久良岐郡新田横濱村を開港することにした。これで横濱村の磯打つ浪は、ロンドン橋の下を流れる水と、一脉相連することになった。

萬延元年

御開港横濱大繪圖

23X43

錦

三枚續

貞

秀

金川ヨリ横濱遠見の圖

大錦

三枚續

芳

虎

世の中ごます利

大錦

二枚續

(諷刺畫)

安政四年刊の大橋訥庵著「開邪小言」に「近世ハ西洋ノ學ト云フモノ盛ニ天下ニ行ハレテ

人ノ貴賤トナク地ノ都鄙トナク、フランスノ、英吉利ノ、オロシヤノ、共和政治ノト云ヒ喋ハギテ我レモ我レモト云々」

とあるやうに當時西洋思想は、相當滲透して居たから攘夷黨から見たら、此繪で諷して居るやうに、醜く、胡麻すりにも見えたのであらう。

神奈川横濱新開港圖

大錦 三枚續 貞 秀

開港の條約が神奈川となつて居るのに、街道から遠く離れた邊鄙な横濱を開港したのでから、一時は物議の種となつたが、結局横濱も神奈川の内だと強辯して問題は落着した。此圖の標題や、後に神奈川縣名が出来たりしたのも、皆其消息を語る遺物である。

亞墨利加國御上使御名前

大々版墨ズリ一枚

萬延元年正月幕府最初の遣外使節新見豊前守等、日本出發の圖である。此繪で見ると、兜を冠つた出陣のいでたちであるから、異狀の緊張振りで出掛けたものと思はれる。尙一行の大統領謁見の日記によると「合衆國は宇内一二の大國なれど、大統領は總督にて、四年目毎に國中の入札にて定むる由なれば、國君にあらざれど、御國書も遣はされければ、國王の禮を用ひけるが、上下の別もなく、禮義は絶えて無きことなれば、狩衣着せしも無用のことと思はれる」。とあるから、狩衣も持参したのであらう。當時狩衣は武士のフロック・コートであつた。

文久元年

亞墨利加國蒸氣車往來 大錦 三枚續 芳 員

蒸氣車の模型は既にベルリの獻納品中にもあつたのだが、此種の繪畫が頻りに出版せられたのを見て、新時代と新産業へのあこがれが、強くなつて來たことが想像せられる。

亞米利加國大船之圖

大錦 三枚續 芳 幾

其餘五箇國大船之寫生遠景 船に對するあこがれは、安政六年開港後の船舶購入額が幕府三百二十餘萬兩、諸藩四百四十九萬兩であつたといふ事實によく現はれて居る。

佛蘭西寫眞機

大錦 一枚 芳 員

横濱渡來商人

大錦 一枚 芳 秀

「物價頗に騰貴し、一定の俸祿に衣食する士人は最も困難を蒙れり。此に於いて外夷奢侈品を日本に輸出して、日常生活必需品を日本から奪ひ、我れを疲弊せしめて、遂に吞噬の志を逞しくするものなり。此禍を開けるは幕府なりと、天下を舉げて罪を開港に歸し、ひたすら幕府と外人とを嫉視するに至れり」(滋澤榮一氏徳川慶喜公傳)

亞墨利加人遊行酒盛

大錦 一枚 芳 虎

神奈川權現山外國人遊覽

大錦 三枚續 芳 員

英米佛の三國公使は、慶應三年まで此地にとゞまつて居た。

横濱異人商之館圖

大錦 三枚續 貞 秀

當時の貿易は外國商館への賣込貿易であつた。従つて外國商人によつて貿易權は壟斷され、日本商人の利益は少なくなかつた。そして之れはずつと明治の終りまで續いた。

武州横濱八景之内

大錦 一枚 芳 虎

吉田橋乃落雁英吉利人

伊勢崎町と馬車道との間にかゝれる橋が吉田橋なり。今日の股賑に引較べて、これはまた何といふ寂しきであらうか。今昔の感に堪へず。

横濱鈍宅之圖

大錦 三枚續 貞 秀

日曜日外人遊覽の圖なり。

亞米利加國蒸氣船中之圖

大錦 三枚續 芳 員

アメリカ人ばんをやく圖

大錦 一枚 芳 員

バン・ピスコイトは、諸藩に於いて、兵糧として製造を試みたのが始めであつた。

文久三年

古今こん惡狐退治

大錦 三枚續 芳 虎

當時公武合體論者の心中を現はしたものの。封建制度打倒などは夢にも思はざりき。

三韓征伐之圖

大錦 三枚續

文久二年の攘夷令により、長藩では、下ノ關通過の諸國艦船を數回にわたつて砲撃した。京師にては其功勞を賞せられたのである。然るに元治元年八月英佛米蘭四國艦隊聯合して下ノ關を攻撃して來た。戰鬪四日、長藩遂に抗し難く和を乞ふ。此時の賠償金三百萬兩なり。これによりて外國兵力の強大を知り、攘夷論頗に衰ふ。

蒸氣船全圖 海上浦賀風景

錦 三枚續 貞 秀

嘉永六年六月三日、北米合衆國使節ペリー始めて此地に來航す。

慶應元年

子供遊風あげくらべ

大錦 三枚續 芳 虎

生産力の増加が伴はないで、大量に物資を輸出した爲め、國內物價の異狀の騰貴となつた。且財政窮乏の結果としてのインフレーションは、これに拍車をかけた爲めに、安政六年から慶應三年に至る八ヶ年の間に、生糸二倍、茶三倍、蠶卵紙十倍、昆布三倍、棉花四倍、米四倍とそれ／＼價格が暴騰した。此繪はこれを諷したものである。尙此物價高は小祿武士の生活を一層困窮に陥らしめ、其思想を日に日に激化して行つた。而して此激化こそ、幕府の倒壊を促進したのである。

慶應二年

新吉原あんじもの 大錦 三枚績 芳 艶
世の中不安の世相を現はしたもので、幕府倒壊の前夜である。

諸色戲場春昇初 (諷刺畫) 錦 三枚績 國 周

インフレーション圖

川中島大合戦之圖 大錦 三枚績 芳 年

戦争が俄然近代的となった。

慶應三年

江戸名所之内 本郷 大錦 二枚績 芳 虎

幕府巡邏兵

江戸名所之内 筋かい 大錦 二枚績 芳 虎

幕府巡邏兵

騎兵體歩兵體 大錦 二枚績 芳 年

散兵大訓練之圖

大隊訓練之圖 大錦 三枚績 國 輝

明治元年

山崎大合戦圖 大錦 三枚績 貞 廣

一月伏見鳥羽の合戦。これまでは公武合體論が旺盛で封建制度維持の勢も強かつたのであるが、此戦争で討幕が決定的となり封建制度崩壊のモメントを爲した。

東京名勝圖繪海運橋通り 大錦 三枚績 貞 秀

坂本町生産引立會所

生産事業引立の爲め、援助金融など行ひたる所なるべし。元來、歐米の強大資本主義國に伍して、非常に立ち後れた日本としては、何よりも先づ富國強兵を計り、その手段として殖産興業に努力しなければならなかつた。殊に輸出産業の擴大強化、近代産業の輸入移植等については、政府は國力を以つて強行する必要に迫られたのであつた。

東京築地ホテル館之圖 大錦 三枚績

間取圖附

慶應三卯年九月、築地船板町御軍艦操練所跡へ、異國人の旅館を建てられ、且貿易の處とせらる。翌年夏の頃大抵成就す。擬名ホテルといふ。(武江年表)

東京名勝圖繪 鐵砲洲明石橋御運上所 大錦 一枚 廣 重

運上所とは後の税關のことである。安政五年の五ヶ國條約では輸出運上原則五分であるが、輸入運上は二割と規定されたのである。然るに慶應二年五月改稅約定により、この輸入運上は僅かに五分に引下げられた。これが爲め外國品が低廉となつて、日本産業の發展を妨げたことは大であつた。後年條約改正が頻りに叫ばれたが、日本が完全に關稅の自由權を獲得したのは、實に明治四十四年のことである。

明治改號御詔書 大々判 瓦版 一枚

嘉永年間より米相場直段並 錦 二枚績 大阪錦澤堂
年代記 書拔大新版

明治二年

攝州神戸海岸繁榮之圖 大錦 二枚績

神戸開港は慶應三年。神奈川を開港する筈が横濱となつたやうに、これも兵庫を開港する筈で神戸を開港したのである。

東京日本橋風景 三枚績 芳 虎

東京繁榮馬車往來之圖 大錦 三枚績 芳 虎

日本橋通り町並

交通の自由と、職業の自由とは、封建體制から、資本主義的新社會體制に轉換する前提條件であつた。右の二圖の如きものは、澤山刊行されて居るが、封建の支柱をなした身分制度から解放された四民の喜びをまざまざと示して居る。

東京名所内櫻田全圖 大錦 三枚績 國 輝

明治二年の二重橋圖

日比谷門の圖 大錦 一枚 國 輝

翌三年、市内諸見附は取拂はれた。之れも亦、新時代への移行の爲めには、必要の條件であつたのである。

明治三年

東京高輪鐵道 大錦 三枚績 國 輝

蒸氣車走行之圖

東京名勝圖繪

高輪英吉利館

酒間座興酌妓婦

大錦 一枚 廣 重
大錦 三枚績 國 周

此繪を見て何よりも先づ感ずるのは、維新の志士の年齢の若さである。同時に又彼等は、當時の進歩せる智能でもあつた。年齢の若さと、進歩せる智能とが、先頭に立つて、あの曠古の大革新は成し遂げられたのであつた。

子供芝居忠臣藏四段目 大錦 二枚

(諷刺畫)

明治元年四月、幕府は江戸を開城した。當時此種の諷刺畫は澤山刊行された。圖中、大石内藏助は會津藩で石堂右馬之丞は鹿兒島藩である等々、皆それれ、着物の模様などで、暗示的にわかる様に描いてある。

名所之内 上野 大錦 三枚績 芳 盛

上野戦争直前の光景。五月十五日彰義隊の戦争で此繪にある東叡山寛永寺の堂塔伽藍は、僅かに清水堂を残して兵燹にかゝつてしまつた。

春永本能寺合戦 大錦 三枚績 英 齋

上野彰義隊の戦争。當時當局を憚かつて、こんな畫題を附けたものである。

東京袖ヶ浦景 大錦 三枚績 國 政

御東幸圖

鳳鞞江戸城入城之圖 大錦 三枚績 芳 年

明治元年十月十三日御入城

明治二年英人レリの建言に基き、英國に於いて九分利外債、英貨九十三萬磅(四百五十三萬餘圓)を募り、我國最初の鐵道敷設に着手した。之れ即ち東京横濱鐵道である。明治三年三月起工、モレル以下外人技師の手によつて明治五年九月完成した。この繪は汽車開通より、二年前に板行されて居るから、勿論あこがれの想像圖である。

塀紡績所 大々判 錦 二枚ガケ一枚

慶應三年島津齊彬の遺志で、鹿兒島藩磯村に建てられたのが、我國に於ける近代の綿絲紡績工場の濫觴である。この塀の工場は其支工場として明治三年に設立されたもの。明治五年勸農寮の所轄となり、同十一年に至り民間に拂下げられた。周知の如く、開港以來、精巧にして且廉價な機械綿絲が滔々として輸入せられ、在來の家内工業的手紡綿絲では此勢を防止するすべもなかつた。茲に於いて政府は機械紡績業の保護育成に努力したのである。

東京往返蒸氣弘明船控帖 大錦 一枚

横濱波止場ヨリ海岸通 大錦 三枚 廣重

明治十年には、輸出貿易九割四分、輸入貿易九割五分が、外國商館に壟斷されて居た。明治二十年前後から内商漸く據頭したが、明治末年に至つても、なほ内外商五分五厘程度の勢力であつた。

女織蠶手業草 大錦 三枚續 國輝

當時生絲は我國貿易の最大輸出品で、全輸出額の五割乃至八割を占めて居た。

新貨條例の畫

錦 一枚

明治四年五月新貨條例公布

此改革では圓を基本とし、貨幣の流通に全國的統一性を與へた。且つ之れによつて國際性も生じたわけである。資本主義經濟の發展の爲めの、最も重要な條件の一つである。

大日本國產童蒙一覽 13X18 錦 二十三枚

東京築地船來せんまい 錦 三枚續 芳虎

大仕かけきぬ絲を取る圖 小野組は、瑞西人ミウラルを雇入れ、築地二丁目に五十人取りの機械を据付け、古河市兵衛に監督させて製絲を始めたが、明治六年に廢止した。

富岡製絲所工女勉強之圖 錦 一枚 朝孝

この新技術を傳習した工女達が、我が國機械製絲の開拓に貢獻したことは大であつたと。

富岡製絲所(内部) 錦 三枚續 國輝

政府は佛國人ブリュナーを聘して、上州富岡に模範製絲工場の設立を企圖し經費二十八萬圓を以て、明治五年十月竣工、操業を開始した。殖産興業をスローガンとした、政府經營事業の著しい例である。圖中洋人はブリュナー等で二人の紳士は當時の事務主任、玉乃世履と濹澤榮一ならんとぞ。

從汐留横濱迄 大錦 三枚續 廣重

蒸汽車鐵道往復之圖

明治四年

横濱英吉利商館繁榮之圖

錦 三枚續 芳幾

商品陳列場内部の光景

文明滑稽語録 1.5x1.85 寸 六 一枚 辻岡屋板

築地ホテル館に平伏參拜して居る順禮達。牛肉屋へ切込む舊弊武士。寫眞鏡、フランクケン(毛布)ビイル、カメ、ラシャメン、タモト時計、トンビカツパ、自轉車、シャボン、クロス(クリスマス)、ランプ、テレグラフ風玉、等々。

明治五年

地 券 大 二枚

土地所有權の確認、其賣買の自由は、職業の自由、交通の自由と共に、新經濟制度發展の爲めには不可缺の要素であつた。政府は此年二月、令して地券を下附し、土地所有の確證となさしめ、同時に「地所永代賣買の儀、從來禁制の處、自今四民共賣買致所持候儀被差許候事」といふ達しを出して賣買を自由にした。越えて翌六年七月、地租を改正し、地價百分の三を金納することにした。當時政府は、軍備や士族の秩祿處分、近代産業の保護育成等に關し、莫大なる費用を要したのであるが、それ等は大部分地租收入によつて賄はれた。従つて其負擔は、農民が背負はされたのであつた。

鐵道開業新橋夜景圖

錦 三枚續 芳虎

明治五年五月六日、横濱品川間の汽車の開通式を行ひ、同九月十二日、新橋鐵道館に於いて全通開業式を行つた。交通の發展、商品流通の敏速なうして近代産業の發達は望まれ得ない、政府が鐵道の開通を如何に重視したか、此圖を見ればよく理解せられる。

東京横濱神奈川縣 鐵道開業布告 印刷 半一枚

武州瀧野川村捻絲 器械圖並、會社庭中 錦 二枚分

紡績民業の開祖、鹿島萬兵衛の設置したもの。場所は王子の幕府舊反射爐跡なり。

昌平坂博覽會諸人群集之圖 錦 二枚續 一景

免役御條目略解 大錦 三枚續 芳虎

告諭に「人たるもの、もとより心力をつくし、國に報ぜざるべからず。西人之れを稱して血税といふ。其生血を以つて國に報ずるの謂なり」とありしより心得違ひなしたる輩もありしと。徴兵令の發布は明治五年十一月なり。これによつて武士階級は全く失業し、心甚だ平らかならず、明治七八、九、十年の相繼ぐ騷擾は、全くそれ等の階級の叛亂であつた。

東京木更津縣下 往返蒸氣船取扱所 大錦 一枚

東京名所之内銀座通 大錦 三枚續 國 輝

煉瓦石高館之圖
明治五年二月二十六日和田倉門内會津屋敷より失火し銀座全部、木挽町、築地門跡等四千八百戸を烏有に歸したり。東京府知事由利公正は三月二日建築制限令を發し、英人ワードワルスの設計に従ひ街區改正に着手し、明治七年表通り完成したり。此圖は明治五年の板行なれば勿論想像圖なり。

明治六年

衣食住之内家職初給解の圖 職業盡し 一巻 錦 三十三枚 國 輝

東京各大區の内
海運橋第一國立銀行 大錦 一枚 國 輝
明治政府は、諸政費の莫大なるに比し收入僅少であつたから、太政官札始め多額の官省不換紙幣を發行せざるを得なかつた。而して之れを整理が急務とせられて居たところ、明治四年の廢藩置縣に隨伴する諸種の問題も、共に解決を要したので茲に全國的統一金融制度の確立が要望されるに至つた。即ち政府は五年十一月新たに國立銀行條例を公布、翌六年八月に至り、第一國立銀行開業、次いで各地に國立銀行の設立を見たのである。此銀行に與へられた特權の一つは、銀行券の發行であつた。併しながら、眞に幣制が統一せられたのは、十五年日本銀行設立後のことである。

東京府下第一大區尾張町通 煉化石造商法繁榮之圖 錦 三枚續 國 輝

東京府下名所盡 大錦 一枚 廣 重

高代橋租稅寮
當時租稅の負擔は主として農民であつた。明治六年には經常歳入の八割五分が地租であつた。かくして新産業の移植は、少なからず農民の犠牲に於いて成立されたのである。

開化出世壽語呂久 120x120 寸 六一枚 丸屋版元

金貨、代言人、入札、開拓、牛店、常平社、仲買、官員、建築請負、商社手代、新聞社、人力車、組合會社等

童訓小學校教導之圖 大錦 三枚續 肉亭夏良

明治五年七月學制頒布

東京開化名勝京橋石造 大錦 三枚續 廣 重

銀座通り兩側煉化石商家盛榮之圖

銀座通りの街路樹はこの年から始まる。

臺灣牡丹征伐 大錦 三枚續 芳 年

石門進撃新聞

臺灣 征討

「内國に、不平の徒多きに當りては、先づ事端を國外に開き、國體の心を移して外に向け、以て敵愾の氣を一ならしむるは、古來政治家の慣用手段なり。明治七年、臺灣征討の事も、亦此の如きのみ。…此役我兵の戦死するもの僅かに十二人に過ぎざりしも、病に罹りて死するもの五百六十一人、財を費すこと殆んど七百八十萬圓なりき。…得るところは僅かに清國の償

舶來戲道具調法くらべ 錦 三枚續 芳 藏

和物戲道具調法くらべ 錦 三枚續 廣 重

東京名所三ツ井ハウス 大錦 三枚續 廣 重

明治九年八月銀行條例が改正されて、三井銀行が始めて私立銀行の魁として登場した。それまでは三ツ井ハウスなどと呼ばれて居たのである。私立銀行は八年僅かに四行であつたが、十二年には百五十三行となつた。國中、右側まちご屋に「證券印紙賣捌所」の看板あり。證券印紙規則は、此年發布されたばかりである。

明治七年

東京府下名所盡 大錦 一枚 廣 重

四日市驛遞寮

明治四年八月前島密驛遞頭となる。爾後日本郵政の發達は、同氏の盡力に俟つもの多し。舊來の飛脚屋も、明治六年頃まで尙相當勢力ありしが、同年五月一日より信書は一切私人による遞送を禁止せらる。

米 市場 錦 廣 重

明治七年米倉一平日本橋稻田堀(今の蠟燭町)なる西郷隆盛の邸宅地を購ひ、此處に中外商業會社を起して社長となり、其近傍の市街を開きて米市場を創めたり。

大阪府鐵道寮ステン所之圖 錦 三枚續 長谷川 小 信

大阪神戸間明治七年五月竣成

金五十萬兩のみ…然れども此一舉、無形に得るところ極めて大なり。(坪谷善四郎明治歴史下巻)此征討に際し政府は百五十萬兩を以て、十三隻の汽船を購入し之れを三菱に委嘱して、軍隊及糧食軍需品一切の輸送に當らしめた。後更にこの汽船を、全部無償で三菱に下附した。(土屋喬雄續日本經濟史概要)

明治八年

新開名所大阪町商社 大錦 一枚 孟 齋

爲替會社

明治二年五月以來、設立された爲替會社は全國で八ヶ所であつた。東京爲替會社は其の出資を、舊幕時代の爲替組の人々、即ち三井組小野組島田組などに仰ぎ、通商會社の金融援助や、一般の金融疏通などを計るを目的とした。

此會社も明治九年には全部解消してしまつたが、銀行の魁を爲したものと記憶せらるべきであらう。政府の殖産興業政策の一産物である。

東京諸官省名所集 大錦 一枚 廣 重

山下町博物館。明治五年二月博物館を博物館と改め、八月幸橋内元鹿兒島藩邸に移す。現今勸業銀行の在る地なり。十四年十月一日上野に移す。

王子製紙(古今東京名所)15x120 二枚 廣 重

明治八年七月諸般の準備整頓して、業務を開始するに至る。

飛鳥山王子製紙(墨摺)

錦

村井靜馬

士族の商法(諷刺畫)

錦 二枚續 永島辰五郎

明治九年

東京名所兩國報知社圖

大錦

三枚續 廣

重

熊本の賊徒ヲ討伐之圖

大錦

三枚續 孟

齋

神風連の亂

東京名所荒布橋ヨリ

大錦

三枚續 廣

重

第一回立銀行、北海道商會、驛邊寮等を望み、當時財界の中心地なり。

明治十年

第一回内國勸業博覽會之圖

錦

三枚續 清

親

大日本内國勸業博覽會

大錦

三枚續 周

延

第一回内國勸業博覽會

錦

三枚續 周

延

機械館の圖

錦

三枚續 周

延

大日本物産圖會

錦

四十二枚 廣

重

加州金澤製絲之圖

錦

三枚續 西尾慶治

明治小史年間記事

大錦

三枚續 芳

年

明治九年三重縣下の暴民、地租改正に對し不服にて騒動を起した。地租は、翌十年、二分五厘に減額されたのであるが、勿論農民は、それにも不服であつた。地租を軽減し得ない根本的原因是、日本資本主義の後進性にあつた。當時我國は、多少の犠牲を忍んでも、先進資本主義國に追付き、追越さねばならなかつたからである。

大隅薩摩海陸

大錦

三枚續 國

政

軍備一眺一覽

大錦

三枚續 國

政

開化諸官省教訓

大錦

一枚 國

政

鹿兒島軍記

八代口激戦之圖

大錦

三枚續 永

濯

士族達が、娘達まで動員して戦つても、組織ある平民の兵隊には敵しなかつた。武士階級の叛亂は此年にて終熄した。

築地海軍省於練練場

大錦

三枚續 廣

重

見物人の中に左團次梅幸芝瓶等も居る。此風船は當時海軍で製造したものである。陸海軍に於いては、軍事の工場を、すべて官營とし、近代機械工業を急速に移入する必要があつた。そして之れが我國機械工業の發達に大なる貢獻を爲したのである。

明治十一年

朝野新聞十一年

大錦

一枚 年

信

三月十八日號

第一銀行頭取澤澤榮一、三井物産會社社長益田孝、郵便汽船三菱會社社長岩崎彌太郎、廣業商會社長笠野熊吉等支那北部諸省連年凶饑、饑字野に滿つるを見るに忍びず、それが救恤の爲め義捐金を募集す。

故内務卿贈正二位

大錦

一枚 清

親

右大臣大久保利通公肖像

東京小學校教授双録

大錦

四枚懸 一枚 廣

重

明治十二年

東京名所銀座座通

大錦

三枚續 廣

重

朝野新聞社盛大之眞圖

大錦

三枚續 廣

重

諸工職業競

錦

十五枚 年

一

(十六枚重複一枚)

櫻田麥酒釀造所釀造社

ハガ 錦

明治八年清水谷商會、櫻田ビールの釀造を爲す。

(九年札幌ビール釀造)

グランド將軍像

錦

一枚 國

政

(東京各社選抜新聞)

川口鍋釜製造圖

錦

一枚 清

親

岡山城中博覽會圖

錦

五枚續 常

彦

明治十三年

常盤橋内紙幣寮之圖

横錦

一枚 清

親

横濱名勝競

大錦

一枚 國

松

瓦斯本局雪中一覽

大錦

一枚 國

松

我國に於ける瓦斯事業は、高島嘉右衛門が佛國人技師の設計により、明治四年二月工を起し、五年九月竣工したる横濱花咲町の瓦斯製造所が創め、後市營となる

富岡歩ミ初メ(インフレ)

米俵綱引の圖

明治十三年一月、政府及銀行紙幣の流通高は、一億七千萬圓を突破した。然るに正貨は却つて減少し、同年十二月七百十六萬圓となり、流通紙幣の六パーセントにも達せざる状態であつたから、紙幣價格は暴落し、物價は暴騰した。遂に十四年十月、松方正義の大藏卿就任と共に、この不換紙幣整理の強行となつたのである。これはインフレーションからデフレーションへの大轉換であつた。

綿糖共進會報告(口繪)

綿糖と砂糖とは、當時輸入品目の最大のものであつた。よつて政府は此二業の、内地に於ける發展を企圖し、其助成に努力した。後年盛大となつた我國紡績業と糖業とは、實にこれらの努力の成果であつた。此圖は大坂に於ける綿糖共進會の報告で、重要な意義を持つものである。

明治十四年

東京名所蠶殼町米市場

明治九年八月太政官布告を以て米商會所規則が發布せられ、こゝに始めて公開市場成り、公定相場なるものを見るの機運に達した。東京米穀取引所は米倉一平の米會所の成長したものである。

愛岐物産社

なし、頻りに近代産業の移植と育成とに努めたから、其結果は必然的に民間資本の伸長増大となり、それは又自由民権運動の勃興ともなつた。板垣死すとも自由は死せずの言葉は、正にこれを反映するものである。かくて民間資本の發達につれて政府の官督方針は極端となり、次の官業拂下時代が生れて来るのである。

東京名所鐵道馬車往復

明治十年第一回勸業博覽會に於いて賣れ残りたる物品の處分の意味に於いて、翌十一年一月辰の口繪評定所跡に勸工場を開設したり。明治廿年民間に拂下ぐ。

全盛富貴壽古録

東京兩國通運會社
川蒸氣往復盛榮
眞景之圖

明治五年二月の郵便制度改正に伴ひ、舊飛脚屋救済の爲めに東京に設立された陸運元會社は、八年二月内國通運會社と改稱し、全國に於いて陸上運送の業を爲すと共に海運にも着眼し、十年二月通運丸といふ川蒸氣船を隅田川に浮べた。其後漸次事業を擴張、兩國元柳河岸及彌敷町三丁目河岸に發着場を設け、下總常陸下野方面へも航行することゝなつた。

日本橋京橋間鐵道馬車往復之圖

錦 三枚續 紅英齋

商法講習所

明治八年八月森有禮の創始するところ。九年五月矢野次郎所長となり。十七年三月農商務省直轄官立學校となり、高等商業學校と改稱す。

第二回内國勸業博覽會開場之圖

出品點數三十三萬、入場者八十二萬であつた。

第二回内國勸業博覽會之圖

明治十五年

東京名所之内銀座通煉瓦造鐵道馬車往復之圖

明治十年以後勸工場諸所に起る。勸工場は商品種類の多きことゝ、現金懸無しと、縱覽隨意とが特長にて一時は流行したるものなり。其後振はず、明治四十年後は、只新橋角と上野廣小路とに、博品館が二館殘存せしのみ。

京橋勸業場之景

明治十六年

大熊及海坊主退治

三菱保護の政策を遂行した大久保利通は、十一年に刺殺され、大隈重信亦、北海拓殖問題の政變で野に下つた爲め、三菱は腹背敵を受くるに至つた。圖中海坊主は當時の海運獨占者三菱、大熊は大隈を諷したるもの。

廿三年の未來記

星亨、河野敏鐵、板垣退助、大隈重信、福澤諭吉、後藤象次郎、丸山作樂、福地源一郎、矢野文雄、沼間守一、馬場辰猪、藤田茂吉、成島柳北、陸奥宗光、末廣重恭、中島信行等。

當世物價の賑ひ

十三年を頂點とする好況は、十四年の不換紙幣整理に基くデフレーション政策によつて、深刻な不況期に入つた。農産物が下落し農民が窮迫すると、まだ農民の購買力に依存することの多かつた當時の商工業は、俄然窮地に陥入り、破産者が續出した。此不況は十八年頃まで續いた。

不二詣諸品下山之圖

東京銀座通電氣燈建設之圖

十五年十一月一日銀座大倉組店前に、米國舶來の二千燭光の電燈を點火す。未曾有の事なれば、毎夜見物人引きも切らず。これ我國電燈の嚆矢なり。

水産博覽會獨案内 和四六本 印刷 一册
 明治十六年水産博覽會を上野公園に開催した。當時から水産業は輸出産業として重要であった。

上野熊谷間鐵道貨物
 賃銀概略表(活版一枚) 印刷 二枚半分

明治十七年

上野高崎間鐵道之圖

錦 三枚續 高 隣

(王子製紙展望)

東京鐵道上野山下ステーション開業式汽車發車圖

錦 三枚續 長谷川國吉

民間資本の成長と、民間事業の興隆を示す著しい例として、明治十四年日本鐵道會社が生れた。資本金二十萬圓、第一期工事として、十五年埼玉縣川口より起工し、十七年上野高崎間が開通した。

明治十八年

赤坂假皇居及

大錦

三枚續 井上安次郎

太政官眞景

明治十八年十二月太政官廢止、同月伊藤博文内閣總理大臣となる。

太平樂慾の戯れ

錦

三枚續 倉田太助版

泰平世直競漕

錦

三枚續 福田保出版

商業壽語錄

23 X 15 錦
 (商業電報三九六號附錄)

明治二十一年

樞密院會議之圖

大錦

三枚續 周 延

東京名所永代橋眞景

大錦

三枚續 楊齋延一

是より先、國立銀行全國に散在し、封建的の地方割據の弊甚だかりしが爲め、政府は之れが統制を必要とし且在來の紙幣及銀行券を消却すると共に、新たに正貨兌換券の發行を企圖し、十五年六月日本銀行條例を發布、十月日本橋區箱崎町(永代橋際)に於いて其業務を開始した。
 (圖中、右側交番前に、天氣豫報の揭示がある)。

東京市區改正豫圖

錦

三枚續 探 景

明治二十二年

憲法發布式之圖

大錦

三枚續 周 延

憲法發布上野賑

大錦

三枚續 勝 月

明治二十三年

東京名所向島
 鐘ヶ淵紡績會社

大錦

一枚 國 利

二〇

皇國製茶圖會 菊 錦 七枚 秀 月
 世直山物價降圖 錦 三枚續 國 政

明治十四年以降の不況期に於いて採用された機械化獎勵策が、紙幣整理過程の完了による經濟的諸條件の具備と相俟つて、我國産業は近代化して行つた。同時に國內物價の低落は、明治十五年以來日本の貿易を超越に轉化させた。

五品共進會場圖

錦 二枚分 廣 重

東京名所神田區大通

錦 三枚續 廣 重

アサヒヤ商店繁榮之圖

商品の洋式陳列を以つて繁昌したりと

明治十九年

貴女裁縫之圖

大錦 三枚續 松齋吟光

明治二十年

東都名勝圖繪

菊 錦

帝國ホテル

小判 錦 一枚分 探 景

鹿鳴館夜景

錦 一枚 竹 葉

鐘淵紡績會社(二十八年)

錦 十枚 青柳謙治

明治二十二年八月開業。當時我國の紡績統計では尙ほ綿絲紡績工場二十八、鐘數二十萬、輸入十四萬圓であつたが、二十九年には工場六十三、鐘數七十五萬となつて逆に四萬三千圓の輸出に轉化した。其後鐘數の激増に伴ふ輸出の増大は、必然的に、外國マーケットの獲得を要求するに至り、従つて日本産業の相貌も漸次變化して行つたのである。

日本國會假議事堂圖

錦 三枚續 吟 光

凌雲閣諸業遊觀双六

普 曉

洋風東髮美人圖

大 石版 一枚

歐化主義時代の代表的洋髮婦人である。此洋髮は、十八年頃から流行し始め、鹿鳴館時代の全盛期を頂點として、二十三年には、保守的反動思想の勃興につれて、早くも衰退期に入つた。これは丁度紙幣整理が完了した十八年からの、近代の産業の目ざましき進展で、生産力が異狀に増大し、遂に二十三年に至り、本邦最初の恐慌を惹起したのと、全く相照應する現象である。(因に我邦第二回の恐慌は三十年に、第三回は三十四年に、第四回は四十年に起つた)

別子銅山

大錦 一枚

第三回内國勸業博覽會 御幸之圖

錦 三枚續 幾 英

二一

明治二十七年

日清戦争蓋平の戦 大々判石版 一枚

明治二十八年

臺灣征伐圖 大々判石版 一枚

第四回内國
勸業博覽會於西京

大錦 三枚續

明治二十九年

日本銀行落成之圖 大錦 三枚續 清興

二十九年四月新築が落成したので、永代橋際から現在の場所へ移轉した。現在の處は日本橋區本兩替町で、元の金座の跡である。元來日本銀行は中央銀行として通貨の統一と安定とを目的として設立されたのであるが、是迄我國は銀本位制であり、銀の市價の脆弱性の故に、少なからず困難したのであつた。然るに日清戦争で、清國から償金二億三千万兩を獲得したのを機會に、之れを準備金として、金本位制を採用することとなり、三十年三月、其實施を見るに至つたのである。斯くて日本經濟の發展は、全く軌道に乗つたのであつた。

三井吳服店

大錦 一枚

村の入營の日

大 石版 一枚 町田曲江

工業の飛躍的發展に對して、農業は殆んど停頓にも等しい状態であつた。資本主義經濟にあつては、工業の持つ意義に比べて、農業の地位は、相對的には小さくなつて行く。二十九年、農村の強い抗争にも係はらず、棉花輸入關稅が撤廢されて、日本の棉作は死滅するに至つた如き又麻、藍の如き農作物が、地を拂つて空しくなつた如き、皆其好例であらう。又一面に於いては、工業機械化の發達は、同時に農村副業の收奪となつて行つたのであるが、それにも係らず、彼等は、出来るだけ時代に順應して、自家の農産物を商品化するにつとめた。桑畑や小麦などの栽培反別の増加、藪の産額の増加等は、これを説明するものである。

明治三十年

東京ビール初荷販

大錦 三枚續 豐齋

陳列文献目録

はしがき

陳列著書を一・明治以前、二・明治以後に大別し、年代順に並べた。但し明治以前にあつては、西洋文化渡來の最初より始め、主として西洋文明、西洋事情を傳ふる著書を探り、文學語學とか、地理歴史とか科學關係とかいふやうに區別して年代順に並べた。そして日本的な政治經濟關係書をそれと併行的に並べることにした。

明治以後は専ら經濟關係の書物を單純に年代順に並べたのだが、其前半期にあつては政治や文化關係の書物を尠からず並べた。當時では政治經濟を區別し難い本が大部分を占めてゐたせいもあるが、他方國會開設問題の如きが中心をなして進行してゐた時代でもあつたからだ。

次に文獻選擇上の心構をいふと、大體珍本主義によらず、常識主義により代表的なものとつた。だが場所の制限により、陳列し得なかつたものも少しはあることこの諒解を頂きたい。

(和は和装、洋は洋装、大小に出入あれど大體、大は四六倍判、中は菊判、小は四六判を意味す)

明治以前(主として西洋文明輸入關係のもの)

(A) 文學語學類

SANCLOS NO GOSAGVEO NO

VOHINYQIQAQI (扉寫眞)

天正十九年即ち西紀一五九一年肥前國加津佐の天主教學林にて出版せる羅馬字綴り邦譯文。標題は「聖徒」(セントス)の御作業の内抜書」を意味す。西洋文化輸入最初の出版。世界に二冊しか残つてゐないと傳へられる珍本。

ESOPD NO FABYLAS (扉寫眞)

文祿二年即ち西紀一五九三年天草の天主教學林(加津佐から移轉)出版羅馬字綴り邦文エッセツプ物語。

伊曾保物語(萬治二一六五九) 和大 三冊
文祿天草本エッセツプ物語に續き幾種かの和文譯本出たが、其の一種で挿繪入り。茲には複製品を珍列)

DICTIONARIUM LATINO LVSTANICVM
AC IAPONICVM EX AMBROSII CALEPINI
volumine deprimptum. (扉寫眞)

文祿四年即ち一五九五年天草天主教學林にて出版したラテン・ポルトガル・日本(羅馬字綴)の三國語對譯辭典にして大判約千頁に近き大著作。(國語辭典に見ない古語が收録)

Lexicon Latino-Iaponicum 洋大 一冊

前記羅葡和辭典から葡語を削り、一八七〇年羅馬にて羅和對譯辭典だけとして再刊の物。

VOCABLIARIO DA LINGOA DE IAPAM

Omn adclaratio em Portuqnes, (和葡辭典)(寫真)

慶長八年(一六〇三年)長崎の耶穌會學林出版、普通ロドリゲスの和葡辭典と稱す。邦語(羅馬字綴)を葡語にて註解。

西洋畫實譯文稿(安永八一七九九) 前野 良澤稿
蘭化と自稱せる蘭學の大先輩前野良澤先生は、本稿に於て早くもラテン文の解釋を試みたことが知られる。

鳴蘭演戲記(文政三一八二〇) 以上二部ともに海表叢書(南蠻紅毛史料)中に採録。鳴蘭はオランダ。即ち長崎におけるオランダ芝居見物記である。

西洋學家譯述目錄(嘉永五一八五二)(和小横一) 穗 亨著
嘉永五年までの蘭學者の著述約五百部の目錄を掲ぐ。

魯敏遜漂行記略(安政四一一八五七) 横山 保三譯
智 環 啓 蒙 (安政四) 訓點翻譯本
香港の英人が執筆刊行した英漢對照の短い百科的讀本の續刻。その後の異版五種。

F. HALIVA (波留麻和解) (寛政八一七九六)
稻村三伯がハルマの蘭佛辭典から約八萬の蘭語を採り邦譯したもので蘭語は本活字譯語は筆寫書入とし三十部だけ印行せしといふ。半紙二千數百枚廿七冊の大部のもので、それだけでも驚嘆に値ひす。本邦人の手に成る最初の歐和辭典。ハルマには波留麻、法兒馬其他の字を宛つ。和解(ワゲ)は和譯の意。

蘭 鍵 (文化七一八一〇) 和合一冊 藤林 晋山著
ハルマ和解から約三萬語を採り改訂を施し蘭學普及のため手頃のものとして刊行(本書は初版僅に百部と傳へらる)

蘭 學 逕 (文化七一八一〇) 和合一冊 藤林 晋山著
前記譯鍵の附録として刊行せるもので一の蘭語入門書。

ゑんきりしことは (萬延元一一八六〇) 和小一冊
明治初期に假名書主義を以て起ちし清水卯三郎は早くも本書に於て假名書とて假名書とし、標題も然る如く傍題にも亦『あきうどの』をひんぎりしことばならびにあひばなしとせり。勿論「商人用英語會話」の意だが書中、邦語は全部平假名、英語は片假名を以て示し、漢字及び英字は一も使用せず、いろいろの點から注意すべき書。

五國語彙 (萬延元) 和小一冊 松園 大人編輯
英米佛魯葡五ヶ國の意なれど英米を一として四外國語但し邦語を入れるとやはり五ヶ國語といふ譯。

ろしやのいろは(ルスカヤアズブカ)(萬延二) 和一
和英商和(文久二一一八六二) 和一 日 新 堂版
ひらがな英米通語 (元治元一一八六四) 和一

佛語明要(元治元) 和五冊 村上 英俊著
邦人の手に成つた最初の佛和辭典。村上英俊は蘭語によりて佛語獨修、獨力を以て前人未到の佛語學を開拓せるもの。

英和對譯袖珍辭書(文久二一一八六二年版) 和五冊 村上 英俊著
同 上改正増補(慶應二年版) 共二冊 開 成 所版

英國階梯(慶應二一一八六六) 和小一冊 開 成 所版

英吉利單語篇(同年) 和小一冊 開 成 所版

英吉利文典(同年) 和小一冊 開 成 所版

法朗西文典(同年) 和小二冊 柳 河 氏藏版

(英文)コルネル地學初歩(同年) 和小一冊 渡 部 氏藏版
和英語林集成(慶應三一一八六七) 洋大 一冊

蘭學階梯(天明三一一七八三) 和中二 大槻 玄澤著
變語彙(寛政一〇一一七九八) 和小一 森島 中良著
變語は蘭語のこと、彙は語彙、單語集を意味す。

西音發微(文政九一一八二六) 和中二 大槻 玄幹著
和音唐音對註の和蘭語發音手ほどき。(附西洋字原考)
(蘭文)和蘭文典(天保一三一一八四二) 和一二 其 作 藏版

改正増補變語彙 (嘉永元一一八四八) 和小二 謙 塾 刊 行
前書は蘭語を假名で示しただけで、原語を挿入しない。が、本書には原語を挿入し、それに假名で發音を示す。

蕃書調所藏印あるウエブスター英小辭典(一八四九年版) 三語便覽(嘉永七一八四八) 和二三 村上 英俊著
佛 英、蘭の三語に邦語を對照したもの。

和蘭字彙(安政二一一八五五)和六一三 桂川 甫周著
魯西亞字彙(安政三一一八五六) 折本 神 令 輔 綽
和蘭文典字類(安政三後編五) 和小二 飯島 士讓選
前掲和蘭文典の單語を集め和譯を施せるもの。

增補改正譯鍵(安政四一一八五七) 和四五 廣田 憲寬選
文化七年藤林の譯鍵(蘭和辭典)を改訂増補した刊行物。

商用通語(安政七一八六〇) 和小一 小島 雄齊輯
邦語に假名で英語及び蘭語を示した單語集と小會話。

商貼外和通韻便覽 (安政七) 和六一 寶 善 堂
增訂華英通語(萬延元一一八六〇) 和中一 福澤 諭吉著
清人の英清對照單語集に和調をつけ假名で發音を示す。

英文字典(一八六六年香港刊) 菊倍 四分冊
ロプスチード(Lopsthead)が編纂した英漢字典で、漢語には廣東音と北京官話の二種音を記載してある。一八六六年(明治二年)完了。本書は一冊宛刊行し、一八六九年(明治二年)完了。本字書はヘボンの辭書と共に我が英語辭典界に二大勢力をなして影響を與へたものである。

(B) 地理歴史西洋事情
華夷通商考(元祿八一六九五) 和二 西川 如見著
增補華夷通商考(寶永五一七〇四)五卷合 一冊
華は支那、夷は西洋で、外に朝鮮、琉球、東京(トシキン)交趾、印度方面を含む通商地の地理、物産風俗。

西洋紀聞(寶永六一七〇五) 新井 白石著
采覽異言(寶永七一七〇〇) 和二 新井 白石著
白石がヨハン・シローテを切支丹屋敷で訪問して得た西洋事情を和蘭商館長などに確めて記述したもの。
(明治十四年最初の活版本)

紅毛譯問答(寛延三一七五〇) 和一 小倉 善就記
紅毛談(明和七一七六五) 和中二 後藤 梨春著
紅毛は和蘭のこと、本書に和蘭文字を記載したため禁制にふれて賣買を禁止さる。本書には和蘭の風俗、地理、器物等につき語る。初めてエレキテル(電氣)の事を記す。

紅毛雜話(天明七一七八七) 和中五 森島 中良著
本書中「ミコラスビユム」(顯微鏡)につき詳説す。

泰西輿地圖說(寛政元一七八九) 和大六冊 朽木 龍 著

地球全圖略説(寛政五一一七九三) 中一 司馬 江漢著

西域物語(寛政一〇一一七九八) 寫三冊本多 利明著

蘭說辨惑(又警水夜話)(寛政一一一七九九) 二冊

清俗紀聞(寛政二一一七九九) 和大六冊 近藤 守重編

增譯采覽異言(享和三年) 寫和六冊 山村 昌永著

諸厄利亞人性情志(文八一八二五) 和一小冊 吉雄忠次郎著

坤輿圖識及補(弘化二一一八四五) 和大七 箕作省吾著

地學正宗(嘉永三一一八五〇) 和大九冊 杉田 玄瑞著

八絃通誌(嘉永四一一八五一) 和大初編三冊 箕作 阮甫著

海國圖志墨利加洲部(嘉永七一一八五四) 和大六冊

亞米利加總記(嘉永七) 和大一冊 竹菴廣瀨譯

續亞墨利加總記(同) 和大二冊 同

亞墨利加總記(安政二一一八五五) 和大二冊 同

美理哥國總記和解(嘉永七) 和中一冊 正木 篤譯

英吉利國總記和解(嘉永七) 和中一冊 正木 篤譯

海國圖志俄羅斯總記(嘉永七) 和大一冊 大槻 禎重譯

海國圖志俄羅斯(オロス) 國總記(六十卷本の第三十六卷)の全文譯

海國圖志俄羅斯(嘉永七) 和大二冊 鹽谷 箕作同校

英吉利廣述(嘉永七年) 和中一 小野 元濟譯

海國圖志澳門月報(嘉永七) 和大一 大槻 禎重譯

海國圖志(六十卷本の卷五十一、夷情備采、上、澳門月報の和譯にして其一論中國、其二論茶葉、其三論禁煙(アヘン禁煙)其四論用兵、其五論各國夷情。(夷情は西洋事情)

新國圖志通解(安政元一一八五四) 和大四冊 皇國隱士和解

海國圖志亞米利加の部の和譯

海國圖志(清咸豐二一一八五二) 唐木大百卷合 二十四冊

道光年間支那の林則徐原輯、魏源增補の大世界地理書(日本も含)で各國の政治經濟人情風俗の社會生活をも記述するのみならず、特に西洋の兵器、科學をも紹介する極めて有益な著述であり、本書の初め六十卷本は早くより輸入され、後に示す如く直に或は調點づき或は通用文に譯されて、廣く流布したもので、西洋文物の最新知識を紹介した最も有力なもので、西

嘆咭喇略(嘉永六一一八五三) 中一冊 荒木 塞訓點

支那の道光十二年(西紀四二年)陳逢衡が著したものに調點をつけて續刻せるもの嘆咭喇はイギリスのこと

萬國旗鑑(嘉永七一八五四) 和一小冊 鈴 亭藏版

世界各國の各種の國旗を彩色圖にして示せるもの。

漂流年代記(嘉永七一八五四) 折本二 豐 介 子編

萬國渡海年代記(嘉永安政頃) 和一小本 五 守 堂藏版

漂客記事(享和三一一八〇三) 和一冊 兒 宗 玉 卿著

安永九年(一七八〇年)清國商船房州に漂流し來る。就て尋問せるところの記事。無點の漢文本。

漂流記(文久三一一八五九) 和中一冊 播州 彦藏著

米國政治、經濟、宗教、人情、風俗其他文明の機器をも紹介。

中濱高次郎漂流記(安政元一一八五四) 和中一冊

海國圖志海篇(嘉永七一八五四) 和大 合一冊

上記漢文海國圖志の初め海篇を鹽谷世弘、並に其作高唱する。附に譯點せるものにして、譯點の趣旨を人をも警戒し、國防をゆるかすにすべからざるを力説するもの。

海國圖志訓譯卷上・燧臺圖説・火藥製法

海國圖志(六十卷本の卷五十六、七、八卷の三冊の和譯)

海國圖志(三百部限定版)

海國圖志普魯社國部(安政二) 和大一 鹽谷、箕作同校訓

普魯社のみならず海國圖志六十卷本の卷三十八の全部(即ち普魯社(プロイス)、梭林(ヒンメルカ)、大尼(ダニア)、瑞丁(ノルウエシア)、璣國(スウェーデン)の記事)を掲ぐ。

海國圖志印度國部附錄夷情備采下(安政三) 和大三冊

本書は續三樹三郎の調點續刻する所にして、海國圖志六十卷本の第十三、四卷の二卷即ち東南中三印度、及び西印度巴社回國並に阿丹回國を上中の二冊にのせ、下冊には原本第五十二卷の全部即ち夷情備采下華夷言、貿易通志、譯出夷律の三篇を附載。貿易通志最も注意に値ひす。(三百部限定出版)

海國圖志英吉利國部(安政三) 和大三冊 鹽谷、箕作同校

海國圖志(六十卷本の第三十三、四、五の三卷を調點續刻せるもの)

海國圖志國地總論(明治二) 和大一冊 池上學室藏梓

海國圖志(六十卷本の第四十六卷國地總論上を調點續刻)

遠西紀略(安政二一一八五五) 訓點附 漢文和 大二冊 大槻 禎瑞 卿著

帝國紀、王國紀、各國帝王傳、各國名將傳あり。

米利幹新誌(安政二) 和大五冊 春 日 樓藏板

合衆國小誌(安政二) 和大一冊 小 關 高 彦 譯

英國志(文久元一一八六一) 和大五冊 溫 知 社 藏 梓

聯邦志略(文久元) 和大二冊 箕作 阮甫 訓點

瀛環志略(文久元) 和大漢文十冊 井上其他訓點翻譯
玉石志林(文久年間) 和大四冊 箕作 阮 甫譯
和蘭雜誌より地誌、珍聞、發明、發見、傳記、工藝記
事其他譯載。

六合叢談(咸豐七—一八五七) 以上の支那新聞は本邦
中外新報(咸豐八—一八五八) にて官板と稱し翻譯せ
香港新聞(咸豐二—一八六三) しもの。
遐邇貫珍(漢文新聞) 小合本
ナガサキツツビンダ。
リスト・アンド・アドヴァタイザ
太陽曆一八六一年六月十五日長崎にて創刊英字紙の第
四號(複製)

ジャパン・ヘラルド(同年十一月二十三日横濱創刊複製)
デーリー・ジャパン(ヘラルド(寫眞)
一八六三年十月二十六日文久三年九月十四日)横濱に
て創刊英字紙、以上によつて判るやうに我國では英字
新聞が邦字新聞に先行
官板バタビヤ新聞(文久二—一八六二)
官板海外新聞(文久二)
官板海外新聞別集(文久二)

本邦創刊期の邦字新聞 (和)
海外新聞(慶應元) 中外新聞 遠近新聞 慶應四年即
萬國新聞紙(慶應三) 江湖新聞 公私雜報 明治元年
倫敦新聞紙(慶應三) 内外新聞 もしほ草

西洋雜誌(慶應三—一八六七) 和一小 柳川春三編輯
(C) 理科學醫學關係
乾坤辨說(慶安三—一六五〇) 和一 野澤 忠庵譯

洋算算法(安政四—一八五七) 和一小 柳川 春三著
奇器圖說(一六二八年初版、一八三〇年再版)唐本中四冊
簡短な力學的説明と機械の圖入説明(支那出版の原書)
遠西奇器述、同第二集(嘉永七—安政六) 和大小 川本 幸 民述
寫眞器から蒸氣船、汽車、其他の所謂奇器の紹介説明
大地震曆年考(安政三—一八五六) 和一小 北峯 其他共著
書中伊太利の大地震の記事、其他あり。

颶風新話(安政四—一八五七) 和中二 伊 藤 慎藏譯
西洋時辰儀定刻活測(安政四) 折本 鈴木 源太著
(蘭文)理學入門(安政四年)和大小一冊 福島信夫古作藏梓
一八二六年アムステルダム版 Natuurkundig Handboek
を草體文字で翻譯。蘭學の盛時想ふ。

萬寶新書(安政七—一八六〇)和中二冊 宇田川 興齊譯
理化學應用家庭百科智識の紹介といつた風の本。
舍密局必携(文久二—一八六二)前篇三 上野 彦馬著
寫眞鏡圖說(慶應三—一八六七)小二冊 柳川 春三譯
解體新書(安永三—一七七四)和中五冊 杉田 玄白著
解剖學最初の譯書(原本ターフル・アナトミア)この譯
著に對し涙の禁じ得ない苦心に就ては蘭學事始に詳記

西說内科選要(寬政五—一七九三) 和中一五冊 宇田川 槐園
重訂解體新書(寬政一〇—一七九八) 和中一三冊圖一冊 同 人
蘭腕摘芳(寬政一〇)初版、文化一四再版)大槻 玄澤著
西洋の藥品、物産、器具機械について説明。

紅毛天地二圖覽說(天文二—一七三七) 和中一 北島 見信著
紅毛は和蘭、天地二圖は星圖と地圖の意(複製本)。
火浣布說(寶曆一四—一七六四)和中一 平賀 源内著
火浣布はアスベスト(石棉)。
天地理譯(文化一三—一八一六)和中一 司馬 江漢著
苦多尼阿經(文政五—一八二二)和大小一冊 宇田川 榕庵著
ポタニア經即ち植物學書で本邦西洋植物學の最初の書
理學入式遠西觀象圖說(文政六)和中三 吉雄 俊藏著
氣海觀瀾(文政八—一八二五) 和大小一冊 青地 盈林宗著
氣海觀瀾廣義(嘉永四—一八五一)和大小一冊 幸民譯
觀象圖說は天文、氣海觀瀾は物理學最初の翻譯書。
泰西本草各疏(文化二—一八二九年) 和中三 伊藤 圭介著
植學啓源(天保四—一八三四) 和中三 宇田川 榕庵著
舍密開宗(天保八—一八三七) 和中七 宇田川 榕庵著
本草(ホンソウ)は藥物、舍密は(セミ)は化學のこと
泰西七金譯說(嘉永七—一八五四)合一冊 馬場佐十郎著
上梓は嘉永七なるも成稿は文化七年(一八〇二)で、
七金とは、金、銀、銅、鐵、錫、鉛、水銀のこと。そ
の冶金法を説く。(和中五卷合一冊寫本)

理學提要(嘉永七) 和中二 廣瀬 元恭著
量地指南(享保一七—一七三三)和大小一冊 村井 昌弘編
町見辨疑(享保一九—一七三四)和中五 島田 源道著
數學啓蒙(咸豐三—一八五三) 和中一 漢文翻譯西洋數學書

醫範提綱(文化二—一八五〇年)中三冊 宇田川 榕庵著
本書附圖銅版の精巧は時人を驚嘆させた評判のもの。
和蘭眼科新書(文化二—一八一五) 四冊 杉田 錦腸譯
和蘭藥鏡(文政二—一八一九) 六卷 宇田川 榕庵著
西洋醫事集成寶函(文政二—一八一六) 六冊 橋本 宗吉譯
醫原樞要(天保三—一八三二) 寫五冊 高野 長英撰
扶氏經驗遺訓(天保三—一八三二) 和中一 漢文翻譯西洋醫學書

蘭學實驗(弘化四—一八四七) 一冊 神田 充著
病學通論(嘉永二—一八四九) 三冊 緒方 洪庵著
解馬新書(嘉永五—一八五二)和大小二冊 菊地 東水著
馬の解剖書にして譯述に非ず、著者の實驗的著述。
鈴林必携(嘉永六—一八五三)和大小一冊 上田 亮章著
鈴林は陣中、或は兵家といふ程の意味。
炮術言葉圖說(嘉永七—一八五四) 和大小一冊 五守 館藏板
砲術訓蒙(安政六—一八五八)和大小一冊 杉田 成卿譯
泰西兵話(文久二—一八六二)和大小二冊 小寺弘士毅譯
和蘭ネデルランデン兵學校教科書の兵話(忠勇義烈談)

(D) 政治經濟其他
農業全書(元祿九—一六九六)和中十一 宮崎 安貞編
山海名産圖會(寶曆四—一七五四)大五 平瀬 徹齊撰

和漢船集(明和三一七六六)和大六 金澤 兼光著
成形圖説(文化元一八〇四)和大合一五會繁其他合著
山相秘録(文政一〇一八二七)寫大一 佐藤 信淵著
廻船安乘録(文化七一八一〇)和大二 服部 義高著
廣益國産考(天保一五一八四五)和中八大藏 永常著
長崎むじん物語(元祿四一六九一)和中一 中村 敬榮編
政談(年代不明、西紀一七〇〇前後か) 荻生 徂徠著
(明治元年和小刻本四冊)
經濟録(享保一四一七二九)和大合三 太宰 春臺著
經濟纂要(元文元一七三六)和大合四 青木 昆陽著
(寫六冊合四冊)
價原(安永二一七七三) 和中一 三浦 梅園著
社會考(安永五一一七七六) 和中一 宇佐美 瀧水著
海國兵談(天明六一一七八六)和中二冊 林 子 平著
(寛政三年和大刻本合三冊)
大學或問又名經濟辨(年代不詳)和中三 熊澤 蕃山著
經濟秘策同補遺同後篇(寛政頃)大合一 本多 利明著
經濟要語(寛政七一七九五) 和中一 中井 竹山著
勸農或問(寛政一一一七九九)和中一 藤田 幽谷著
三貨圖彙(文化一一一八一五)四二 草間 直方著
貨幣圖説沿革、物價に關する未曾有の大事考
經濟問答秘録(天保一一一八四一) 寫大三〇 正司 考祺著

破れ家のつくり話(天保末) 和大一 新宮 涼庭著
新論(安政四一一八五七年) 和大二 會澤 安著
關邪小言(安政四) 和大四 大橋 訥菴著
會澤のは水戸學を代表する論著、大橋のもまた尊皇攘夷、日本主義を獅子吼せる大著
經濟要録同補遺(安政六一一八五九) 和中合七 佐藤 信淵著
全二十二卷中
鄰 草(文久二一一八六二) 和中合七 加藤 弘之著
立憲政治を説きたる著(當時寫本のみで傳はりし物)
萬國公法(元治元一一八六四) 和大六 老 皂 館驛刻
萬國政表(萬延元一一八六〇) 和大一冊 岡本 博卿著
ヨングの世界統計書より譯出せる統計譯書の最初
農商辨(元治頃) 和中一 神田 孝平著
經濟小學(慶應三一八六七) 和中二 神田 孝平著
英文エリスの關譯本より重譯せる最初の西洋經濟學書
英國策論(慶應末) 和小一冊 異本二種 サトウ 原 著
將軍引退、諸藩主の合議政治などを説ける問題の本
亞米利加、英吉利、佛蘭西、魯西亞、阿蘭陀(安政六) 版
西洋事情(慶應二) 和中 三冊 福澤 諭吉著
同 外篇(慶應三) 和中 三冊 同
有名な福澤先生の名著で賣上三十萬部と傳へらる。第
二篇(四冊)は明治二年にして全部で十冊となる。
西洋各國盛衰強弱一覽表(慶應三) 和中一 加藤 弘之譯
西洋の國勢一覽表で興廢の跡を一目瞭然たらしむ。
西洋旅案内、附録萬國商法(慶應三) 和中 二冊 福澤 諭吉著

明治元年(慶應四年)

英文ウエーランド經濟書 洋小 一冊
本書は福澤先生が芝新錢座の慶應義塾にて、上野戰爭の銃聲を聞きつゝも講學の事須臾も廢すべからずとて生徒を抑へ講義を續けられた當時の教科書
明治月刊(第一號) 和中 一冊 大阪 府
西洋經濟小學 和中 二冊 神田 孝平著
前出經濟小學と同一本で、ただ標題だけ西洋經濟小學としたもの。蓋し西洋の經濟學だと注意を惹く爲か
交易心得草 和中 三冊 加藤 祐一著
交易通商の必要、分業の法、外國人の取引心得、商社、バンク創立の規則、危險請合(保險)等につき説明
英政如何 和中合一冊 鈴木 唯一譯
一八六二年の英書ホンブランクの「ハウ・ウィ・アー・ル・ガヴァーア・インド」(我等は如何に政治されるか)の譯。
萬國新話 和小 四冊 柳河 春三著
西洋の文明事情を断片的に記述せるもの。(たとへば政治・教育・警察・造幣・地下鐵道・議院・郵便制度)
西洋事情 和小 二冊 福澤諭吉編纂
増補和解西洋事情 和小 四冊 福澤原輯、黒田校正
増補西洋事情 和小 薄葉 福澤諭吉原輯
以上三書ともに福澤先生同名書の偽版。如何にその賣行の盛んであつたかを證するに足らう。
交通起源 和小 一冊 瓜生 三寅口譯
本書の傍題が「一名萬國公法全書」とあるので、内容が想像されるが、米人惠頓の原著、丁健良の漢譯本に老連斯が補入を加へたものを瓜生が邦語に口譯。

西洋事情次編

(附録萬國商法) 和中 二冊 福澤 諭吉著
慶應三年版福澤諭吉著西洋旅案内の偽版の一種、福澤の西洋事情二編は外編(慶應三年刊)に續き明治二年の出版で次編でなく二編である。
立憲政體略 和中 一冊 加藤 弘藏著
君政、民政、上下同治、萬民共治、國民公私二權等を説く
泰西國法論 和中 四冊 津田 眞一郎譯
津田が洋行し和蘭ライデン大學に於てヒツセリグ博士につき講義を受けたる國法學ノートの翻譯。
萬國公法譯義 和中 四冊 堤 毅 士志譯
惠頓原著、丁健良漢譯本の邦譯。
協社社行義要領 和中 一冊
協社社といふ修養業團體の趣旨を述べたるもの。
同社は事業として、養豚、馬鈴薯等の栽培を勸む。
東西新聞第一號 和小 一冊
中外新聞 和小 一冊 以下合一冊
五ヶ條の御誓文を以て目的とし新創改定の政體職制を示したもので、之により立法行政司法の三權確立。
公議所法則案 和大 一冊
明治二年三月開設せる公議所の法則草案で明治元年十月の刊行、其第一條に「會議は法律ヲ定ムルヲ以テ第一要務トス」云々とあり、合議政治に就ての一試案
京都府下人民告諭大意 和中 一冊 京都 府 刊
王政維新に際しその趣旨を公布した告諭で、各府藩縣に翻刻させ、天下に周知せしめんとしたものの其の一
明治二年 和中 三冊 緒方 正譯
經濟原論 和中 卷四冊 緒方 正譯

緒方正は後改姓して若山儀一といへる者。序文によるとヘリーのエレメンツ・オブ・ポリチカル・エコノミの譯で、外人教師フルベッキが教科書に使用してゐたテキストであらうか。

經濟說略(英文)

和一小冊 沼津無盡藏版
The Compendium of Political Economy: From the Lesson Book. 題する英文の翻譯書。Value, Wages, Rich and Poor, Capital, Taxes, letting and Hiring, Division. の十論を掲ぐ。

掌中萬國一覽

和一小冊 福澤諭吉譯
サイクロペディア、地理書により、都府、人口、産物、鐵道、貨幣、兵力、貿易其他各國の國勢要領を簡単に記述せる袖珍本。

交 易 問 答

和一小冊 加藤弘藏著
通商か鎖國の問題を捉へ來つて外國貿易の有利適切なるを教へた啓蒙書。後に英譯ができた位評列の書で加藤弘藏は加藤弘之の舊名。

西洋旅案内(外篇)

和一小冊 吉田賢輔纂輯
福澤門下の吉田が先生の西洋旅案内補遺として、飛脚船(郵便)や雇船(チャーター)につき説明、なほ巻末に英和對譯會話を載す。

協社社行義草稿

和中小冊 角田米三郎稿
養豚、牧羊、馬鈴薯の栽培より進んで、學校建設や鐵道の敷設や、其他海外市場への進出などの經濟策を説く。

新 定 税 目

和中小冊 神奈川縣運上所
各國港場輸出入物品調 和中小冊 外務省藏板
最初の貿易統計は外務省にて作製。のち大藏省に移管。

西 洋 開 見 録

和中小冊 村田文夫纂述
西洋事情の見聞録であるが、後篇には商社のこと、英國政體賦税、萬國形勢表略など掲載(後篇は四年刊)。

日本獨逸條約書

和中小冊 外務省藏版

英國議事院談

和中小冊 福澤諭吉著
英國上下院の組織機能につき詳説せるもの。

肥前藩治規約

和中小冊 肥前藩刊
肥前藩の職制につき記述したるもの。

郡中制法

和中小冊 京都府刊
郡中市民の守るべき心得を認めたるもの。

明治三年

生産道案内

和中小冊 小幡篤次郎譯
明治二年渡部が刊行の英文經濟說略の翻譯。

海外國勢便覽

和中小冊 内田正雄編輯
英のステイツマンズ・イヤブツク其他から抄出。

眞 政 大 意

和中小冊 加藤弘之講述
前著立憲政體略では治法を説き、本書では進んで治法を説くが、コンミニニズムや、ソシアリズムなどの語現はる。

無水岡田開闢法

和中小冊 岡田明義著
馬鈴薯の栽培及びその代用食料の製造加工を詳述。

英 國 商 法

和中小冊 福地源一郎譯
原本はチュニソンの「英船持主並に商人手引草」又は「コンシニル掌中書」(領事官必携)だと序文に書いてある。

西 洋 事 情 (二編)

和中小冊 福澤諭吉纂輯
この編に於て卷一人間の通義、收稅論、卷二魯西亞、卷三及四佛蘭西の政治經濟陸海軍財政に就て述ぶ。

泰 西 農 學

和中小冊 緒方儀一譯
英國農用化學者フレッチャーの書の譯で、緒方儀一は緒方正の改名せるもので、後の若山儀一のことである。

西 洋 開 拓 新 說

和中小冊 緒方正譯
西洋式科學的應用による開闢法を説きたるもの。

萬 國 公 法

和中小冊 重野安譯
惠頓原著、丁勉良漢譯本に調點を施し、且つ和譯を添ふ。

日本奧地利條約書

和中小冊 外務省藏版

同 (英文)

和中小冊 外務省藏版

泰西商會法則

和中小冊 神田孝平譯
和蘭商法九百二十三條のうち商會(家主、金主、業名仲間)即ち合名株式等の會社に關する四十二條の抄譯。

商 社 規 則

和中小冊 河内屋喜兵衛翻刻
茲に商社とは爲替會社と通商會社のことと、二年七月公布、翌八月以後爲替會社、何通商會社等續出。

西 洋 各 國 錢 穀 出 納 表

和中小冊 小幡篤次郎譯
西洋各國の科目別國庫收支、即ち歳入出を掲ぐ。但しマルチン英國のステイツマンズ・イヤブツク一八六九年版より抄出せるもの。

蠶 種 說 (附 刻) 蠶 種 商 法

和中小冊 柳河春三譯
本篇は佛蘭西蠶種書の譯文なれど附録(吉田屋表二郎筆)は蠶種商法にて蠶種の輸出、貿易や賣込につき詳説。

外 國 交 際 公 法

和中小冊 福地源一郎譯訂
獨逸マルチンスの原著を英國ホッドソンの英譯せるものにより重譯せるものにして、公使領事官等の外交官の任務、地位、身分等につき説明せるもの。

新 塾 月 誌 第 一、二 號

和中小冊 山東一郎編
牧羊、牧羊の説あり、第二號に海上保險證券(英文)の譯文あり。

奇 機 新 話

和中小冊 麻生弼吉纂輯
風船、幻燈、反射鏡、電氣、蒸氣車等につき略説したるもの。

富 國 強 兵 論、理 財 論

和中小冊 平井元次郎述
富國強兵論、理財論 和中小冊 福澤諭吉譯

西 洋 諸 國 公 事 裁 判 論

和中小冊 神田孝平述
先きに新聞に出でたる三篇を單行本にしたるもの。

明治四年

經濟原論貨幣說

和中小冊 箕作麟詳譯
緒方若山の譯した經濟原論の七、九卷にあたるもの。

大 日 本 西 班 牙 條 約 書

和中小冊 外務省藏版

英 氏 經 濟 論

和中小冊 小幡篤次郎譯
米人ウエーランド一八七〇年版經濟學を譯せるものにして、原書は當時應義塾の教科書であつた。全九編九冊のうち第一、三編までは明治四年刊、四、六編明治六年刊、七、九編(大全)明治十年刊行。

會 社 辨 別

和中小冊 福地源一郎譯
ウエーランド、ニーマン、ミルの經濟書より銀行に關する部分を抄譯補綴せるもので、茲に會社とは銀行を意味する。

立 會 略 則

和中小冊 益澤榮一述
通商會社及び爲替會社につき説明し、その設立を促したるもので、附録に公社債發行法(仕法)を述ぶ。

英 國 賦 稅 要 覽

和中小冊 何禮之譯
英國の財政及び稅收入につきバキストルの書より抄譯。

改 正 新 貨 條 例

和中小冊
造幣寮を新設し、從來の舊貨幣に代る新貨を鑄造することになつたが、その關係諸規則並に太政官の告示を收録。

掌 中 新 貨 定 規 略

和中小冊 鹿兒島縣内頒行
太政官日誌戶籍法之部 和中小冊

致 富 新 書

和中小冊 平田一郎校正
米人鮑留雲易(ブラウン)の漢文原書に調點を附す。

政治略原 和中二冊 何禮之譯
米人エッチ・ジードン忠告 寫本 一冊 村田庶務權正譯
輸入稅改正、稅官改正、製造物改良、官費減省、鑛山開拓、食物改正、工職増殖等につき簡單に意見を述べたるもの。

航西日記 和中全六冊 澁澤青淵著
澁澤榮一が慶應三年徳川民部大輔に隨ひ渡佛せる折の見聞日記。

世界商賣往來 和中四冊 橋瓜貫一著
外國貿易の自由解放と共に從來の商賣往來(商家必要文字教習書)もそれ相應の改修を要し、英字入りの此種のもの續出した。

性法 和中一冊 神田孟恪譯
神田孝平(孟恪)が和蘭に留學中ヒツセリグから授けられた法學通論(性法)の蘭語講義を譯せるもの。

米國律令 和中二冊 何禮之譯
本書は「一名通法撮要」とある如く、米國の民法商法の摘要で、會社のことを「夥伴」「一名組合仲間」と譯してゐる。

西洋水利新説 和中三冊 若山儀一譯
萬國往來 和中一冊 四方茂平著

各國管勢一覽 和中一冊 練要堂藏版
保護稅說 和中二冊 若山儀一著

Report by Mr. Adams on the Deterioration of Japanese Silk
本邦駐在英國領事官より英國へ、我が蠶絲業につき報告せるプリニエリブック中の記事で、前書は當時我が蠶絲業の惡質化を特筆してゐる。

Report by Mr. A to H Legation in Japanese on the central Silk districts of Japan.
本邦駐在英國領事官より英國へ、我が蠶絲業につき報告せるプリニエリブック中の記事で、前書は當時我が蠶絲業の惡質化を特筆してゐる。

經濟學言 和中三冊 長江受益著
一名治生揚要と稱し、中に「物價を平に爲るは不可缺と云事、年價の要務は穀を第一と爲る事」などの句あり。

田稅新法 和中一冊 神田孝平著
さきに田稅改革議として建議せる草案を板行せしもの。

國法汎論 和中一冊 加藤弘之譯
ブルンチエリの一冊翻譯で、文部省の出版せるもの。明治九年以後活版本數回刊行さる。

圖解機械事始 和小二冊 田代義矩纂輯
機械學の初歩の書で、總論から斜面、滑車、輪軸、螺旋、楔、フライホイール、水車、蒸汽機械等に及ぶ。

西洋百工新書 和中二冊 破窓庵纂輯
應用科學知識百十條を簡單に記述したもの。

地球產物雜誌 和中一冊 堀川建齊譯
一八七三年博覽會規定

澳國維納博覽會規定 和中一冊 堀川建齊譯
町役心得條目 和大一冊 大阪府刊

市郡制法 和大一冊 堀川建齊譯
管内士族平民心得書 和大一冊 額田縣刊

大使信報第一號 和中一冊 大使事務局刊
我が遣米大使の通信を刊行せるもの。

西洋新書 和中三冊 瓜生政和編輯
西洋の政治經濟社會風俗人情學術其他極めて多方面の見聞を記す。何冊まで出版せるか不明だが今六編十二冊迄を見る。

自由之理 和中六冊 中村敬太郎譯
一八七〇年ミル自由論の譯書で、異彩を放つものは外人教師クラーイクの英文序を譯書にのせてゐる事である。

米人エッチ・ジードン忠告 寫本 一冊 村田庶務權正譯
輸入稅改正、稅官改正、製造物改良、官費減省、鑛山開拓、食物改正、工職増殖等につき簡單に意見を述べたるもの。

世渡の杖(一名經濟便蒙) 和中四冊 何禮之著
ウエーランドの經濟書の抄譯。後篇は明治七年の刊行

合衆國收稅法 和中四冊 立嘉度譯
一八六六年米國元租稅頭ブーウエル著書の譯で大藏省の藏版。

合衆國政治小學 和中三冊 瓜生寅譯述
米國の政治經濟財政法制につき記述。初篇第一卷の目次によると第三篇三卷まで九冊の豫定だが、初篇三冊しか出版せず。

國勢一覽 和小折一冊
(或は大東實錄)

日本全國戶籍表 和小折一冊 官 版藏刻
交易通史 和中四冊 杉亨二譯

會社辨講釋 和中二冊 加藤祐一口授
さきに大藏省で出版した會社辨と立會略則を本とし、假名付きの俗話で平易に再説したもの。

日本國造幣寮首長 洋中一冊
(第一號年報書)

國立銀行條例(附成規) 洋中一冊 大藏省
辛未政表 和中一冊 杉亨二編

明治四年今の統計局の仕事をもやつた史局の行った最初統計書だが、内容は官省の經費・官祿(俸給)を主としたもの。

經濟入門 和中四冊 林正明譯
原書を明記しないが、内容より判斷すればフォーセツト夫人の經濟學初歩を譯したものらしい。

租稅全書 和中六冊 林正明譯
英書の翻譯であるが、目につくことは、直稅、間接稅などの語で、いふまでもなく稅とは間接稅のことである。

經濟新説 和小二冊 室田充美譯
原書を明記せざるも、學者の説によると、フランスのセリヌ又はその流派の學者の著書の翻譯らしい。

報德方法富國捷徑 和中五冊 福住正兄著述
二宮尊徳報德主義の經濟論。

自由新論 和中四冊 高橋達郎纂譯
帳合之法 和中四冊 福澤諭吉譯

ブークキーピング(簿記學)を帳合之法と福澤先生が譯した苦心も窺はれるが、單式を略式、複式を本式帳合と譯したのも妙である。簿記學最初の譯本で、原書は米國ブライヤント及びスタラットンの共著になるもの。

銀行簿記精法(選度著) 和大五冊 海老原梅浦共譯
帳合の法と同様に出版されたもので、外人教師シヤンF(選度)の講義せるものである。

丸屋商社之記 和小一冊
明治二年創立の丸屋、即ち今の丸善株式會社の社則で、西洋流に勞資協調の制度を設け、社員に保險を附す。

商社往來 和中二冊 加藤祐一著
開化進歩の目的 和中一冊 加藤祐一著

文明開化、産業並に諸學科の目的を通俗に説明。
諸國米價表明治初期橫帳寫一冊 大藏省

三五

物 價 表明治初期 横帳寫一冊 大 藏 省
 日本產物志 和中 五冊 伊藤 圭介著
 地方平均論草稿(自筆本) 和中 一冊 角田 辯齋述
 角田辯齋の農政、主として地租論の草稿である。
 文明開化 和中 二冊共 加藤 祐一著
 舊弊生活をやめて新文明生活を採るべきことを説明せ
 る書。
 埃國博覽會筆記 附圖附表 和中 一冊 博覽會事務局
 萬國政談 和中 二冊 林 正明譯
 世界各國の政體につき説話したるもの。
 萬國港繁昌記 和中 三冊 黒田 三郎著
 各國主要港の繁華の有様や商取引の一端を記せるもの
 兎美だん語 和中 一冊 萬亭 主人著
 養兎熱盛んにして産を破る者編出時代の産物の一書。
 英國憲法 和中 一冊 林 正明譯
 合衆國憲法 補正附 和中 一冊 林 正明譯
 萬國通商往來 和中 一冊 河村 貞山著
 本書は此の種往來ものの中で、一番整つたものであら
 うか。
 共和政治 和中 三冊 中村 正直譯
 ギルレットの原著で、英國より獨立せる米國の共和政
 治を説明。
 生産初步 和中 一冊 白川縣洋學生徒譯
 外人教師カピテンゼンスが物産特に農産の必要改良に
 つき大體論を試みたるもの翻譯。
 米政概要 和中 五冊 鍋島、原、牟田共編
 米國の行政、立法、司法其他につき、書籍及び實地に
 つき調査したるところを収録したるもの。
 佛國政典 洋中 薄葉合 大井憲太郎譯
 佛蘭西法典の翻譯で、第一部國法、第二部政法、第三
 部私法即ち民法、第四部刑政に分れ、之を十二卷に收
 む。
 英國法律全書 和中 三冊 星 亨譯
 ブラックストンの原著を翻譯せるもので、首巻目次に
 よれば全二十六卷の豫定だが、實際出版卷數未詳。
 市中制法 和中 一冊 萬 卷 樓 刷
 松本博覽會規則 和中 一冊 筑 摩 縣 刊
 京都博覽會規則 和中 一冊 京 都 府 刊
 保任社條例 和中 一冊
 開拓使の囑により初めて海上保險を營みたる會社。
 内外用達會社商務取扱心得 和 大 一 冊 寫本
 會社備付の社則原本(十字形の英文字社印を注意)。
 徵兵令 和中 一冊 官 版
 中に血稅云々の句ありて、地方に一揆騷動などの原因
 をつくれり。
 民法假法則 和 小 一 冊 官 版
 民法の先驅をなしたるもの(身分證書八十八箇條)。
 英政新聞 和中 英政新聞社
 主として英國新聞より政治經濟産業記事を抄譯する週
 刊誌。
 明治七年
 百科全書商業編 和中 二冊 前田 利器譯
 文部省刊行翻譯百科全書の一で、卷の上は貿易論、商
 則、商賣の契約及其措置、卷の下は貨幣論及び爲替座
 論。

明六雜誌 和 小 初 號 明 六 社
 明治六年創立當時一流の先覺洋學者を中心とする明六
 社の機關紙で、高級文化啓蒙雜誌の隨一。
 富國論 和中 三冊 永峰 秀樹譯
 ウオーケルのサイエンス・オヴ・ウエルスの譯。
 泰西經濟新論 和中 八冊 高橋 達 郎譯
 序文によると原本は英國一八六九年再版ローゼルの
 「エ・マニユル・ラフ・ポリチカル・エコノミー」の譯
 で、譯本一、二は明治七年、三、六は九年、七八は十
 一年の刊行。
 表記提綱 和 小 一 冊 津田 眞 道譯
 一名政表學論といふ、和蘭ヒツセリグ博士の原著を
 譯せるもの。
 政家必携各國年鑑 和中 二冊 川路 寬 堂譯
 英國マルチンの政家年鑑一八七二年版の抄譯で、收録
 國は歐洲の部の塊、洪、白、丁、佛の五ヶ國だけである。
 百科全書交際論 和中 二冊 文 部 省 藏 版
 モリアのエトローピアやオーエン、フリーエの名など本
 書に出てゐる。
 民間雜誌初號 和 小 一 冊 福澤、小幡著
 百科全書經濟論 和 中 二 冊 堀 越 愛 國 譯
 卷頭に「經濟學は人間交際の學にして貨財の法則を講
 究し、教示するを以て、其趣意と爲す」とある。
 損益利益算法 和 中 一 冊 柴 田 清 亮 著
 ものわりのはしご 和 小 三 冊 しみづらさぶらう
 化學階梯といふべきを國語的に記したもので、夙に假
 名書主義者であつた著者のこととて、全部假名文字に
 書き著はした珍本。試みに扉の文句を寫さんか、い
 きりすよみためしだてていと、えらむはなしたるな
 いみ、のてびきである。
 商法會議局概則 和 一 冊 明 法 寮 譯
 民權大意 和 中 二 冊 竹 中 邦 香 著
 會計問答 和 中 一 冊 福 井 信 編 輯
 技に會計といふは財政を意味し、本書はまた傍題に見
 らるゝ如く、一名財政摘要といひ、財政學の書である
 が本書は恐らく本邦最初の財政學の書であらう。
 株式取引條例 和 中 一 冊 官 版
 歐羅巴文明史 和 中 四 冊 永 峰 秀 樹 譯
 キゾー文明史の譯である。
 會議便法 洋中 一冊 職 譯 局 譯 述
 キュウシグの書の譯で、會議制大に起らんとする際
 の精華書。
 會議辨 和 小 一 冊 福澤、小幡 合 著
 會議の仕方につき福澤式日本式に説明したるもので、
 附録に三田演說會の憲法並に附例式目を掲ぐ。
 愛知縣博覽會規則書 和 中 一 冊 同 主 事 局 刊
 萬國通私法 和 中 三 冊 若 山 儀 一 譯 述
 國際私法につき講述せるもので、附録の一章に一引銀
 單之事(即ち爲替)にて技には外國爲替)につき説明す
 本邦で刊行された國際私法の最初の書であらう。
 經濟要旨 和 中 二 冊 西 村 茂 樹 譯
 文 部 省 刊
 明治八年
 米人李仙得建言書 寫和中 一冊 大藏省文庫收藏
 リセンドルが主として經濟問題につき建言した書類の
 譯文綴り。

彌兒經濟論 和小 三冊 前牛林 董譯

ミル經濟原論の譯で、明治八年から十九年までかゝり二十九冊第四篇までの譯出を見る。(爰には初篇六冊だけ陳列)

巴華亞國稅法 和中 三冊 矢伊勃兒篤譯

原本は一八六三年ウエルツブルグ刊行の「ストイエルチセーツ」で地稅法、家稅法、免稅法、收入稅法、商工稅法、元金利息稅法を説く。

日本全國戶籍法 小折本一冊 戶籍 寮

明治六年一月一日調(琉球は二月)の全國戶籍調査表。

文明論之概略 和中 六冊 福澤 諭吉著

爲替及請負要領 和中 一冊

馬耳蘇氏記簿法 和中 二冊 小林 儀秀譯

國民統計學 洋小 一冊 文部 省藏版

日本物產字引 和中 二冊 文部 省藏版

大日本物產字類 和小 一冊 橋詰貫一輯録

貨幣條例 和中 一冊 造幣 寮

立會就產考 和中 一冊 島村 泰著

致富新論譯解 和中 三冊 中島 讀井共譯

政體論 和中 二冊 小林 儀秀譯

開產社條例 和中 一冊

各國立憲政體起立史 和 四冊 加藤 弘之譯

(ヒールマン原著) 和 一冊 加藤 弘之著

佛國商法講義 和中 一冊 小澤 謙譯

泰西政治學 洋小 一冊 譯局譯

萬國政體論 和中 三冊 箕作 麟祥譯

明治九年

理財原論(一名經濟學) 洋小 十六卷 史官 本局譯

波理(ペリー)の經濟學講義、當時經濟學はまた理財學

國立銀行條例(附成規) 洋中 一冊 大藏 省

銀行實驗論 洋中 一冊 紙幣 寮藏版

漁村維持法 和中 二冊 佐藤 信淵著

合衆國民業律 和中 三冊 藤田 九二譯

萬國年鑑 洋中 二冊 統計 寮譯

英國のステーツメンズ・イヤ・ブツクの全譯本。

商法小學 和中 一冊 工藤 助作譯

農業雜誌(初號) 洋小 一冊 津田 仙編輯

百工儉約訓 洋小 一冊 高橋 達郎譯

簿記法獨學 洋小 一冊 栗原 立一著

英國議院章程 和中 三冊 村田 保譯

泰西農業勸業法 和中 二冊 大藏 省藏版

馬耳蘇氏複式記簿法 和 大 三冊 小林 儀秀譯

報國雜誌第一號 洋小 一冊 報國雜誌社

東洋新報第一號 洋中 一冊 岡本監輔編輯

文明新誌第一號 洋小 一冊 鳥居正切編輯

洋々社談第一號 和小 一冊 洋々社

大觀警翁などを含む和漢洋一流學者の集談會を洋々社

といふが、その同人雜誌で、文化問題あり、政治經

濟、史論あり、時論あり、内容極めて豊富。

奥國博覽會報告書 洋 三冊

明治六年ウインにて開催の同博覽會に参加した報告記

録で、議院、農法、道路、山林、蠶業、教育、兵制、博覽會、鐵路、貿易、風俗、制度、教法、國勢

の各部に分け、中に四十餘種の有益な翻譯を收む。次

の如し。○農業振起の條件報告 ○佛國農務局長チストラカ

○勸業雜誌 ○イブレンク氏阿利機樹説 ○セツトカス

○路氏牧畜論 ○ホーイブレンク氏阿利機樹説 ○セツトカス

○論建築論 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○書林 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○略記 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○太利 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○易 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○味 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○心 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○局 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○第 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○二 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○區 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○製 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○上 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○食 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○料 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○ワ ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○ア ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○三 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○第 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○三 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○區 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○製 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○上 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○食 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○料 ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

○ワ ○山本隆吉氏阿利機樹説 ○セツトカス

利 學 和 中 二 冊 西 周 譯
 ミルのユテイリリズムを漢文にて翻譯(調點附)
 民 約 論 洋 小 一 冊 服 部 德 譯
 ルツターの民約論の最初の翻譯、其後異本多數出づ。
 民間經濟錄 和 中 一 冊 福 澤 論 吉 著
 馬爾失斯人口論要略 洋 小 一 冊 大 島 貞 益 譯
 マルサス人口論の概略を某書より譯述せるもの。
 自由交易穴探 洋 小 二 冊 若 山 儀 一 譯
 經濟要說 洋 中 二 冊 大 藏 省 藏 版
 (ヘンリジョフの原著カテキズム・デ・エ・コ・ノ・ミ) (經
 濟問答) をシイボルト、古澤、土山が對譯對校し、大
 藏省出版、但し第二卷は十一年。
 萬 國 商 法 洋 小 三 冊 豐 島 住 作 譯
 レビ著一八六三年版インターナショナル・コンマース
 アル・ローの譯。
 國民統計學 洋 小 一 冊 堀 越 愛 國 譯
 租 稅 說 和 中 一 冊 山 崎 直 胤 譯
 佛國の元大統領ア・チエル著所有權論の第四卷租稅說
 の翻譯。
 經濟新話 洋 小 二 冊 大 野 直 輔 著
 明治十年內國博覽會出品解説 洋 中 三 冊
 銀行雜誌(第一號) 和 小 一 冊 大 産 省 銀行 課
 銀行大意 和 中 一 冊 シヤンド述
 民 權 問 答 初 篇 和 中 二 冊 兒 島 彰 二 編 輯
 經濟入門 和 小 一 冊 小 幡 篤 次 郎 抄 譯
 (一名生産道案内)
 明治三年生産道案内の名で和裝本を以て出版せるもの
 を改題且つ洋裝本に改めて再版せるもの。

佛國商工法鑑 洋 小 一 冊 大 井 憲 太 郎 譯
 內國勸業博覽會案内 和 中 一 冊 同 事 務 所 刊
 講 學 餘 談 洋 小 合 一 冊 三 橋 惇 編 輯
 帝國大學法文科の學生の手による研究雜誌。
 東京府勸業課雜誌 洋 中 初 號 一 冊
 東京府が産業知識普及と振興のため發行せるもの。
 民 法 草 案 洋 小 一 冊 官 版
 國 政 黨 派 論 洋 中 一 冊 杉 亨 二 筆 記
 (ブルンチニリ原著の翻譯)
 大日本貨幣史參考 和 中 五 冊 大 藏 省
 明治十一年
 經濟辨 安 洋 小 一 冊 林 正 明 譯 述
 佛國巴士智亞(パスチア)の保護稅說を駁し、自由貿易
 主義を高唱するものを英譯本より重譯せるもの。
 支 那 貿 易 說 洋 中 一 冊 陽 其 二 採 述
 對支貿易特に昔からの所謂唐方渡依物諸色につき詳説
 栽培經濟論 和 中 二 冊 共 佐 田 介 石 著
 所謂國粹經濟論者又は歐化主義に對する反動思想家で
 あつた著者の經濟論で、後篇二冊は十二年の刊行。
 自由保護貿易論 洋 中 一 冊 駒 井 重 格 譯
 交 際 論(附經濟) 洋 中 二 冊 加 藤 政 之 助 譯
 トンプソンの原著譯とあるが書名を擧げぬ。茲に交際
 論といふはソイシアル・サイエンス・エンド・ナシヨ
 ナル・エコノミーのことであらう。

商 法 事 情 和 小 三 冊 中 村 最 文 譯
 茲に商法とは商業のことであるが本書に於ては一般經
 濟をも取扱つてゐる。(本書の奥付では十年刊行だが
 扉の刊記は十一年である。)
 自由交易日本經濟論 洋 小 一 冊 田 口 卯 吉 著
 日本家屋保險(マイエツト) 洋 小 一 冊 寺 田 勇 吉 譯
 大學教師兼大藏省顧問たるマイエツトが日本に家屋火
 災保險經營の急要なる所以を説きその具體案を示した
 るもの。
 魯 氏 經 濟 論 和 中 二 冊 小 笠 原 利 孝 譯
 米國ローゲルの原著經濟論の翻譯。
 銀行形情 洋 中 一 冊 三 輪 信 次 郎 著
 簿記學階梯 和 中 二 冊 森 下、森 島 共 著
 三菱商業學校の教科書となつたもの。
 英和簿記法字類 洋 一 冊 田 鎖 綱 紀 編
 (附帳合のしるべ)
 銀行集會理財新報 洋 中 初 號 福 地 源 一 郎 編 輯
 通俗國權論 洋 小 一 冊 福 澤 論 吉 著
 國權の重んずべく、約束の大切なる事、内外の事情を
 詳にすること、國を富ます事及び外戦止むを得ざる事
 を説く。
 特命全權大使米歐廻覽實記洋小 五 冊 太 政 官 記 録 掛
 明治四年十一月より六年九月に至る岩倉、木戸、大久
 保、伊藤、山口等の遣歐米全權使節一行の見聞記で、
 歐米の文物を細大あまざる視察記録せるもの、筆者は
 久米邦武。此の視察により我政府の施設を刺戟せるも
 の多しと傳ふ。(精巧なる銅版多數挿入)
 洋銀排除論 洋 中 三 冊 田 口 卯 吉 述
 明治十年內國勸業 洋 五 冊
 博覽會報告書 和 中 百 二 卷 司 法 省 藏 版
 徳川禁令考、同後聚

訓練經濟概論 和 中 大 塚 成 吉 譯
 獨逸のヒウブネル著「デル・クレイヌ・エコノミスト」
 の佛譯より重譯せるもの、茲では獨逸經濟學の輸入が
 注意せられてよからう。
 物産爲替商社設立願書及規則 洋 小 一 冊
 產物爲替會社設立願定款 洋 小 一 冊
 佛國商法講義(ブスケ) 洋 小 一 冊 黒 川 誠 一 郎 口 譯
 英國會社法 洋 小 一 冊 齋 藤 孝 友 譯
 佛國收稅法 洋 小 一 冊 米 田 精 譯
 佛國政法揭要 洋 小 一 冊 山 崎 直 胤 纂 譯
 簿記學例題 洋 中 一 冊 森 島 修 太 郎 著
 海上保險會社創立要旨 洋 小 一 冊
 東京海上保險會社の創立趣旨書である。
 巴遜私氏海上保險法 洋 小 一 冊 秋 吉 省 語 譯
 理財要論 洋 小 二 冊 中 山 眞 一 譯
 茲に理財とは財政の意にして佛國ガルニエーの著書の
 翻譯。
 佛國政法理論 洋 小 一 冊 司 法 省
 (出版自由之部)
 男女同權論 洋 小 一 冊 深 間 内 基 譯
 ミルの男女同權論(婦人の從屬)を譯したるもの。
 明治十二年
 理財要旨 洋 中 四 冊 前 田 利 器 譯
 シイボルト編纂「コンペンジウム・オブ・ゼ・サイ
 エンス・オブ・ファイナンス」即ち財政學要領の譯書で
 ある。

東京經濟雜誌 洋大初號一冊 經濟雜誌社
 簿記法初歩 洋小一冊 上野榮三郎編
 簿記學獨學 洋小一冊 秋元 晋記述
 市街讀本商業入門 和中一冊 甲斐國一衛譯
 活法經濟論 和中一冊 岡田良一郎著
 甲斐國現在人別調 洋大一冊 統計院編
 綿糖共進會報告 洋小三冊
 獨逸海上保險法 洋小一冊 加藤 斌譯
 經濟說略 和中二冊 永田健助編述
 民情一新 洋中一冊 福澤 諭吉著
 開智叢書人事退歩編 洋小一冊 何 禮之抄譯
 開牧五年紀事 和中二冊 廣澤 安任著
 官民權限論(ミル) 和中一冊 波邊 恒吉譯
 銀行簿記例題 和中二冊 銀行 局
 佛國民法契約編講義 洋小一冊 ボアソナード講義
 小學口授經濟談 洋小一冊 中村 護編輯
 簿記學捷徑 洋小一冊 井田 信譯
 (武羅安土、須土羅頓合著)
 人民必携簿記提要單式三部 洋小 二冊 山田十畝著述
 保險條例草案 和小一冊 寫
 大藏省火災保險取調係の國營火災保險法案
 縱積社規約 和小一冊 同
 類似保險の最も早きもの(共濟五百名社より一年早し) 社 本

大英商業史 和中七冊 田口卯吉譯
 元老院の囑によりレビの英國商業史を譯せるもの。
 明治十三年
 小學商業書 和中一冊 塚原 苔園著
 續民間經濟錄 和中一冊 福澤 諭吉著
 ポリニー氏財政論 洋中一冊 田尻稻次郎譯
 (關稅部)
 日本公債辨 洋中一冊 三浦良春等譯
 (マイエット)
 自由論 洋小二冊 林 董譯
 (一名人民自由)
 言論自由論 洋小一冊 植木 枝盛著
 民權論編 洋小一冊 三宅虎太郎編並評
 東北諸港報告書 洋中一冊 開 拓 使
 ポリニー氏財政論 洋小一冊 田尻稻次郎著
 (地方稅之部)
 西洋穴探 洋小二冊 加藤政之助譯
 東海經濟新報 洋大 初號 東海經濟新報社
 犬養毅が田口の自由主義東京經濟雜誌に對抗し、保護
 貿易を高唱して起ちしもの。
 統計集誌 洋中 初號 統計 協會
 保險要書 洋小一冊 佐藤 茂一譯
 ベナット原著の譯で保險通論的翻譯成書の最初のもの。
 理財雜錄 洋小一冊 森下 岩楠著

簿記學初步解式 洋中一冊 三輪振次郎編
 北海道開拓雜誌 第一號 洋中一冊 學 農 社
 海上裁判所訴訟 洋中一冊 官 版
 規則審査修正案 洋中一冊 官 版
 海上裁判所訴訟 洋中一冊 官 版
 規則審査修正案 洋中一冊 官 版
 佛國民法財產篇講義 洋小一冊 ボアソナード 版
 萬國國會大要 洋小一冊 三 橋 惇譯
 自由保護貿易論 洋小五冊 駒井 重格譯
 (フオセツト)
 民權辨惑 洋小一冊 外山 正一著
 通俗國會之組立 洋小一冊 中島 勝義著
 (一名日本國會近道)
 民權國家破裂論 洋小一冊 井上 勤著
 地方官會議傍聽錄 洋小一冊 弘 令 社
 地方官會議全評 洋小一冊 近事評論社
 交詢雜誌 洋小 初號 交詢 社
 慶應出身關係を中心として出來た當時の交詢社はクラ
 プの最初の一であつたが、同時に其社發行の本誌は立
 派な經濟雜誌。
 東京政談 洋中 初號 猶 興 社
 國債紙幣整理始末 洋 刊記ナシ)

富國策 和中三冊 岸田吟香調點
 フォーセツトの經濟學を丁題良が漢譯せしものにつき
 岸田吟香が調點を施して出版せるもの。
 自由貿易論 洋小一冊 名井啓之進譯
 自由貿易論者モンクレジンの著書を譯したるもの。
 國家挽回論 和中一冊 藤田 一郎著
 國勢挽回、國力増進論である。
 廣益農工全書 和中五冊 宮崎 柳條編
 古代經濟沿革論 洋小一冊 ボアソナード講義
 銀行簿記例題 和中二冊 銀行課編纂
 東京赤羽工作局 洋大 一冊
 製造機械品目 此の製品目録によつて官業模範工場の一たる工作局業
 績の一端を知る。
 義濟漫錄 洋小一冊 著者 不明
 士族の就産につき義濟社を起すべき趣旨を認めたもの。
 魯帝弑逆記 洋小一冊 大久保常吉編輯
 (附露國虛無黨事情)
 此の種文獻の最も古きもの(從來の文獻目録になし)
 物價騰貴論 洋小一冊 松本 五造譯
 (波理漢兒原著)
 商法融通論 洋小一冊 菊地 辰造著
 商法とは商業の意。
 日本銀行或問 洋小一冊 佐久間健壽編輯
 これはただ銀行或問、即ち銀行論を問答體にせしだけ
 のもので、「日本」の二字を冠すれど、日本銀行には關
 係なし。
 簿記獨案内附例題 和中一冊 吉村 一郎編

農工商經濟論 和中 十冊 永田 健助譯

明治十四年

明治十五年

- 泰西政治類典 洋中 三十五冊 東京經濟雜誌社譯
十五年乃至十七年間に分冊刊行(ボリンの政治百科辭典譯)
- 日本銀行創立の議 洋小 一冊 松本 邁譯
- 銀行事務法例 洋小 一冊 杉本 五造譯
- 經濟要論(波理漢兒) 洋小 一冊 原田 潛著
自由提綱財產平均論 洋小 一冊 原田 潛著
茲に財產平均論といふは一種の自由主義經濟論で、所謂危險思想家などの富の均分を主張するものと類を異にし、自由を以て貧富隔絶を防ぐ論。
- 古今社會黨沿革說 洋小 二冊 穴戸 義知譯
- 同上英文原本 洋小 一冊
- 共和原理 洋小 二冊 奥宮 健之譯
- 商業利害論 洋小 一冊 山口松五郎譯
- 虛無黨退治奇談(スベンサー) 洋小 一冊 川島忠之助譯
- 人權新說 洋小 一冊 加藤 弘之著
從來の天賦人權主義の非を發見放棄して、それを妄想と斷じ、人權は權利の進化によると改論した結果の所産で我政治思想史上劃期的著作である。
- 明治十二年十二月三十一日甲斐國現在人別調
- 經濟策 洋小 一冊 田口 卯吉著
- 日本帝國統計年鑑第一回 洋中 統計院

經濟原論 洋中 一冊 森下 岩楠著
翻譯に非ざる邦人の手になる纏つた經濟原論の最初のものと信ぜらるゝ一書。

全國商法の栽培 初篇和中 一冊 内田安兵衛編
(佐田介石原著)

政治談 洋小 二冊 澁谷 健爾譯
(フオセツト原著)

日本銀行第一回半季實際報告書 洋中

點取交通論 和中 一冊 佐田 介石述
點取とは懸賞募集といふ程の意味、即ちこの交通論は明治十年フルベッキが海外交通の利弊につき懸賞論文を求めたるに際し、大家たる佐田介石が進んで懸賞文選したるものを佐田の没せる翌十六年に至り養嗣佐田巖石が記念のため出版したるもの。

日本ニ土地抵當 洋小 一冊 マイエツト起稿

貸借所ヲ創建スルノ說 洋小 一冊 原田 潛譯

民約論覆義(ルツン) 洋小 一冊 尾崎行雄立案

地租改正私義 洋中 二冊 陸奥 宗光譯

利學正宗(ベンザム) 洋中 二冊 陸奥 宗光譯
一八二三年刊ベンザムのプリンシプル・オヴ・モラル・エツド・レヂスレーションの譯

共和政體論 洋中 一冊 奥宮 建之譯

大日本土地抵當銀行 和小假 一冊 岡 傳平稿

倉庫會社規則草案 初號 印刷局

革命新論 和中 二冊 栗原亮一抄譯
米人エンマンのスタディ・オヴ・ガヴァメントの抄譯

- 理想事情 洋小 一冊 久松定弘譯纂
(一名社會黨沿革) これも從來の文獻目錄に見えない稀本。
- 良政府談(Utopia) 洋小 一冊 井上 勤譯
トーマス・モリアのユトピア(理想境)の譯。
- 自由平等論 洋小 二冊 小林 營智譯
(スチーベン原著の譯)
- 商用簿記學 洋中 一冊 竹田 等輯
- 大日本帝國 洋中 全一冊 驛遞局藏版
驛遞志稿及同考證 我が國交通史の最も重要な參考書、編者は青江秀。
- 民權官權政黨盟約全書 洋小 一冊 吉田正太郎編輯
- 佛國商法復說 洋小 一冊 商法編纂局藏版
(第一編七卷迄)
- 政理叢談 洋小 初號より
合一冊
中江兆民其他當代一流識者の寄稿にかゝる社會科學問題を主とする啓蒙的學術雜誌。
- 再閱修正日本民法草案註解 洋小 五冊 波ツナード氏起稿
- 清國各港便覽 洋大折本 一冊 海大尉會根俊虎
- 東京銀行集會所規程 洋中 一冊
- 大日本租稅志 和中 四卷 大藏省藏版
野中準等の編修にかゝるもので、十五年より十八年へかけて前篇、後篇各二十卷三十冊の刊行を了る、上古より明治十三年に至る租稅關係を項目別年誌的に記述
- 明治十六年
- 經濟原論 洋中 一冊 天野 爲之著

明治十七年

- 理財學講義 洋小 一冊 宇川盛三郎口譯
(アツベル口授)
- 圭氏經濟學 洋小 四冊 犬養 毅譯
保護主義經濟說をとるケリーのプリンシプル・オヴ・ソシヤル・サイエンスの譯。最初四分冊、後合本二冊刊行
- 經濟原論 洋小 一冊 中隈 啓三譯
(フオセツト)
- 貨幣新論 洋中 一冊 高田 早苗著
- 富國論 洋小 合二冊 石川 暎作譯
アダム・スミスのウエルス・オヴ・ネーションの譯。
- 銀行論 洋中 一冊 マクレオット原著譯
- 内部文明論 洋小 一冊 川尻 寶岑著
- 獨逸政略秘聞錄 洋小 一冊 根村 五郎編
- 第一回興業意見(前田正名) 和中 三冊 農商務省版
各府縣を實地調査し産業振興策を立てたる大著述。
- 銀行簿記例題解式 和中 四冊 銀行 局
- 徵兵論 洋小 一冊 天野 爲之著
- 普國布利特麟 洋中 一冊 和田維四郎譯
- 大王農業政要略 洋中 一冊 濱 野共譯
- 政法哲學 洋中 一冊 渡 邊共譯
(フオセツト原著)
- 商法草案 洋小 二冊 ロエスエル起稿

社會平權論 洋小 一冊 松島 剛譯
 民法之骨 洋小 一冊 小野 梓著
 日本民法を説きたる注目すべき名著。
 經濟新論 洋中 一冊 松本直己纂譯
 大日本發見錄 洋小 一冊 河原英吉纂譯補述
 (一名日本外交起原史)
 一八五五年ボストン刊(ヘルドリツチ著「ジャパン・ア
 ズ・イツト・ウオス・エンド・イズ」其他より材料を
 採りたるもの)。
 勸業資本會社に對するマイエツトの意見書(寫本)
 内地雜居評論 洋小 一冊 林房太郎著
 統計論(フロック) 洋小 二卷一 農商務省譯刊
 學術經濟雜誌 洋中 初號 岡田秀銳編輯

明治十八年

寶氏經濟夜話 洋小 一冊 片山平三郎譯
 銀行小言 和中 二冊 富田鐵之助編述
 萬國對照年鑑 洋中 一冊 統計院譯
 (マルホール原著)
 貿易備考 和中 第一冊 大藏省編纂
 商品辭典と經濟辭典を兼ねたもの。但し第一冊限りの
 未完物。
 地主安心論 洋小 一冊 杉崎 信著
 海上保險法全書 洋小 一冊 月田 豐譯
 (タルボット原著)

日本開化之性質 洋小 一冊 田口 卯吉著
 (一名社會改良論)
 各國新聞翻譯雜誌 洋中 初號ヨリ 翻譯雜誌社
 米國海上法要略 洋小 一冊 秋山、北島共譯
 (ジクソン原著)
 佛國革命論 洋中 一冊 獨逸協會譯
 (リヨニスレル原著)
 一般にロイスレルと呼ぶ例の商法草案の起草者たる原
 著の譯本。
 商業工藝史 洋小 二冊 大島 貞益譯
 イーツの著書の翻譯で文部省の刊行せるもの。
 商業博物誌 洋小 二冊 瓜生 寅譯
 イーツの原著にして文部省の刊行せるもの。
 奢是吾敵論 和中 二冊 井上 毅譯
 佛ヒユフラン原著の譯にして農商務省の刊行せるも
 の。(後洋裝活版一冊本出づ)

明治十九年

農業經濟學 洋小 五冊 關、平塚共譯
 單復本位貨幣論集 洋中 一冊 乘竹孝太郎纂譯
 拜金宗 洋小 二冊 高橋 義雄著
 (一名商賣のススメ)第二編とも
 蓄財貯金の實際を述べたるもの第二編は廿年の出版。
 民富通言 洋中 一冊 寺島 宗則著
 理篇と勢篇の二論に分つ、一は經濟哲學的、他は經濟
 政策的にして全卷二十六ヶ條(二十六章)より成る。
 商政標準 洋小 一冊 天野 爲之著
 商業政策論である。

明治二十年

勤業理財學 洋小 二冊 高橋 是清譯
 將來の日本 洋小 一冊 徳富猪一郎著
 經濟原論 洋中 一冊 天野 爲之著
 政府大改革之顛末 洋小 一冊 齋藤和太郎編述
 日本國勢論 洋小 一冊 山本 忠輔著
 (一名義勇之進歩)
 世界の大勢を論じ軍備の擴張の必要を説く。
 明治二十三年國會の準備 洋小 一冊 遠藤 愛藏著
 近時不景氣原因及救濟策 洋小 一冊 日本經濟會刊
 海運史料 洋小 三冊 小篠清見編
 工商政策論 洋中 分冊 ライトゲン講述
 簿記學起原考 洋小 一冊 海野力太郎纂述
 泰西理財精蘊(工業之部) 洋小 上卷 岳總 治譯述
 (一名工業之部)
 本書は理財の字を冠するも内容はフロックの統計書の譯。
 經濟學術新誌 洋小 初號 經濟學術社
 國會之準備 藤田 一郎立案
 (設立大日本義會概文及び會則草案)
 簿記學獨習(商業之部) 和中 一冊 青柳源十郎著
 内地雜居の利害及び 洋小 各冊 甲谷新太郎(論)
 其の實施の方法 乙華殿仙士(論)
 (毎日新聞附録として發行せるもの) 丙村井 寛(論)

經濟學大意 洋中 一冊 土子金四郎著
 實地經濟學 洋小 一冊 大木 太藏譯
 未來の商人 洋小 一冊 會田愛三郎著
 (一名功名の魁)
 東洋遺稿 洋小 二冊 高田 早苗編
 (小野梓遺稿)
 内地雜居經濟未來の記 洋小 一冊 松永 道一著
 (一名未來の商人)
 日本商業教育論 洋小 一冊 河上 謹一譯
 貧困救濟論 洋小 一冊 大野直輔譯述
 (實節德フオーセット原著)
 一句千金理財の種時 洋小 一冊 黒田太馬譯述
 政治の骨 洋小 一冊 清水 亮三編
 歐洲各國職業會社論 洋小 一冊 俣野 時中譯
 (バルト原著)
 商業指針 洋小 一冊 松永 道一著
 新商策 洋小 一冊 松永 道一著
 日本論 洋小 一冊 東洋 散人
 (一名日清論)
 肥培論 洋中 一冊 渡部 朔譯
 (フエスカ演説の譯)
 肥料論で茲に採るべきでないが功勞外人の著書として
 採る。
 訂正再版簿記學例題 洋小 一冊 森島修太郎著
 條約改正論(東洋遺稿) 洋小 一冊 小野 梓著

内地雜居東京未來繁昌記 洋小 一冊 大久保常吉著
 二十三年後未來記 洋小 一冊 末廣 政憲著
 西洋學藝雜誌(月刊) 洋中 初號 西洋學藝雜誌社
 租 (實節德原著) 洋中 一冊 矢野常太郎譯
 財 (ピシヨッフ原著) 洋中 一冊 飯山 正秀譯
 日本古代商業史(ケンプヘルの原著より抄譯) 洋中 一冊 島田壯介抄譯
 世人の注意銀行の内幕 洋小 第一編 山口 元德著

明治二十一年

經濟 對話 洋小 一冊 鈴木 重孝譯
 商法會議之仕方 (一名萬民めざまし) 洋小 一冊 岡本 純著
 井上農商務大臣の談話・フエスカ氏の農業改良按 洋小 一冊
 日本農業及び北海道殖民 マックス・フエスカの所論翻譯。 洋小 一冊 中根 重一譯
 商業の骨 洋小 一冊 佐久間剛藏著
 萬國統一論 洋小 一冊 中澤文右衛門著述
 經濟黄金の花 洋小 一冊 後藤、高橋共著
 小説體を以て經濟學の知識を紹介したもの。 洋小 一冊 坂牧 勇助譯
 Ancien Japon 洋小 三冊 Par G. Appert.

貿易協會雜誌(月刊)

明治二十二年

貿易協會雜誌(月刊) 洋中 初號 貿易協會
 經濟學汎論 洋小 一冊 蟻川 堅治著
 李氏經濟論 洋中 二冊 大島 貞益譯
 國民理財學 (キール原著) 洋中 二冊 有賀長雄註譯
 萬國商業地誌 洋中 一冊 永田 健助著
 提要理財學 洋中 一冊 荒井甲子三郎著
 財政學(コッサ著) 洋中 一冊 町田忠治重譯
 地方財政學 (ライトゲン著) 洋小 一冊 中根重一口譯
 須多因氏講義 洋小 一冊 宮内省藏版
 生命保險論 洋小 一冊 藤澤利喜太郎著
 日本未來の商業 洋小 一冊 今 外三郎著
 大日本帝國憲法 洋大 一冊 官報號 外
 同 洋小 一冊 改進新聞附錄
 自由東道 洋小 一冊 館野芳之介著
 條約改正内地雜居の利害 洋小 一冊 山田寅二郎著
 報知新聞論說條約改正問答 洋小 一冊 久世 久編
 條約改正叢談 洋小 一冊 安住佐太郎編

内地雜居論 洋小 一冊 井上哲次郎著
 條約改正如何 洋小 一冊 植木 枝盛著
 條約改正論 洋小 一冊 田口卯吉演說
 政治小説條約改正 洋中 初篇 塚原 靖著
 條約改正論 洋小 一冊 島田 三郎著
 經濟及統計(月刊) 洋中 第一號 經濟統計社
 保守新論(月刊) 洋中 第一號 中正 社
 國 (日本之時事第十八號) 洋中 第一號 博文 館
 憲法雜誌(月刊) 洋中 第一號 憲法 誌社
 自治新誌(月刊) 洋中 第一號 三省 堂
 日本理財雜誌(月刊) 洋中 第一號 理財雜誌社
 天野爲之の主宰せる雜誌。 洋中 第一號 大政 社
 代議政友(月刊) 洋中 第一號 政 社
 稅法雜誌(月刊) 洋中 第一號 大阪 支會

明治二十三年

經濟 原論(講習全書) 洋小 一冊 有賀 長文著
 經濟 學史 洋小 一冊 武田 律譯
 經濟學研究法(講習全書) 洋小 一冊 天野 爲之著
 應用經濟學 洋小 一冊 嵯峨根不二郎著

實用經濟學(ポーカー) 洋小 一冊 中川小十郎譯述
 日本經濟論 洋小 一冊 藤田 一郎著
 哲理銀行論 (マクレオド) 洋中 一冊 金谷 昭譯
 理財字典 (レオンセー) 洋中 二冊 主計局 編
 準備金始末 洋中 一冊 大 藏 省
 金融逼迫の景況に付 東京商工會
 調查委員の報告 東京商工會
 東京商工會議事要件第四十六號別冊附錄。
 歲計豫算論 洋中 二冊 主計局 譯
 國債沿革略 洋大 一冊 大 藏 省
 商政一新 洋小 一冊 高橋 義雄著
 農業保險論 洋中 一冊 齋藤、渡邊共譯
 マイエットの強制農業保險論の翻譯で、マイエットは
 農業保險に上らざれば、日本の農民は救済更生せざる
 を説き、農業保險實施につき詳細な立案を企てた有益
 無比の大著である。
 商家實用帳合活法 洋中 一冊 秋山、石川合著
 實用銀行簿記例題 洋中 二冊 大場 多市著
 愛民公論(月刊) 洋中 第一號 愛 民 社
 富 國(月刊) 洋中 第一號 博 文 館
 日本商業雜誌(月刊) 洋中 第一號 博 文 館
 産業時論(月刊) 洋中 第一號 産業時論社

The Growth and Fall of Feudalism. By. W. E. Griffis. (Modern Revolution of Japan) Tokyo.

法規分類大全(大藏省の部) 洋大 二冊 内閣記録課
獨字政典(グレイ) 洋中 一冊 中根重一譯
商法草案 洋小 一冊
商法 洋小 一冊

明治二十四年

條約改正の標準 洋中 一冊 寺師宗徳著
情勢論 洋中 一冊 大島貞益述
信用組合論 洋中 一冊 平田、杉山合著
富強策 洋中 一冊 大石正巳著
日本商品學 洋小 一冊 戸田翠查著
日本地産論(フェスカ) 洋中 一冊 農商務省
日本海難救助法(マイエツト原著) 洋小 一冊 渡邊、齋藤合譯
財政原論(エーベルト原著) 洋中 一冊 寺田、手塚共譯
地價修正得失論 洋小 一冊 濱田健次郎著
歲計豫算論 洋中 一冊 細川潤次郎著
大日本農史 洋小 三冊 農商務省藏版
同附錄農事參考書解題 洋小 一冊 同

賦稅全廢濟世危言

日本振興策(エツゲルト原著) 洋小 一冊 城泉太郎著
災害救濟論(マイエツト原著) 洋中 一冊 織田一譯
高等經濟原論(マイエツト原著) 洋小 一冊 青山大太郎譯
東京商工會ノ調査ニ係ル商法修正意見書 洋中假 天野爲之補譯
政費節減策 洋小假 一冊 梶原菟喜編述
通商條約論 各家の政費節減意見に加ふるに海外政治家の意見を加ふ 洋中 一冊 杉山孝平著
條約改正斷行の意見 洋小 一冊 國友清人編輯
經濟學之原理 洋小 一冊 浮田和民譯
日本經國論(ラネットの原著を譯せるもの) 洋中 一冊 藤田一郎著
日本商業志 洋小 二冊 遠藤芳樹著
威氏經濟學(イリ) 洋小 一冊 佐藤昌介譯
商業經濟學 洋小 一冊 高槻純之助著

明治二十五年

民政論 洋小 一冊 都筑馨六著
本邦地租論 洋小 一冊 鐵山居士稿
國ノ境遇ト地租輕減 洋小 一冊 井上毅稿

東京商工會商法修正說ニ對スル駁論(法治協會雜誌號外)

洋中 一冊

明治二十六年

文明の幣及其救治(カイベンダー) 洋四六 一冊 民友社編
勞働問題(ジエブオンス) 洋 一冊 吹田調六譯
日本農民の疲弊及其救治策(マイエツト) 洋 一冊 齊藤、藤井共譯
貨幣說(日奔斯) 洋 一冊 大島貞益譯
國民理財學(キール) 洋 一冊 有賀長文譯註

明治二十七年

日英條約改正記事 洋 一冊 外務省編
今世國務論 洋菊 二冊 ボーリエー著
今世國家論 洋菊 一冊 ボーリエー著
理想的國家(モリア) 洋 一冊 荻原民吉譯
新舊社會主義(グラハム) 四六 一冊 森山信規譯
政治及經濟 洋 一冊 カニングハム著
統計之神髓(エンゲル) 洋菊 一冊 吳文聰譯

國家的社會論 洋小 一冊 斯波貞吉著
商工業對外策 洋小 一冊 稻垣滿次郎著
官民調和策 洋小 一冊 米谷清壽著
米價ヲ平準ニスル方案 洋小 一冊 大藏省
泰西經濟學者列傳 洋小 一冊 鹽島仁吉編
所見 和中 一冊 前田正名著
ブールス 洋小 一冊 小野友次郎著
本邦地租論 洋中 一冊 國府義胤著
本邦地租論 洋中 一冊 日本經濟學會
日本經濟學會が懸賞募集せし標題及當選文二即ち錄
山居士及び越南樵夫起稿の本邦地租論を收錄
大日本商業史(附平戸貿易史) 洋中 一冊 菅沼貞風著
社會問題(ヘンリージョージ) 洋小 前篇 江口三省譯
農業經濟篇 洋中 一冊 今關常次郎述
應用經濟地理學 洋小 一冊 伊勢本一郎編
改良形式銀行簿記教科書 洋中 一冊 大原信久著
現行條約論 洋小 一冊 原敬著
辯妄(法治協會雜誌號外) 洋中 一冊
商法及商法施行條例修正案 洋中 一冊 東京商業會議所查

哈氏鐵道運輸論 洋菊 一冊 小松謙次郎譯
威氏租稅論(イリ) 洋四六一冊 家永、鹽澤共譯
經濟學粹(ラブレ) 洋 牧山 耕平譯
應用經濟學 洋 巖根不二郎譯述
人類交際論(ハルカ) 洋 田中龍眉譯述
統計之神髓一名社會狀態學(エンゲル) 吳 文 聰譯

明治二十八年

日米條約改正記事 洋 一冊 外務省編
國家社會主義及び民人の權利を論ず 吉田己之助譯
東洋經濟新報(第一號) 洋大 一冊 東洋經濟新報社
商業經濟論(レキシス) 洋菊 一冊 岩村 茂譯

明治二十九年

外國商業恐慌史要 洋三六二冊 三井物産編
歐洲商業開化史(器賓) 洋四六一冊 永田健助譯補
商工經濟編 洋菊 二冊 平田東助等譯
森林經濟編 洋菊 一冊 望月 常譯
海外爲替要編 洋菊 一冊 成瀬 正泰譯
公債論(ゴスシエン) 洋菊 一冊 アダムス合著
小野英次郎著

哲理經濟學史 洋菊 一冊 阿部虎之助譯
經濟原論(イングラム) 洋 一冊 井上辰九郎譯
英國產業史(ギツピンス) 洋 水上 梅彦譯

明治三十年

貧民問題(ホブソン) 遠藤 十郎譯
理論實際生命保險論 洋四六一冊 菊地綾五郎譯
農業經濟論(ウイレル) 洋菊 一冊 成島 謙吉譯
外國貿易論(ルクウトウ) 洋菊 一冊 土子、田島共譯
經濟政策(バスター) 洋菊 一冊 土子、田島共譯
國民銀行論(ウオルフ) 洋菊 一冊 東京專門學校編輯部編
單稅 洋菊 一冊 ガルスト著

明治三十一年

經濟學研究法(キエインズ) 洋菊 一冊 天野 爲之譯
國家經濟論(シエインベルヒ) 洋 依田 昌言譯
英國拓殖地印度及雜領地制度(安遜原著) 菊假 一冊 遠藤剛太郎譯
歐氏經濟論(ライカー) 洋菊 一冊 栗田、山本譯述

明治三十五年

工業的勞働者問題(シュインベルヒ) 洋菊 一冊 草鹿了卯次等譯
開化諸國に於ける感化事業 洋菊 一冊 田中 太郎譯
經濟統計學(スミス) 洋菊 一冊 吳 文 聰譯
實業の帝國(カーネギー) 洋菊 一冊 小池 靖一譯
實業の帝國(カーネギー) 洋四六一冊 吉田、柴原共譯
最近商政經濟論(ワグナー、プレントナー) 洋菊 一冊 關、福田共譯
奢侈亡國論(ラブレ) 洋菊 一冊 寺内淳二郎譯

明治三十六年

小説勞働問題(ゾラ) 四六 堺 利彦譯
十九世紀に於ける社會主義及社會的運動(ソムバト) 菊 一冊 神戸 正雄譯
社會小説百年後の新社會 菊 一冊 平井廣五郎譯
社會研究晚婚論(オーゲル) 一冊 田中 太郎譯
窮民救助法論(ファオル) 洋四六一冊 田中 太郎譯
社會問題 洋四六一冊 リギョル共著
富の福音(カーネギー) 洋 伊藤重治郎譯
交通政策(コルソン) 洋菊 一冊 關 一解説

日本主義と世界主義 洋 前田 長太譯
商工經濟論(ロツシエル) 平田、武田共譯
英國殖民誌(ルーカス) 洋菊 一冊 臺灣總督府譯

明治三十二年

社會之進化(キッド) 洋 一冊 角田 柳作譯
社會道德ニ關スル統計表 假綴 一冊 ユージーモルフ著
單稅經濟學 洋 ガルスト著
財政學(コーン) 洋 天野高之補譯

明治三十三年

奧國郵便貯金機關小切手制度(レイト) 假綴 郵便貯金局編
秘密結社(リギョル) 洋四六一冊 前田 長太譯
社會學(フエーアバンクス) 洋菊 一冊 十時 彌譯述

明治三十四年

農政學(テル・ゴルワ) 洋菊 一冊 高岡 熊雄譯

大工業論 (シユルツエーゲヤーフアトニツツ) 洋菊 一冊 山崎覺次郎譯
 銀行論 (ダンバー) 洋菊 一冊 堀江歸一譯
 蘇格蘭銀行制約 (カールマムロート) 菊假 一冊 東京銀行集會所譯
 經濟原論 (フイリツボ・グイッチ) 菊假 一冊 氣賀勘重解説
 經濟學の基礎 (スマルト) 菊假 一冊 桐生政次譯
 經濟要論 (ホルガール) 洋菊 一冊 横山正修譯
 社會小説百年後之社會 (ベラミー) 洋菊 一冊 平井廣五郎譯述

明治三十七年

都市之經營 (ベーカー) 洋菊 一冊 井上秀二譯
 理想郷 (モリス) 菊 一冊 堺利彦譯
 虛無黨奇談 (キニー) 四六 松居松葉譯
 百年後の新社會 (ベラミー) 洋菊 一冊 堺利彦譯
 近時の戦争と經濟 (ジュアン・プロツホ著) 洋菊 一冊 栗津清亮譯
 生死論 (スケヰイハーヴェン) 洋菊 一冊 内池廉吉解説
 商業の通論 (フワンデルホルヒト) 洋菊 一冊 和田垣津田共譯
 英國商業史 (フライイス) 洋菊 一冊 函館稅關編
 外國貿易論 (バステール) 洋菊 一冊 函館稅關編

明治三十九年

財政學 (ワグナー) 洋菊 一冊 瀧本美夫解説
 明治三十八年
 殖民地財政制度 (オースチン) 洋菊 一冊 臺灣總督府譯
 通俗社會主義 (ブラツチアオド) 洋菊 一冊 堺利彦譯
 實業の鍵 (カーネギー) 洋菊 一冊 伊藤重治郎譯
 歴史の經濟的説明新史觀 (セーリグマン) 菊 一冊 河上肇譯

明治三十九年

移住論 (スミス) 洋菊 一冊 光吉元次郎譯
 廿世紀の大覺醒 (ストロング) 洋菊 一冊 石川三四郎譯
 理想國 (プラトーン) 洋菊 一冊 木村鷹太郎譯
 社會學 (キチング) 洋菊 一冊 警醒社編輯部譯
 經濟政策 (フイリツボグイッチ) 菊 一冊 氣賀勘重解説
 明治四十年
 日本經濟史論 (福田德三) 洋菊 一冊 坂西由藏譯
 日本新關稅率評論 (カルミンスキ) 洋菊 一冊 大藏省主稅局譯

產業合同論 (オキツプアレンクス) 洋菊 一冊 別府丑太郎譯
 革命奇談神愁鬼哭 (ドキツチ) 四六 堺利彦譯
 人間發生の歴史 (ボエルシエ) 洋菊 一冊 神崎順一譯
 下僕の生涯 (トルストイ) 洋菊 一冊 神崎順一譯
 世界各國最近の商業教育 洋菊 一冊

明治四十一年

英國産業革新論 (トインビー) 洋菊 一冊 吉田己之助譯
 財政學 (バステール) 洋菊 一冊 井上高野共譯
 非官營論 (アヴェブリー) 洋菊 一冊 見城重平譯
 實業振興策 (チンホワード) 洋菊 一冊 平田久譯
 男女關係の進化 (エンゲルス) 四六 堺利彦譯
 動物界の道德 (クロボトキン) 四六 山川均譯

明治四十二年

經濟學論集 (シイガー等) 洋四六一冊 青柳定吉譯
 社會の經濟的基礎 (アキレロリア) 洋菊 一冊 平沼淑郎譯
 郵便貯金局郵便振替貯金事務史 (レイト) 洋菊 一冊 逓信省通信局

明治四十三年

近時經濟變動 (ウエルス) 洋菊 一冊 梅若誠太郎譯
 家族論 (ボサケイ夫人) 洋菊 一冊 田中達譯
 社會主義と社會改良主義 (イリ) 洋菊 一冊 安部磯雄譯
 排社會主義論 (ラツシグナル) 洋菊 一冊 井上芳磨譯
 社會政策と近世科學 (フエリ) 菊 一冊 樋口秀雄譯
 麵麩の略取 (クロボトキン) 菊 一冊 幸徳傳次郎譯
 英國殖民發達史 (エヂアトソン) 洋菊 一冊 永井柳太郎譯
 大英國國民 (エミールブリーミー) 洋菊 一冊 加藤直士譯
 英國殖民史 (ヤルテコット) 洋菊 一冊 水崎基一譯
 明治四十三年
 社會經濟學 (ジード) 菊 一冊 安藤忠義譯
 アダム・スミス富國論 (アシレ抄) 洋菊 一冊 三上正毅譯
 アツシレー抄略人口論 (マルサス) 洋四六一冊 三上正毅譯
 租稅論 (セリグマン) 洋菊 一冊 三上正毅譯
 產業社會之進化 (イリ) 洋菊 一冊 後藤長榮譯
 恐慌論 (バートン) 洋菊 一冊 古仁所豐譯
 群集心理 (ル・ボン) 洋菊 一冊 大日本文明協會譯

小説社會主義が實行されたなら(リヒテル) 菊 勝屋 錦村譯
民族發展の心理(ル・ボン) 洋菊 一冊 前田 長太譯
殖民政策(ランチ) 洋菊 一冊 松岡、田宮共譯
英國殖民史補遺 洋菊 一冊

明治四十四年

統計學論(フォール) 洋菊 一冊 高橋 勝弘譯
生命保險通解(スクーリング) 洋菊 惣崎 貞夫譯
現代生活の新聞題(ステルウツグ) 洋 姉齒 準平譯
婦人と經濟(ギルマン) 洋菊 一冊 多和たけ等譯
社會主義と自由思想(レゼー) 洋四六 一冊 和佛協會譯
獨國労働者の生計狀態(英國商務院) 洋菊 一冊 生産調査會譯

明治四十五年

大正元年

資本及利子歩合(フィッシャー)

河上 肇評譯

五六

世界商業史(クライヴ・デー) 洋菊 一冊 三上正毅譯述
殖民政策(政治學叢書) 洋菊 稻田周之助著
白耳義國労働者の生計狀態(英國商務院) 洋菊 生産調査會譯
農工業の調和(クロボトキン) 菊 佐藤 寛次譯
細民ト救済 菊 生江 孝之著
労働保險 菊 社會政策學會編
米國労働者の生計狀態 菊 生産調査會譯
職工問題資料第一輯 菊 宇野利右衛門編
臺灣殖民政策 菊 持地六三郎著
財政學 菊 三上 正毅著
財政論 菊 乘竹孝太郎著
質銀論 菊 松村 光三著
土地經濟論 菊 河田 嗣郎著
稿本日本金融史論 菊 瀧澤 直七著

大正二年

經濟學講義(第一編流通總則) 菊 福田 徳三著
チエボンズ經濟學純理(内外經濟學名著第一冊)(チエボンズ) 菊 福田 徳三譯

經濟學研究 洋菊
經濟學評論 洋菊
社會問題ノ根本觀念 洋菊
労働問題 洋菊
内外商業政策(五卷) 洋菊
工業金融論(最近經濟問題叢書) 洋菊

大正三年

銀行集中論 菊
日本財政論 菊
生計費問題 假菊
労働功程論 假菊
労働争議 洋菊
分業論(法律學經濟學研究叢書第十三冊) 菊

大正四年

社會主義及社會的運動(ソムバルト) 洋菊
最近ノ社會問題 洋四六
職工組合論 洋菊

神戶 正雄譯
安部 磯雄著
山縣 憲一著

歐洲労働問題の大勢
アダム・スミスの帝國主義觀(ニコルソン)
貧乏物語

大正六年

桑田 熊藏著
關口 健一譯
河上 肇著

職工優遇論 洋菊 宇野利右衛門著
英國労働不安 洋四六 土屋 興著
労働問題ト温情主義 假菊 鈴木恒三郎編
農村救済論 洋菊 横田 英夫著
米價變動史 洋菊 石原 保秀著
金融の原理 菊 高島佐一郎譯

大正五年

職工優遇論(總論第二) 洋菊 宇野利右衛門著
最近歐洲列強の財政及金融 洋菊 松崎藏之助著
財政と金融 洋菊 田尻 稻次郎著
財政界の諸問題 洋菊 小林 丑三郎講
最新財政學(改増版) 洋菊 松崎藏之助著
農村發展策 洋菊 横井 時敬著

五七

工場能率經濟 井關十二郎著
株式會社財政論 橋本良平著
商業賣買(上下) 小林行昌著
農産物倉庫論 内池廉吉著
交通論(第一編) 伊藤重治郎著
社會と經濟 津村秀松著
國民經濟講話(乾) 福田徳三著
經濟原論 山崎覺次郎著
經濟學原論(シャルル・ジード) 飯島幡司譯
歐洲最近の社會問題 桑田熊藏著

大正七年
公債論 小川郷太郎著
勞働問題十論 堀江歸一著
皇室社會新政 鈴木梅四郎著
資本と勞力の調和 吉井鐵四郎著
社會問題管見 河上肇著
經濟學考證 福田徳三著
勞働經濟講話 福田徳三著

經濟哲學の諸問題
大正八年
勞働問題の現在及將來 堀江歸一著
財政學(卷二) 小川郷太郎著
租稅研究 神戶正雄著
社會主義者の社會觀 山川均著
近世社會主義論(イリー) 河上清譯
日本に於ける社會政策の基礎 鈴木梅四郎著
歐米勞働問題 窪田文三著
日本の勞働者 森清右衛門著
マルクス資本論解説 高島素之譯
全譯資本論(マルクス) 松浦要譯
黎明錄 福田徳三著
八時間勞働問題 岡野辰之介著
工業政策 松崎壽著
マルクス派社會主義(ラーキン) 中目尙義譯
工業政策(上下訂正版) 關一著
溫情主義的施設 林癸未夫著

大正九年

社會問題及社會運動 河田嗣郎著
勞働者問題(ブレンダー) 森戸辰男譯
ゾムバド氏勞働問題と勞働政策 鈴木豐譯
現時の勞働問題概論 賣文社編
勞働問題講話 植田好太郎著
勞働者問題 北澤新次郎著
利子歩合論 高城仙太郎著
金融經濟論 飯島幡司著
マーシアル經濟學原理 大塚金之助譯

大正九年
社會問題と財政 小川郷太郎著
續租稅研究 神戶正雄著
土地國有論 秋守常太郎著
日本の勞働問題 鈴木文治著
勞働問題研究 河合榮次郎著
修正派社會主義論 嘉治隆一譯
理想郷(モリス) 堺利彦譯
社會主義論(イリー) 安部磯雄譯

歐洲戰後の資本と勞働 植原悦二郎著
マルクス資本論大綱 山川均著
全譯資本論(第一分冊) 生田長江譯
ギルド社會主義(マルクス) 室伏高信著
ギルド(第一卷創生及建設) 黒田谷島譯
産業自治とギルド社會主義 米田庄太郎著
IWWの研究(總近社會思想の研究中卷別冊) 堀江歸一著
勞働組合論(社會叢書) 荒畑山川共著
勞働組合運動史 荒畑勝三譯
勞働組合論(ロイド) 井筒節三譯
勞働組合の話(コイル) 堺利彦著
恐怖闘争歡喜(社會問題批判叢書第一編) 山口義三著
階級闘争史論(レットカッパ叢書第四編) 高橋誠一郎著
經濟學史研究 小林丑三郎著
經濟思潮史 時園理一譯
農業と社會主義(カーベントア) 本庄榮治郎著
經濟史研究 竹越與三郎著
日本經濟史(全八冊) 瀧本誠一著
日本經濟史 山崎覺次郎著
貨幣銀行問題一斑

證券市場改造論 來栖 健助著
 海運經濟論 小島昌太郎著
 植民政策研究 山本美越乃著
 國史上の社會問題 三浦 周行著
 私有財産主義 井筒 節三著
 資本主義對過激主義 豐原 又男譯
 社會問題 神戸 正雄著
 (財政經濟及社會叢書第二册)
 社會改造の諸問題 佐野 袈裟美著
 近時の社會問題 小林 鐵太郎著
 社會問題講話 平沼 淑郎著
 社會及社會問題研究 平沼 淑郎著
 マルクス全集 高島 素之譯
 (資本論、經濟學批判、價值價格及利潤、
 賃銀労働及資本、自由貿易論、神聖家族)
 クロポトキンの經濟學說 中山 啓譯
 (クロポトキン) 松浦 要譯
 マルクス經濟學說要旨 小泉 信三著
 經濟學說と社會思想 小泉 信三著

大正十年

租 稅 論 (上卷) 小川郷太郎著

空想的及科學的社會主義 (エンゲルス) 塚 利彦譯
 近世社會主義思想史 (メンガー) 森戸 辰男譯
 社會主義とは何ぞや (カーカッパ) 島中 雄三譯
 社會主義と進化論 高島 素之著
 近代英國社會主義 (マックスベア) 小島 幸治譯
 暗 雲 錄 福田 德三著
 ナショナルギルド (ホブスン) 高橋 正熊譯
 勞農露西亞の研究 山川、菊榮共著
 ボルシエヴキズム批判 中目 尙義譯
 勞農革命の建設的方面 (レニン) 山川、菊榮共著
 近世經濟思想史論 河上 肇著
 經濟史考 本庄榮治郎著
 日本經濟史 (原論) 本庄榮治郎著
 日本經濟史の研究 (下卷) 内田 銀藏著
 日本經濟史の研究 (上卷) 内田 銀藏著
 (内田遺稿全集第一輯) 内田 銀藏著
 日本經濟史 (上卷) 權田保之助譯
 改刻再版、經濟的文明史論 高島 素之譯
 財產進化論 (ポールラファギユ) 佐野 學著
 露西亞經濟史研究

各國に於る土地分配の狀況 農商務省農務局
 食糧と社會 (小作參考資料) 河田 嗣郎著
 現代の商業及商人 福田 德三著
 株式會社經濟論 上田貞次郎著
 企業論 (シユモラー) 増地庸治郎著
 日本殖民政策一斑 後藤 新平著
 植民地問題私見 山本美越乃著
 植民地統治論 泉 哲著
 社會問題概論 安部 磯雄著
 現代の日本と社會問題 窪田 文三著
 社會問題研究 小泉 信三著
 現代日本と社會問題 窪田 文三著
 經濟學論攷 福田 德三著
 植民原論 永井柳太郎著
 特殊部落の解放 岡本 彌著

大正十一年

社會政策と階級闘争 福田 德三著
 財政學評論 小林丑三郎著

財政學講義 (上卷) 阿部 賢一著
 最新財政學綱要 宇都宮 鼎著
 財政 (政 學) (卷一財政總論) 小川郷太郎著
 租 稅 研究 (第三卷) 神戸 正雄著
 労働問題と労働運動 永井 亨著
 資本主義と社會主義 (ポール) 堀 經 夫譯
 社會主義的諸研究 高島 素之著
 社會 政 策 田 中 貢著
 英國經濟史及學說 (上) (アシユレー) 野村兼太郎譯
 支那經濟史研究 田中 忠夫著
 現下の農民運動 横田 英夫譯
 土地爭奪史論 阪上 信夫著
 地主と小作人爭議及其解決 工藤 榮助著
 農業爭議概説 岡山縣警察部
 農業労働と小作制 河田 嗣郎著
 農政問題研究 高岡 熊雄著
 世界社會主義運動の現勢 (マルクス社會科學叢書第四編) 堀 利 彦著
 社會主義批判 (マロツク) 尾原亮太郎譯

労働組合運動の理論と歴史(ゾンバルト) 森戸辰男譯
 新労働組合運動(大原社会問題研究所叢書ノ第七) 角田睦雄著
 産業民主制論(上巻)(ウエップ) 高野岩三郎譯
 産業福利問題 永井亨著
 産業民主主義運動 林癸未夫著
 労働協調平和策の研究 宇野利右衛門著
 西洋社会運動史 石川三四郎著
 ボルシェヴィズム研究 福田徳三著
 貨幣(固定學說(クナツプ・ゲ・エフ)) 宮田喜代藏譯
 社会苦の研究 杉山榮著
 社会組織の経済的批評 小泉信三著
 植民新論 松岡正男著

大正十二年

労働問題と労働運動 永井亨著
 労働問題歸趣 藤原銀次郎著
 敵陣を俯視して 山川均著
 社会主義は危険思想に非ず 安部磯雄著
 社会主義新批判 川邊喜三郎著

修正派社会主義概論(マクドナルド) 古屋美貞譯
 社会科学大系(第四) 安倍浩譯
 近世社会主義(バラノウスキー) 水谷長三郎譯
 科学的社会主义序論(ホルハルト) 河田嗣郎著
 農業社会主義と組合社会主義 小泉信三著
 價值論と社会主義 大野信三譯
 経済思想史(上)(ヘネー) 佐野學著
 (社会科学大系二) 上田貞次郎著
 日本経済史概論 佐野學著
 英國産業革命史論 河田嗣郎著
 農村問題 西雅雄譯
 農業経済學 永井亨著
 マルクスの生涯と學說(ベーツ) 高橋誠一郎著
 産業立憲の研究 植田好太郎著
 協同主義への道 安井英二著
 總同盟罷業の研究 桑田熊藏著
 労働運動の研究 内山賢次譯
 歐洲戦後の社会運動(ヒルキット) 内山賢次譯

ギルド社会主義の理論と政策(コール) 白川威海譯
 アダム・スミスの経済思想 谷口彌五郎著
 資本主義経済學の史的発展 河上肇著
 経済思想史(上下)(ヘネー) 大野信三譯
 企業形態論(リーフマン) 増地、榎原共譯
 産業貿易論(マーシャル) 佐原貴臣著
 最新世界植民史 大鹽龜雄著
 本邦人口の現在及將來 高野岩三郎著
 植民夜話 東郷實著
 水平運動と其考察 文化研究会編
 修正経済學原論(ジイド) 飯島幡司譯
 経済法則の論理的性質(左右田喜一郎) 勝本鼎一譯

大正十三年

現時の金利及爲替問題 松崎壽著
 財政學の基礎概念 土方成美著
 財政學 阿部賢一著
 租稅論講義 土方成美著
 社会主義の時代 安部磯雄著

社会主義経済學(ハインドマン) 上原好咲譯
 社会政策綱領 永井亨著
 勞賃價格及利潤(マルクス) 河上肇譯
 日本資本主義経済の研究 高橋龜吉著
 日本経済史文獻 本庄榮治郎著
 日本社会史 本庄榮治郎著
 農業政策 石坂橋樹著
 労働組合運動 赤松克麿著
 英國の労働組合運動 渡邊鐵藏著
 経済學說史研究 山口正太郎著
 貨幣と金融 松崎壽著
 貨幣の價值 左右田、川村譯
 商業經濟論 戸田海市著
 商業學概論 内池廉吉著
 資本主義最後の段階としての帝國主義(レーニン) 青野季吉譯

大正十四年

労働の世界(改訂版)(デイ・デイ・エッチ・コール) 田邊忠男譯

社會主義及社會運動 (ゾムバルト)
 中世の社會思想 (ペーア)
 大英社會主義國の構成
 社會政策 (總論)
 社會政策論 (ブニーデンホルス)
 田園、工場、仕事場 (クロボトキン)
 マルクス學說體系 (ルイスブデン)
 マルクスとエンゲルス
 新社會主義の批判 (ホーリユ)
 新カント派の社會主義觀
 勞働組合組織論
 階級闘争の進化 (ハインドマン)
 古代の社會闘争 (ペーア)
 失業、經濟 (ホブソン)
 獨逸勞働組合運動史 (ネストリーブケ)
 國際勞働組合運動 (ロツグスキー)
 英國勞働運動概觀 (フランシヤード)

林 要譯
 西 雅 雄譯
 丸岡 重堯譯
 波多野 鼎譯
 戸田 海市著
 中山 啓譯
 山川 均譯
 嘉治、後藤共著
 和田 利彦譯
 橫濱社會問題
 研究所 編
 山 川 均著
 山 川 菊榮譯
 西 雅 雄譯
 今村源三郎譯
 協 調 會 譯
 堀 利 彦著
 美濃口時次郎譯

日本勞働運動發達史
 (社會問題叢書第三編)
 日本社會運動史觀
 勞働露西亞の勞働
 產業自治論 (コール)
 最近經濟學說 (ジード)
 經濟學 史 (イングラム)
 支那古代經濟思想及制度
 特殊部落史
 世界經濟史概論 (シュミット)
 經濟生活の歴史的考察
 郷土制度の研究
 農民運動の現在及將來
 日本農民騷動史
 土地經濟論
 農村問題と社會理想
 農村問題と對策
 近世農村問是史論
 農業の社會化
 (カウツキイ・マルヒオニニ)

赤松 克麿著
 町田辰次郎著
 山 川 均著
 浮田 和民譯
 金井 經司譯
 米山 勝美譯
 田崎 仁義著
 高橋 貞樹著
 川西 正鑑譯
 坂西 由藏著
 小野 武夫著
 小野 武夫著
 木村 靖二著
 河田 嗣郎著
 那 須 皓著
 河田 嗣郎著
 本庄榮治郎著
 河西太一郎譯

社會主義と農業問題 (ミルユーチン)
 農業經濟學
 農政四十三講
 工業經濟論 (増訂改版)
 製鋼業發展史論
 貨幣信用と商業 (マーシヤル)
 金融機關の綜合的研究
 稅 關 論
 日本社會問題史觀
 現代社會生活の不安の疑問
 (社會問題叢書第一)
 歐洲社會問題の發達 (テンニース)
 社會問題辭典
 社會問題體系 (第一卷)
 社會問題體系 (自第一卷至第六卷)
 經濟政策學の本質並に生産政策原理
 (經濟政策原理第一卷)

河西太一郎譯
 石坂 橋樹著
 河田 嗣郎著
 桑田 熊藏著
 小島 精一著
 油谷 十二譯
 沖中 恒幸著
 小林 行昌著
 渡邊 策治著
 堀 利 彦著
 安 倍 浩譯
 高島 素之著
 河田 嗣郎著
 河田 嗣郎著
 那 須 皓著

英國勞働階級の狀態 (エンゲルス)
 無產者講話
 無產階級の方向轉換 (一)
 經濟學批判の方法論
 理論 闘 争
 マルクス主義の時代 (ペーア)
 (社會主義史第五編)
 マルクス十二講
 マルクス、エンゲルス評傳
 (カウツキイ)
 マルクシズム批判
 (ベルンシュタイン)
 社會主義の新解釋
 (社會哲學說大系一八)(ツガン・バラノフスキー)
 社會主義史
 (マックス・ペーア)
 共產主義と社會主義
 社會政策新原理
 社會問題綱要
 リカード價值論研究
 マルクス價值論の社會的研究
 (ペーア)
 日本經濟學史
 正統學派經濟學說研究

竹内 謙二譯
 山 川 均著
 北條 一雄著
 福本 和夫著
 北條 一雄著
 西 雅 雄譯
 高島 素之著
 大内、櫛田譯
 金原賢之助譯
 矢部 周譯
 西 雅 雄譯
 室伏 高信著
 林 癸 未夫著
 河田 嗣郎著
 森 耕 二郎著
 友岡 久雄譯
 瀧本 誠一著
 津田 誠一著

大正十五年
昭和元年

唯物史觀より見たる經濟史
(社會思想叢書六)
 住谷 悅治著

經濟學史
(大正十五年東大講義)
 舞出長五郎著

經濟學說史(シュパン)
 鷺野隼太郎譯

唯物史觀より見たる經濟學史
 住谷 悅治著

英國價值學說史(リイブクネヒト)
(社會思想叢書第五編)
 八木澤善次譯

轉換期の經濟學
(露ニユライ・ブハーン)
 稻垣 守克譯

物價問題
 高城仙次郎著

我國民經濟と財政
 土方 成美著

日本經濟の行詰と無産階級の對策
 高橋 龜吉著

世界經濟論(フハリン)
 富士辰馬著

植民及植民政策
 矢内原忠雄著

人口思想史論
 玉井 茂著

農村副業問題
(農村問題大系九)
 小平 權一著

明治大正農村經濟の變遷附同資料
 高橋 龜一著

農業問題研究
 河西太一郎著

農政問題研究(増補版)
 高岡 熊雄著

資本主義と農村問題
(社會問題叢書)
 中澤辨次郎著

農業と社會主義
(農村問題叢書一二)
 國際貿易と金融

經營經濟學序論
 カルテルとトラスト

社會經濟學序論(カツセル)
 海運同盟論

貨幣の生成
 貨幣と信用
(金融資本論)(ヒルファデーイング)

貨幣經濟の研究
 戦後に於ける我國の經濟及金融

我國の金融市場
 金融の基礎知識

金融經濟一斑
 貨幣銀行外國爲替

昭和二年
 金貨本位制の興廢

資本主義末期の研究
 帝國主義と資本蓄積

平野 學著
 服部文四郎著
 増地庸治郎著
 小島 精一著
 大野 信三譯
 小島昌太郎著
 高垣寅次郎著
 林 要譯
 增井 光藏著
 井上準之助著
 山室 宗文著
 高橋 龜吉著
 堀江 歸一著
 堀江 歸一著

マルクス價值論の排撃
 特許植民會社制度研究
 植民政策の新基調
 人口問題批判
 人口と貧乏

マルキシズムの人口論(カウツキー)
(マルクス思想叢書五)
 土方 成美著

日本經濟の基礎構成
 恐慌と帝國主義(ヒルファデーイング)
(金融資本論分册三)
 大川 周明著

小農に關する研究
 新農業政策の提唱
 農業政策
 農村貧窮論

日本勞働運動史
(社會經濟體系第三卷)
 矢内原忠雄著

露西亞社會運動史
 日向 轉換
 左翼運動の理論的崩壞
 右翼運動の理論的根據
 マルクスの唯物辯證法(クノイ)

石橋 湛山著
 氣賀 勘重著
 杉山元治郎著
 今井 五介著
 鈴木 文治著
 伊藤 秀一著
 北條 一雄著
 高橋 龜吉著
 森谷 克己譯

農業經營理論
 株式會社經營論
 證券市場組織—企業金融の社會的組織—總論、各論
(資本主義經濟組織一)

貨幣の本質
 金融經濟の諸問題
 貨幣、信用、商業
(マーシャル)

金融資本論
 金融と恐慌
 世界經濟と國際金融

正統派マルクス主義とは何ぞや、
 ルカッチと彼のマルクス主義批判
(デボリン)
 ロバート・オーウェン—
 彼の生涯、思想並に事業
 元祿及享保時代に於ける經濟思想の研究
 リカアド批判
(剩餘價值學說史)(マルクス)
(マルキシズム叢書第十四冊)

マルクス價值論の終焉(バヴェルク)
(マルクス思想叢書一〇)
 産業經營理論

稲村 順三譯
 北野 大吉著
 中村 孝也著
 杉田 欣一譯
 神永 文三譯
 馬場 敬治著
 橋本 良平著
 向井 鹿松著
 高垣寅次郎著
 高島佐一郎著
 松本 金次郎著
 猪俣津南雄著
 堀江 歸一著
 堀江 歸一著

配給市場組織—財貨移動の社會的組織 (資本主義經濟組織)
 財 (田口卯吉全集)
 日本財政の特殊問題
 農民運動とその組織
 日本經濟研究
 人口問題
 マルサス人口論の研究
 人口法則と生存權論
 我國の經濟と金融の實際—最近の經濟・金融・爲替・財界
 農村社會問題 (農村問題大系第一編)
 レーニン労働組合論
 労働運動及無産者政治運動
 日本社會主義運動史講話
 經濟學批判のために
 社會主義及び社會運動 (ウエルナー・ゾムバルト) ロバート・オウエン自叙傳

向井 鹿松著
 田口 卯吉著
 汐見 三郎著
 近内 金光著
 土方 成美著
 矢内原忠雄著
 伊藤 久秋著
 南 亮三郎著
 高橋 龜吉著
 那須 皓著
 野坂、有村譯
 長谷川良信著
 横溝 光暉著
 福本 和夫著
 林 要譯
 本位田、五島譯

正統學派ノ價值學說 (價值學說史第一卷)
 貧民政策の研究
 産業經營學概說
 産業統制史論
 株式會社制度
 株式會社經濟論
 交通經濟學概論
 交通總論 (交通政策第一編)
 恐慌と獨占
 恐慌論 (近代經濟叢書第七冊)
 景氣變動論 (現代經濟學全集第十三卷)
 貨幣理論
 我國の經濟と金融の實際
 我國の金融市場續
 金融資本論 (ヒルファディング)
 資本論入門 (自第一分冊至第八分冊)
 昭和四年
 商業政策

波多野 鼎著
 海野 幸徳著
 馬場 敬治著
 小島 精一著
 日本經營學會編
 上田貞次郎著
 島田 孝一著
 增井 幸雄著
 小島 精一著
 近藤 年彦著
 高田 保馬著
 橋爪 明男著
 高橋 龜吉著
 小室 宗文著
 林 要譯
 河上 肇著
 河津 暹著

市場論

(商學全集第十二卷)

市場要論

通貨問題としての金解禁

金本位制と中央銀行政策

金解禁直後の財界

金解禁の影響と対策

金解禁—全日本に叫ぶ

金 解 禁

貨幣制度

日本人口論

帝國主義と世界經濟 (アハーリン)

農業土地問題 (農村問題大系七)

イギリス労働運動史論 (ロートシュタイン)

我國に於ける労働運動戰術の解剖

最近の社會運動

現代日本研究—

マルクシズムの立場より

マルクス主義批判者の批判

マルクシズムとボルシェビズム

福田敬太郎著

内池 廉吉著

深井 英五著

田中 金司著

勝田 貞次著

石橋 湛山著

井上準之助著

土方 成美著

高垣、荒木著

永井 享著

武井 三郎譯

橋本傳左衛門著

廣島 定吉譯

小浦 六助著

協 調 會 編

猪俣津南雄著

社會問題各論 (現代經濟學全集第九卷)
 佐藤信淵に關する基礎的研究
 リカアド研究
 剩餘價值學說史第一卷 (マルクスエンゲルス全集第八卷)
 剩餘價值學說史第三卷 (マルクスエンゲルス全集第十一卷)
 埃國學派の價值學說 (價值學說史第二卷)
 經濟學史 (現代經濟學全集第七卷)
 重農派經濟學ノ人々 (英國經濟學史論(ロツシャイ)内外經濟學名著第六冊)
 經營 要論
 産業合理化
 産業の合理化 (商學全集第九)
 新經營者學—新時代の事業とその經營者
 商業問題
 經營經濟學の本質
 經營經濟學總論
 貨幣學の實證的研究
 通貨問題としての金解禁

林 癸未夫著
 羽仁 五郎著
 小泉 信三著
 向坂 逸郎譯
 林 要譯
 波多野 鼎著
 高橋誠一郎著
 山本正太郎著
 杉本 榮一譯
 増地庸治郎著
 平井泰太郎著
 小島 精一著
 向井 鹿松著
 内池廉吉外三人
 池内 信行著
 向井 鹿松著
 牧野 輝智著
 深井 英五著

通貨調節論
日本金融資本論
金融資本と帝國主義
貨幣及銀行原理
自然經濟と意志經濟—
經濟學の根本問題—

昭和五年

賣買組織論—
貨物配給の原理(クラーク)
關稅と物價
商業政策
(現代經濟學全集第十七卷)
社會的財政學
財政學大綱
プロレタリアと日本の財政
日本金融史
新平價論の誤謬と財界の推移
人口及人口問題
人口理論—研究と方法
日本經濟の合理化

深井英五著
小島精一著
猪俣津南雄著
服部文四郎著
作田莊一著

緒方豐清譯
小林行昌著
上田貞次郎著
大畑文七著
大内兵衛著
久保寺三郎著
石橋湛山著
勝田貞次著
本庄榮治郎著
林惠海著
勝田貞次著

世界經濟と合理化運動
世界經濟(總觀)
日本農村經濟の研究
農村問題講話
農民貧乏論
蠶絲業資本主義史
失業問題と景氣回復
左翼運動組合の組織と政策
勞働組合の話、附、勞働組合法批判
マルクス主義の根本問題
マルキシズム批判
社會主義の發展(エンゲルス)
第二貧乏物語
經濟思想史論
マルサスと彼の業績
剩餘價值學說史第二卷第一部
折衷學派の價值學說
株式會社亡國論
世界經濟恐慌

小島精一著
野村武一譯
高橋龜吉著
中澤辨次郎著
木村靖二著
森泰吉郎著
上田杏村著
渡邊政之輔著
山川均著
入江武一譯
上田杏村著
堺利彦譯
河上肇著
八木澤善次著
堀經夫譯
吉田秀夫譯
大森義太郎譯
波多野鼎著
高橋龜吉著
經濟批判會

貿易經營論
企業統制論
企業形態論
經營經濟學の成立
産業合理化の批判
産業合理化
(經濟學全集第四十三卷)
商工營業
植民地鐵道の世界
經濟的及世界政策的研究
我國の景氣循環と景氣指數
信用組合論
農業金融論
貨幣の理論
金の社會問題
信用統制と景氣變動
世界經濟と國際資本戰
(經濟學全集)
中小商工農業者は
没落か?更生か?

昭和六年

經營統計

菊

小林新著

經營學方法論
取引所論
商業概論
(商學全集三九)
財政學大綱(中卷)租稅論
金本位制動搖と
日本金融の將來
世界破局と日本經濟の變革
景氣轉換策としての
金輸出再禁止
經濟原論
(現代經濟學全集二)
經濟學史概論(二)
資本論體系
精神科學的
經濟學の基礎問題
アジア經濟の展望
世界破局と日本經濟の變革
—金再禁止とその效果—
世界經濟恐慌と
國際消費組合
日本農村を語る
農村婦人哀史
日本に於ける農業問題
(プレトネル)
農村學前編
農業政策
(現代經濟學全集)

馬場敬治著
藤岡國之助著
福田敬太郎著
大内兵衛著
高島佐一郎著
高橋龜吉著
武藤山治著
小泉信三著
波多野鼎著
向坂、山田共著
石川興二著
猪谷善一著
高橋龜吉著
大塚金之助著
稻村隆一著
農民鬭爭社譯
橋孝三郎著
那須皓著

農村行詰の原因、現状、對策 四六 高橋 龜吉著
 續日本農村經濟の研究 四六 中澤辨次郎著
 農村經濟講話 四六 河野 信治著
 日本糖業發達史 四六 木村 靖二著
 (消費論) 四六 小野 武夫著
 農村社會經濟史 四六 森川、難波譯
 土地經濟史考證 四六 土屋、小野編
 アメリカ社會勞働史 四六 白柳 秀湖著
 (サイモンズ) 四六 經濟 批判著
 明治初期農民騷擾錄 四六 宮田喜代藏著
 日本富豪發生學 四六 手塚 壽郎著
 下士階級革命の卷 四六 北田内藏司著
 世界經濟危機の一年 四六 寺田 貞次著
 經營 原理 四六 松崎 壽著
 國際貿易政策思想史研究 四六 服部文四郎著
 百貨店と連鎖店 四六 高橋 龜吉著
 經濟地理世界物產編 二冊 高垣寅次郎著
 日本の景氣變動 上・下 東洋經濟新報社編
 財界不況と金融政策 菊 高橋 龜吉著
 我國の金融と景氣 菊 高橋 龜吉著
 日本金融論 菊 高垣寅次郎著
 銀行論 (現代經濟學全集) 菊 高垣寅次郎著

日本の獨占資本主義 菊 猪俣津南雄著
 國際金融總論 四六 金原賢之助著
 (世界經濟問題叢書1) 四六 小池 四郎譯
 國際金融爭霸戰 (ホール) 四六

昭和七年 大内 兵衛著
 日本財政論 (公債篇) 四六 福田敬太郎著
 市場政策原理 菊 増地庸次郎著
 商業通論 (商業全集第一卷) 菊 增地庸次郎著
 (商學全集第一卷) 菊 緒方 清共譯
 賣買組織論 菊 緒方 清共譯
 (クラック) 菊 緒方 清共譯
 貨物配給の原理 (下卷) 菊 緒方 清共譯
 商業政策第一、外國貿易理論 菊 油本 豐吉著
 我國主要産業に於ける 菊 小島昌太郎著
 カルテル的統制附錄 (經濟學全集第六輯) 菊 日本經濟學會編
 産業合理化と失業 菊 東京市に於ける中小商 菊 東京市役所編
 工業者の實際 (中編) 菊 工業者の實際 (上編) 菊 東京市に於ける中小商 菊 東京市役所編
 日本財政論 (租稅篇) 菊 阿部 勇著
 赤字時代の財政問題 菊 神戸 正雄著

外國爲替 菊 小林 行昌著
 圓爲替はどうなる? 四六 山崎 靖純著
 金本位の後に來るもの 菊 高島佐一郎著
 經濟學の基礎知識 菊 高橋 龜吉著
 社會運動史 四六 内館 忠藏譯
 (エインヤドゥエル) 四六 下位 春吉著
 フアツショ政體に於ける 四六 野村兼太郎著
 勞働政策 菊 林 癸未夫著
 アシユレ 菊 中央報德會編
 英國經濟史及學說 菊 五島 茂著
 國家社會主義原理 四六 思想問題
 階級獨裁の現實 菊 研究會編
 ロバート・オウエン 菊 東京市役所編
 著作史協同の一研究 四六 加田 哲二著
 マルキシズムの 菊 永井 彰一著
 經濟學的批判 (高田保馬) 四六 土田 杏村著
 東京市に於ける中小 菊 東亞經濟調查局編
 商業者の實際 四六
 國民主義と國際主義 (世界經濟問題叢書第四編) 四六
 農業政策論 菊
 農村問題の社會學的基礎 (改版) 四六
 本邦に於ける米の需給 菊

農業本質論 四六 橋孝三郎著
 農村自救論 四六 權藤 成郷著
 農業再建論 四六 木村 靖二著
 農村恐慌論 四六 木村 靖二著
 「農民貧乏」の研究 四六 木村 靖二著
 農業政策 菊 澤村 康著
 農業經濟學 (カウツキ) 菊 向阪 逸郎譯
 改版日本經濟史概説 菊 本庄榮次郎著
 重商政策發達史 菊 竹内謙二著
 日本寺領庄園經濟史 菊 細川 龜市著
 徳川封建經濟の研究 菊 高橋 龜吉著
 日本糖業發達史 (人物篇) 菊 河野 信治著
 ソヴィエト 菊 森谷 克己譯
 聯邦計畫經濟史論 (フリドリッヒ・ボロツク) 菊 野村兼太郎著
 世界經濟發展史論 四六 經濟批判會譯
 世界恐慌—數字に現れた (ワリヤン・イー) 四六 平井泰太郎著
 經營學文獻解説 (商學全集四二) 菊 馬場 敬治著
 經營學研究 菊 向井 梅次著
 配給市場論概要 菊 檜崎 敏雄著
 航空經濟政策論 菊

恐慌と世界經濟 菊 慶應大學金融
 購買力補給案 菊 研究會編
 時局とインフレーション 菊 谷口吉彦著
 インフレーション 菊 高橋龜吉著
 はどうなる？ 四六 勝田貞次著
 インフレ經濟時代 四六 小汀利得著
 インフレーション 四六 石橋湛山著
 の理論と實際 四六 繪所陳平著
 金の武装抗爭 菊 笠信太郎著
 金と物價 (デフレガ、其他著) 菊 鬼頭仁三郎譯
 ケインズ貨幣論 菊 鬼頭仁三郎譯
 1貨幣の純粹理論 菊 鬼頭仁三郎譯
 ケインズ貨幣論 菊 鬼頭仁三郎譯
 2貨幣の純粹理論 (15 九年) 菊 鬼頭仁三郎譯
 金本位制動搖と 菊 高島佐一郎著
 日本金融の將來 菊 勝田貞次著
 銀行の發展性と 菊 増井光藏著
 信用調査方法 菊 蠟山政道著
 賠償問題、世界 菊 平井彌五郎著
 恐慌とプロック經濟 (現代經濟學全集29) 菊 岡野監記著
 世界恐慌と賠償問題 四六 井上準之助著
 賠償及戰債問題 菊
 我國國際金融の 菊
 現狀及改善策 菊

昭和八年

日本財政論 菊 阿部勇著
 爲替理論と爲替問題 菊 谷口吉彦著
 勞働科學論 菊 暉峻、桐原共著
 百貨店經營學 菊 水野祐吉著
 貨幣制約概説 菊 荒木光太郎著
 貿易統制論 菊 竹内謙二著
 經營經濟總論 (コストラード・メツレロウイッチ) 四六 大塚一朗譯
 經(營)學(上) 菊 向井梅次譯
 商業經營論 (ホフマン) 菊 佐々木吉郎著
 生産立地論大要 四六 菊田太郎著
 農業問題とマルクス主義 四六 大山岩雄著
 (レニン)農業問題體系1(レニン) 四六 大山岩雄著
 (レニン)農業問題體系2(レニン) 四六 大山岩雄著
 フアツシヨ政體 四六 下位春吉著
 に於ける勞働政策 四六 磯村秀海著
 日本勞働組合 四六 松岡稔著
 評議會史第二分冊 四六 藤井米藏譯
 日本勞働組合發達史(前篇) 四六
 勞働組合論 (改造文庫第一部三五)(レニン) 小

神野信一講演集 四六 神野信一著
 重商主義經濟學說研究 菊 高橋誠一郎著
 支那古代經濟思想及制度 菊 田崎仁義著
 資本論入門 菊 河上肇著
 新版資本論解説 (カウツキー) 四六 佐多忠隆譯
 ローザ・ルクセンブルグ 小 松井圭子譯
 の手紙 岩波文庫 (カール及ルイゼ・カウツキーへの)(カウツキー編)
 第三期と社會ファツシ 四六 プロレタリア科學
 ズム(ラビンスキー) 四六 研究所譯
 農民は起ちあがる 四六 室伏高信著
 資本の蓄積並に崩壞の 菊 有澤廣己譯
 理論(グロスマン) 菊 森谷克己譯
 國際經濟の理論と問題 菊 谷口吉彦譯
 經濟地理學總論 四六 佐藤弘著
 (經濟學全集第六二卷) 四六 白柳秀湖著
 世界經濟鬭爭史 四六 荒川實藏譯
 マルクス主義農業問題總論 四六 (ゲルシエフスキー) 菊 吉田秀夫著
 マルサス批判の發展 菊 西田與四郎著
 世界の政治經濟地理的考察 菊 高田保馬著
 經濟原論 菊

マルクス死後五十年 菊 小泉信三著
 統制經濟原理 (日本統制經濟全集第一卷) 菊 向井鹿松著
 日本金融資本發達史 菊 野村順之助著
 近世日本農村經濟史論 四六 土屋、小野著
 (經濟學全集第五十九卷) 四六 白南雲著
 朝鮮社會經濟史 (經濟學全集第六十一卷) 四六 加田哲二著
 明治初期社會思想の研究 菊 佐藤精一譯
 アメリカ經濟史講話 (H・V・フォークナー) 四六 白石喜太郎著
 澁澤榮一翁 菊 東浦庄治著
 日本農業概論 (岩波全書) 四六 山中篤太郎著
 米價政策の研究 四六 岡田溫著
 農村更生の原理と計畫 (農業更生叢書18) 菊 八木澤善次著
 農村經濟政策論 菊 佐多忠隆譯
 唯(物)史(觀) (第三書人間社會)(カウツキー) 菊 川内唯彦譯
 史的(一元)論 (アレハノーフ) 四六 大森義太郎著
 史的唯(物)論 菊 室伏高信著
 第二文明の没落 四六 下出準吉著
 明治社會思想研究 菊

社會主義通史(ペーア) 四六 西、田畑共譯

社會主義の發展 四六 川瀬 哲譯

プロレタリア的社會主義 四六 田邊 忠男譯

反デユリニング論(下巻)小 (岩波文庫784)(エンゲルス) 長谷部文雄譯

マルクス主義の解説及批判 菊 十時 彌譯

わが批判者の批判 四六 外村 史郎譯

共産主義「左翼」小兒病 (レーニン文庫4) 直井 武夫譯

帝國主義論 (マルクス主義社會科學藝術文藝譯註叢書2)(レーニン著) 松村 登譯註

帝國主義論 (共生閣文庫6)(レーニン) 四六 西森 岩夫譯

レーニン主義の諸問題 四六 白井 轉譯

レーニン主義の諸問題 (第四册)スターリン著作集(スターリン) 西 雅 雄譯

交通貨率の研究 菊 島田 孝一著

世界恐慌に續くもの 四六 飯島 幡司著

金融景氣とその限界 四六 高島佐一郎著

金融恐慌論 四六 小島 精一著

インフレーションの金融と經濟 四六 小島昌太郎著

インフレーションの基礎理論 四六 猪俣津南雄著

インフレーション景氣論 四六 堀井 實譯

貨幣哲學 (ジムメル) 菊 堀井 實譯

ケインズ貨幣論(4,3) 菊 鬼頭仁三郎著

貨幣の純粹理論 四六 高村 雪夫譯

マルクス主義貨幣論 (カウツキー) 四六 高村 雪夫譯

貨幣信用及びインフレーションの理論 (經濟學全集51) 四六 猪俣津南雄著

貨幣のない社會 四六 林 要著

金、貨幣、紙幣 菊 笠 信太郎著

マルクス主義貨幣論 (カウツキー) 四六 高村 雪夫譯

預金通貨の研究 (財政金融研究會記要2) 菊 中谷 大野共譯

日本金融工作論 四六 小島昌太郎著

證券市場組織—企業金融の社會的組織—總論 (資本主義經濟組織1) 菊 向井 鹿松著

貨幣、信用、及インフレーションの理論 (經濟學全集51) 菊 猪俣津南雄著

ケインズ金融理論概説 菊 吉田 寛著

信託經濟論 菊 吳 文炳著

金融會計 (會計學全集14) 菊 太田 哲三著

國際決済銀行と世界恐慌 四六

昭和九年

市場研究(第一卷) 菊 福田敬太郎著

新貿易政策と爲替 四六 宮川貞一郎著

經營學の基礎的諸問題 菊 馬場 敬治著

經營とインフレーション 菊 日本經營學會編

ソシャルダムピング論 四六 高橋 龜吉著

商業政策 菊 田中 貢著

配給問題概論 四六 向井 梅次著

地方財政の理論 四六 青木 保三著

軍備公債増税 四六 猪俣津南雄著

明治財政の基礎的研究 菊 深田 章著

日本經濟史概要(岩波全書)小 堀 經 夫著

英吉利社會經濟史 (各國社會經濟史叢書) 四六 堀 經 夫著

日本資本主義發達史序說 菊 森 喜一著

最近の日本經濟史 四六 高橋 龜吉著

營理通貨論 四六 高島佐一郎著

ケインズ金融理論と營理通貨 菊 吉田 寛著

金本位の停止と通貨の統制 菊 竹島富三郎著

世界經濟の動向と金本位制度 菊 金原賢之助著

貨幣と物價 菊 荒木光太郎著

農村の工業 四六 大河内正敏著

農村問題研究 菊 八木芳之助著

日本古代經濟 (交換第一册總論沈黙貿易) 四六 西村 眞次著

滿洲問題 四六 矢内原忠雄著

世界經濟の現勢 四六 三菱經濟研究所

人口の原理 (マルサス) 四六 高野、大内共譯

中等階級問題及びサラリーメン問題 菊 河田 嗣郎著

農村を語る 四六 橋 孝三郎著

農村的唯物論(フーリン) 四六 橋 孝三郎著

史的唯物論(フーリン) 四六 橋 孝三郎著

帝國主義論 (コムアカデミア編輯教科書叢書4) 四六 直井 武夫譯

マルクスを乗り越えて 四六 西 雅 雄譯

英文オリエンタル・エコノミスト創刊號 室伏 高信譯

東洋經濟新報社

カール・マルクス (岩波文庫外五篇)(レーニン)	菊	伊藤 弘譯	貨幣論 (カウツキーカール)	菊	向坂、岡崎共著
マルクス・エンゲルス (二卷選集マルクスエンゲルス)	菊	レーニン研究所編	本邦中商工業金融論	菊	松崎 壽著
明治初期社會思想の研究	菊	加田 哲二著	通貨信用統制批判 (日本統制經濟全集2)	菊	笠信太郎著
封建制下の農民一揆	菊	田村榮太郎著	取引所投機と株式金融	菊	向井 鹿松著
日本資本主義の發生 (スヴェトロフ)	四六	早川 二郎譯	日本資本主義社會の機構	菊	平野義太郎著
恐慌の新段階と 世界經濟の動向	菊	慶應義塾大學 金融研究會	日本資本主義分析	菊	山田盛太郎著
景 氣 論	菊	波多野 鼎著	昭和十年		
外國爲替、金銀 (基礎經濟學全集5)	菊	金原賢之助著	經營學通論	菊	平井泰太郎著
貨幣論の基礎概念	菊	友岡 久雄著	商業組織論	菊	平野 常治著
ケインズ貨幣論と 貨幣の應用理論	菊	鬼頭仁二郎譯	配給組織論	菊	谷口 吉彦著
貨幣の實際 (實用經濟講座1)	菊	金原賢之助著	商業政策の新動向	四六	河津 暹著
貨幣論 (カウツキー)	菊	向坂、岡崎共著	最近貿易及貿易政策	菊	平野 常治著
貨幣と物價 (基礎經濟學全集4)	菊	荒木光太郎著	貿易及貿易統制 (基礎經濟學全集第六卷)	菊	竹内 謙二著
新貨幣金融論	菊	高島佐一郎著	貿易統制の研究	菊	上坂 西二著
圓、弗、磅、の話	四六	木村禧八郎著	近代株式會社論 持株會社の研究	菊	谷口 吉彦著
貨幣政策と景氣變動	菊	平尾彌五郎著	經營經濟學論考(わが經 營經濟學の回顧と展望)	菊	西野嘉一郎著

中間景氣の發動時代	四六	勝田 貞次著	人口理論と人口問題	菊	南 亮三郎著
商業經濟講話	四六	猪谷 善一著	商品配給論	菊	小林 行昌著
財政學原理	菊	土方 成美著	商業通論新講	菊	向井 梅次著
現代貨幣問題	菊	荒木光太郎著	眞正國家論 (シュパン)	菊	阿部、三澤共譯
金融動態論	菊	小島昌太郎著	配給組織論	菊	谷口 吉彦著
近世日本農民運動史	四六	木村 靖二著	日本獨占資本の解剖	四六	鈴木茂三郎著
農業問題	菊	榑田 民藏著	金融統制論 (現金經全集第八卷)	四六	高橋 龜吉著
滿洲の農業機構	菊	鈴木小兵衛著	銀行經營論	菊	田中、新庄共著
都市農村相關經濟論	四六	中澤辨次郎著	日本銀行と金融市場	菊	三村 稱平著
米穀需要法則の研究	菊	杉本 榮一著	配給市場組織	菊	向井 鹿松著
農村問題	菊	河田 嗣郎著	ブロック經濟地理	菊	森 武夫著
近世露滿蒙關係史 (ウエーベ・サグイン)	四六	川田 秀雄著	經濟心理學	菊	藤林 敬三著
支那近代農民經濟史研究 (ウイットフォーゲル)	四六	李一塵、薛農山著	現代經濟學論	菊	波多野 鼎著
支那經濟史研究	四六	横川 次郎編	經營金融論 (經營學全集7)	菊	室谷賢治郎著
近世經濟史概論	菊	野村兼太郎著	金融統制論	四六	高橋 龜吉著
經濟史研究	菊	本位田祥男著	起債市場論 (現金經全集17)	四六	飯田 清三著
日本經濟史の諸問題	菊	細川 龜市著	利子論研究	菊	高田 保馬著
日本の産業と貿易の發展	四六	三菱經濟研究所編	金融動態論	菊	小島昌太郎著
民族の問題	四六	高田 保馬著			

金 融 論 (現代金融全集I)
銀行經營論 (商學全集18)
國際經濟と金融

橋爪 明男著
田中、新庄共著
服部文四郎著

商業經濟學說
最近の貿易及貿易政策
オーリンの貿易理論
現代の貿易と貿易政策
經營勞務論
經營利潤論
カルテル鬭爭論
賣買 (經營學) (A・ホフマン)
日本商品配給解説
稅制改革論
軍備と財政
財政學 (全)
世界恐慌と財政
銀行の證券事務
支那外債史論
貨幣の職能
通貨管理政策史論
證券取引所論
銀行取引の法理と實際 (第一輯)

菊 村瀬 忠夫著
菊 平尾彌五郎著
菊 谷口 重吉著
菊 生島廣治郎著
菊 古林 喜樂著
菊 沼田 嘉穂著
菊 藤田 敬三著
菊 向井 梅次譯
菊 向井 梅次著
菊 神戶 正雄著
菊 齋藤 直幹著
菊 汐見、小川共著
菊 阿部 勇著
菊 高木 剛也著
菊 田村 幸策著
菊 佐原 貴臣著
菊 高島佐一郎著
菊 福田敬太郎著
菊 銀行研究社編

昭和十一年

人口論發達史—日本に於ける最近十年間の總業績
支那問題概論 (マチャール)
支那經濟の崩壊と日本
增補經濟學說史 (リヤシチエニコ)
獨逸社會政策思想史
ゾムバルト獨逸社會主義 (ゾムバルト)
纖維工業經營
日本工業發展論
工業政策論
工業立地變動論
經濟日本の農業政策
最近農業問題十講
現代中小工業論

南 亮三郎著
田中、安藤共譯
高橋 龜吉著
平館 利雄譯
大河内一男著
難波田春夫譯
西田博太郎著
高橋 龜吉著
森 一 郎著
川西 正鑑著
長野 長廣著
小野 武夫著
高橋 龜吉著

經營經濟學總論 (經營學全集第一卷)
現代國家財政及財政政策
現代財政學の理論
戰時財政と金融統制
戰時準戰時財政
日本財政論
現代公債政策
景氣學說批判
危機財政と金融統制
市場配給論 (商學全集)
通貨價值變動の實證的研究
物價の理論と實際
戰時國家の統制法
利 子 論
物理經濟學研究
日本資本主義發達史概説
英國資本主義の成立過程
明治初期社會經濟思想史
經濟學入門

菊 上田貞次郎著
菊 高木 壽一著
菊 永田 清著
菊 塚田 一甫著
菊 阿部 勇著
菊 牧野 輝智著
菊 高橋 龜吉著
菊 波多野 鼎著
菊 高島佐一郎著
菊 福田敬太郎著
菊 原 祐三著
菊 牧野 輝智著
菊 峯村 光郎著
菊 高田 保馬著
菊 中山伊知郎著
菊 土屋、岡崎共著
菊 野村兼太郎著
菊 加田 哲二著
菊 波多野 鼎著

恐 慌 史 論

統制金融と自由金融
中央銀行日本銀行論
日本金融史
外國爲替 (理論實務)
金、貨幣の若干問題
不動産金融機關論
金本位制と中央銀行政策
ケインズ貨幣論の研究
外國爲替市場論 (現金全集第廿九卷)

志 儀 長著
高橋 龜吉著
田中 金司著
石橋 湛山著
小林 行昌著
金原賢之助著
田中 金司著
高橋 正雄著
山崎 靖純著

經營經濟學總論 (經營學全集第一卷)
現代國家財政及財政政策
現代財政學の理論
戰時財政と金融統制
戰時準戰時財政
日本財政論
現代公債政策
景氣學說批判
危機財政と金融統制
市場配給論 (商學全集)
通貨價值變動の實證的研究
物價の理論と實際
戰時國家の統制法
利 子 論
物理經濟學研究
日本資本主義發達史概説
英國資本主義の成立過程
明治初期社會經濟思想史
經濟學入門

菊 上田貞次郎著
菊 高木 壽一著
菊 永田 清著
菊 塚田 一甫著
菊 阿部 勇著
菊 牧野 輝智著
菊 高橋 龜吉著
菊 波多野 鼎著
菊 高島佐一郎著
菊 福田敬太郎著
菊 原 祐三著
菊 牧野 輝智著
菊 峯村 光郎著
菊 高田 保馬著
菊 中山伊知郎著
菊 土屋、岡崎共著
菊 野村兼太郎著
菊 加田 哲二著
菊 波多野 鼎著

昭和十二年

生 産 管 理 (工業經營全書二)
産業統制論 (經營學大系)
ハーバード國際貿易論 (上巻第一節貿易理論下巻第二節貿易政策)
日本貿易政策
外國貿易政策 (第一卷)
日本コンツェルン發達史 (ワインツワイク)

菊 村本 福松著
菊 赤 松 要著
菊 松井、岡倉共譯
菊 谷口 吉彦著
菊 油本 豊吉著
菊 永住 道雄譯

經營經濟學總論 (經營學全集第一卷)
現代國家財政及財政政策
現代財政學の理論
戰時財政と金融統制
戰時準戰時財政
日本財政論
現代公債政策
景氣學說批判
危機財政と金融統制
市場配給論 (商學全集)
通貨價值變動の實證的研究
物價の理論と實際
戰時國家の統制法
利 子 論
物理經濟學研究
日本資本主義發達史概説
英國資本主義の成立過程
明治初期社會經濟思想史
經濟學入門

菊 上田貞次郎著
菊 高木 壽一著
菊 永田 清著
菊 塚田 一甫著
菊 阿部 勇著
菊 牧野 輝智著
菊 高橋 龜吉著
菊 波多野 鼎著
菊 高島佐一郎著
菊 福田敬太郎著
菊 原 祐三著
菊 牧野 輝智著
菊 峯村 光郎著
菊 高田 保馬著
菊 中山伊知郎著
菊 土屋、岡崎共著
菊 野村兼太郎著
菊 加田 哲二著
菊 波多野 鼎著

日本資本主義論争 人口、資源、植民地 全體主義思想の展開 日本人口政策	菊	内田 穰吉著 阿部 源一著 上田貞次郎著	農村自救論 日本農業論 <small>(日本資本主義發展に於ける所謂半封建的農業關係把握)</small>	四六	權藤 成卿著 戸田眞太郎著
帝國主義下の印度 <small>附アイルランド問題の沿革、經濟特殊研究叢書</small>	菊	矢内原忠雄著	現下の農村問題	四六	大内、向坂、近藤、美濃部共著
英國資本主義の成立過程	菊	野村兼太郎著	フアシズムの社會觀	菊	新明 正道著
現代臺灣經濟論	菊	高橋 龜吉著	フアシズム論 <small>(ハイム・タット)</small>	菊	松原 宏著
太平洋上に於ける 國際經濟關係	菊	三菱 經濟 研究所著	自由主義とは何ぞや <small>(ホップ・ハウス)</small>	四六	星野 眞一譯
米價政策論	菊	澤村 康著	自由主義とは何か	四六	東洋經濟新報社編
アメリカ經濟史概説	菊	堀江 保藏著	景氣學說批判	菊	波多野 鼎著
日本工業組合經營論	菊	川端 巖著	景氣變動論	菊	波多野 鼎著
工業立地論	菊	川西 正鑑著	昭和十三年		
特殊金融機關史論	菊	石濱 知行著	植民經濟論	菊	黒田 謙一著
米穀政策論	菊	荷見 安著	世界の變動と 日本の世界政策	菊	蟻山 政道著
綜合蠶絲經濟論	菊	本位田祥男著	日本經濟と原料問題	四六	戰争經濟 研究會編著
農業經濟論	菊	近藤 康男著	戰時日本重工業	菊	小島 精一著
農政學要論	菊	石坂 橋樹著	化學工業經營	菊	内田 壯著
日本資本主義史論集 日本マニファクチュア 史論—秋田木綿と 久留米耕の生産形態	菊	土屋 喬雄著 服部之總著 信夫清三郎著	輕工業	四六	吉田 寛著
			原料經濟	四六	佐藤 弘著

明治初期社會經濟思想史	菊	加田 哲二著	新金融論	菊	牧野 輝智著
經濟學史概要(上卷)	菊	舞出長五郎著	金の經濟知識	四六	木村禧八郎著
日本社會政策史	菊	風早八十二著	現時の國際金融	菊	服部文四郎著
日清日露戰時の農業政策	四六	我妻 東策著	日本經濟及經濟政策	菊	猪谷 善一著
戰時體制下の農村對策	四六	助川啓四郎著	日本戰時經濟政策論	四六	金原賢之助著
小農經濟と協同組合	菊	棚橋初太郎著	日本資源政策	菊	松井 春生著
農村の機械工業	四六	大河内正敏著	國家と經濟 <small>(第一卷序説)</small>	菊	難波田春夫著
日本に於ける農村問題	菊	稻村 隆一著	經濟倫理の構造	菊	杉村 庄藏著
日本農業經濟論	菊	靜田 均著	經濟講話	四六	波多野 鼎著
近世初期農政史研究	菊	中村 吉治著	新訂企業形態論	菊	増地康治郎著
農村問題の諸相	四六	東畑 精一著	日本財閥論	菊	高橋、青山共著
日本兵農史論	菊	小野 武夫著	株式會社の諸問題	菊	長谷川安兵衛著
歐洲經濟史序説	菊	大塚 久雄著	日本商業政策	菊	向井 鹿松著
日本資本主義發達史 <small>(グ・サフ・ア・ロフ)</small>	四六	平館 利雄譯	商業政策概論(下卷)	菊	平野 常治著
株式會社發生史論	菊	大塚 久雄著	商業と商業政策—内國商業	菊	河津 暹著
金本位制離脱後の通貨政策	菊	深井 英吾著	關稅經濟論	菊	小林 行昌著
金融調整論	菊	沖中 恒幸著	戰時貿易、爲替、物價論	菊	猪谷 善一著
動搖期の金融學說	菊	荒木光太郎著	商業と商業政策—外國貿易	菊	河津 暹著
日本物價政策	菊	高橋 龜吉著	日本貿易論	菊	猪谷 善一著

貿易取引條件の研究	菊	上坂 酉三著	持てる國日本	四六	大河内正敏著
ダンピング論	菊	油本 豊吉著	徳川時代ノ經濟思想	菊	野村兼太郎著
貿易理論の研究	菊	松井 清著	勞働の理論と政策	四六	風早八十二著
カルテル經營論	菊	國弘 員人著	日清、日露戰時農業政策	四六	我妻 東策著
販賣組織の變更と經營機構	菊	平井泰太郎著	轉換期の農業問題	菊	近藤 康男著
日本財政政策	菊	沙見 三郎著	米穀經濟の研究	菊	東畑 精一著
統制經濟と景氣變動	菊	武村 忠雄著	米穀問題の新展開	四六	鈴木 直二著
東亞民族論	四六	高田 保馬著	戰時農業政策論	四六	野口傳兵衛著
各國植民史及び 植民地の研究	菊	大鹽 龜雄著	日本食料經濟論	四六	水野 武夫著
現代の植民政策	四六	加田 哲二著	日本資本主義 史上の指導者達	四六	土屋 喬雄著
植民政策論	菊	堀 眞琴著	農業問題の今日と明日	四六	東畑 精一著
戰時下の我が化學工業	四六	野田經濟研究所著	農産物取引論	菊	水野 武夫著
工業再編成論	菊	川 端 嚴著	日本農業の機械化	菊	吉岡 金市著
食料工業	菊	鈴木梅太郎著	日本公企業成立史	菊	竹中 龍雄著
戰時戰後の機械工業	四六	小島 精一著	小賣業統制論	菊	芳谷 有道著
東亞重工業論	菊	小島 精一著	計畫配給論 (ハツバード)	四六	奥澤篤次郎譯
經濟ブロックと大陸	四六	佐藤 弘著	戰時日本貿易論	四六	木村増太郎著
			日本戰時貿易論	菊	平尾彌五郎著
			日本戰時貿易策と 輸出入リンク制度論	菊	中井省三著

昭和十四年

縮業輸出入リンク制度論	菊	美濃部洋次著	卸賣經營論	菊	鈴木 保良著
戰時利潤統制	菊	山下 勝治著	新商學組織論	菊	平野 常治著
個別經濟並びに 個別經濟學の本質	菊	杉本 秋男著	航空政策論	菊	檜崎 敏雄著
統制經濟とカルテル組合	菊	國弘 員人著	爲替理論概説	菊	金原賢之助著
東亞交通論	菊	檜崎 敏雄著	インフレーション來りなば	四六	勝田 貞次著
日本戰時物價政策論	菊	金原賢之助著	米	四六	東畑 精一著
金融要論	菊	小島昌太郎著	小麥作精説	菊	波多 腰武著
インフレーション	菊	木村禧八郎著	興亞經濟の原理	菊	加田 哲二著
戰時計畫經濟の 展開と物價統制	菊	高橋 龜吉著	エネルギー經濟機構論	菊	北 久一著
インフレーション概論	四六	勝田 貞次著			
日本經濟革新の大綱	菊	田邊 忠雄著			
純正計畫經濟制度論	菊	伊部 政一著			
發展過程の均衡分析	菊	中山伊知郎著			
東亞經濟ブロック論	菊	高橋 龜吉著			
理論經濟學の基本問題	菊	杉本 榮一著			
日本經濟の再編成	菊	笠信太郎著			

昭和十五年

國際貿易理論序説 岩田 俊著

圖表目録

- 一、經濟文化の發達によつて私達はどんな恩恵を蒙つてゐるか。
 - 一、徳川時代に比較すれば私達は飢饉惡疫に遭はないだけでも幸福である(幕末及最近の人口表、資料・明治大正國勢總覽・經濟年鑑)
 - 二、更に衣類食料の素晴らしい進歩(食料生産及輸入表、資料・工場統計表・外國貿易年表)
 - 三、住宅の改善、光熱の進化(建築工事數及電燈水道瓦斯普及割合、資料・建築統計・通信一覽・日本都市年鑑)
 - 四、驚くべき生活内容の豊富化(ラヂオ・出版・演劇・映畫・スポーツ、資料・帝國統計年鑑・出版年鑑・日本都市年鑑)
 - 五、加ふるに生活安定の爲の諸施設(貯蓄・保險・社會保險統計、資料・經濟年鑑)
 - 六、更に又政治への參與權も與へられてゐる(有權者割合、資料・明治大正國勢總覽・帝國統計年鑑)
- 二、この生活の向上は何によつて持來されたか
 - 一、綿業は日清戰爭後に勃興次の如く發達した(綿絲生産高、資料・内外綿業年鑑・紡績聯合會月報・經濟年鑑)
 - 二、鐵鋼業は日露戰爭前に勃興歐洲大戰當時に飛躍し更に滿洲事變後に長足の發達をした(鐵生産高、資料・商工省重要鑛山鑛產額)
 - 三、動力事業は歐洲大戰中に勃興其の後素晴らしく發

- 達した(發電力表、資料・帝國統計年鑑・經濟年鑑)
- 四、鑛業は日露戰爭前に勃興次の如く飛躍的に發達をなした(石炭生産高、資料・商工省重要鑛山鑛產額)
- 五、以上の諸工業の發達を助ける運輸事業の發達(船舶及鐵道統計、資料・日本帝國統計全書・經濟年鑑)
- 六、農業水産業すら工業の發達の恩恵を得てゐる(販賣肥料消費額・漁船の機械化・漁獲高統計、資料・肥料要覽・本邦農業要覽・農林省統計)
- 七、斯くて農業國から工業國へ(明治初年及最近職業別人口、資料・統計寮統計表・昭和五年國勢調査)
- 三、この生産の増大は何によつて齎らされたか
 - 一、物―私達の父祖の努力は結晶して巨額の物となつてゐる(物資價額表、資料・昭和五年國富調査報告)
 - 二、金―物の増大の裏には粒々辛苦せる資金の蓄積がある(普通銀行預金高、資料・經濟年鑑)
 - 三、會社組織―會社組織と言ふ精緻な仕組就中大會社が生産増大に與つて力ある(會社數・資本金、資料・會社統計表)
 - 四、工場組織―工場組織も生産増大の一大原動力である(工場數及職工數、資料・工場統計表)
 - 五、信用組織―信用組織の發達もこれを助けて功績が大きい(日本銀行・普銀・信託・取引所・手形交換所・起債市場、資料・經濟年鑑・東株統計月報)
 - 六、大企業―大工場ほど生産能率が高い(大工場小工場別生産高、資料・工場統計表)
 - 七、人―實業教育高等教育によつて多くの人材が送り出されてゐる(學校數卒業數、資料・日本帝國統計全書・文部統計摘要)
- 四、勿論今日の經濟のやり方には幾多不便と考へられる點もある。然しそれも或程度止むを得ない。
 - 一、國際的分業の進む事は勿論いい事だがその結果獨占的商品が多くなる(二枚)

(各國獨占商品、資料・社會と經濟)

- 二、外國貿易の増加は言ふ迄もなく發展の指標である、然しそのために外國の不景氣の影響も受け易くなる(本邦外國貿易表、資料・日本貿易精覽)
- 三、殊に製絲業を通じて米國の景氣が我國の景氣に影響する處頗る大きい(生絲輸出高、資料・蠶絲業要覽・經濟年鑑)
- 四、必要の原料材料が多くなり我國の如き資源乏しき國は困難が多い(各國資源表、資料・商工省發表)
- 五、自給自足が困難になる。何故なら物により外國から買ふ方が自國で作るより利益になるから。斯くて我國の棉作は亡びた(棉花生産及輸入表、資料・内外綿業年鑑・貿易月表・東洋經濟統計月報)
- 六、國家の營まねげならぬ事業が増しその結果國債が激増する。(國債額現在高、資料・國債額明細表)
- 七、他國が軍備を充實するので對抗上軍事費が多くな

る(列國軍事費、資料・列國國勢要覽)

- 五、私達は現在程度の生産増大に満足するにはまだ早い諸外國と比較して未だ劣る處もあるからである。
 - 一、列國の國富(資料・列國國勢要覽)
 - 二、列國の國民所得(資料・列國國勢要覽)
 - 三、列國の世界貿易中に占める割合(資料・國際聯盟統計年鑑・經濟年鑑)
 - 四、列國の消費生活(二枚)(砂糖消費・紙消費・電話架設數・自動車臺數・資料・列國國勢要覽・砂糖年鑑リヒト統計・紙業雜誌)
 - 五、列國の鐵道・船舶・鐵(二枚)(資料・列國國勢要覽)
 - 六、列國の職業人口構成(資料・列國國勢要覽)
 - 七、日本の農工商中には非常に零細のものを含んでゐる(二枚)(資料・農事統計表・日本都市年鑑)
 - 六、その上私達は東亞新秩序建設と言ふ重任をも背負つ

てゐる。

- 一、私達は滿洲國建設のため非常な援助を行つた(對滿投資額、資料・東洋經濟統計月報)
- 二、その金で滿洲國は我國から次の品物を買つた(對滿貿易省、資料・外國貿易月表)
- 三、北中支の經濟建設にも相當の援助を行つてゐる。(對北中支投資額、資料・東洋經濟統計月報)
- 四、その金で支那は我國から次の品物を買つた(對支貿易高、資料・外國貿易月表)
- 五、生産力擴充のためにも私達は多くの資金が要る。(資金調整許可額、資料・大藏省發表表)
- 六、これが成功すれば重要物資生産額は次の様に殖える(生産力擴充豫定高、資料・企畫院發表表)
- 七、私達は生産を増大するためにどうしなければならぬ

- (大藏省貯蓄豫定高・赤字公債發行額・對滿支投資額・資金調整許可額、資料・大藏省發表表・議會發表資料・東洋經濟統計月報)
- 一、生産の方法を改良して一人當り生産を増加せねばならぬ(職工當生産高、資料・工場統計表)
- 三、農業に於ては一層の機械化を考へるべきである(農村動力機普及高・電力消費高・機械使用高、資料・本邦農業要覽)
- 四、國民全般の科學的精神を培はねばならぬ。カレント・トピックス(數枚)

いか

- 一、個人的消費を節して社會的蓄積に向けねばならぬ

經濟文化貢獻者略記

(一、政治家二、實業家三、教育家)
思想家及び發明家の順に配列す。

大久保利通

天保三年、鹿兒島藩士の子に生れ、齊彬公に認めらる。西郷、木戸と共に維新の三傑と稱せられたるも、特に殖産興業政策強行の偉業は、廟堂に於ける日本資本主義育ての親と言ふべきである。明治十一年五月兇刃に斃る。時年四十九。

得能良介

文政八年、鹿兒島藩士の子に生れ、長じて小松、大久保、西郷等と國事に奔走す。明治三年、民部大丞兼大藏大丞に任ぜられ、爾後諸官を経て紙幣頭となる。印刷局の基礎を大成す。明治十五年、五十九歳を以て病歿。

岩倉具視

文政八年、公卿の末流に生れ、維新の際には既に四十四歳の壯年。西郷、大久保、木戸を驅使して回天の事業を成就せる元勳たると同時に、率先して殖産興業、土族授産、銀行、鐵道創設等、國利民福の増進にも貢献した。明治十六年、五十九歳を以て病歿。

黒田清隆

天保十一年、鹿兒島に生れ、王政維新に軍功あり。明治三

年開拓使大官に任じ、後長官となり、大いに北海道の拓殖を計る。但し開拓使官有物拂下につき衆疑を招く。顯官に歴任し、首相に及ぶ。明治三十三年、六十一歳を以て病歿。

佐野常民

文政五年、佐賀藩士の子として生れ、藩醫の家を繼ぎしも西洋科學を究め、日本最初の蒸汽船を創製す。維新以後は、兵部少丞、工部省出仕、大藏卿、元老院議長、樞密顧問官、農商務大臣等の要職を歴任。又内外博覽會の功勞者であり、初代日本赤十字社長である。明治三十五年七十六歳にて病歿

陸奥宗光

弘化元年、和歌山城下に生れ、幼時より懸詞不遇、維新後の仕官も波瀾變轉を極めたが、天資の外交家として機略縱横を逞はる。明治三十五年、五十四歳を以て病歿。

伊藤博文

天保十二年、周防熊毛郡東荷村に生る。幼名利助俊輔と改む。若黨奉公より身を起し、吉田松陰に師事し、木戸孝允の指導の下に國事に奔走す。維新後、次第に要位につき、首相、樞相、宮相、韓國統監等を歴任し、明治四十二年、ハルビン驛頭に於いて兇弾に斃る。

由利公正

文政十二年、越前足羽郡毛矢町に生れ、初め三岡八郎と稱した。明治四十三年、八十一歳を以て病歿。福井藩主松平慶永を援けて其財政を處理し、維新後は新政府に仕へて、金札發行の責任者としてよく困難な財政危機を切り抜けた。なほ東京府知事として銀座街建設の恩人である。

井上馨

天保十四年、山口藩士の子として生れ、伊藤博文、井上馨と共に脱藩、ロンドンに到りて鑛山學を研究して歸る。我が鐵道の創設者として偉功あり。明治四十三年、六十八歳を以てロンドンに客死。

井上馨

天保六年、周防吉敷郡湯田村に生れ、毛利敬親公の小姓役より身を起し、志士として維新の鴻業に参加し、明治以後は主として財政經濟界に力を致した。大正四年、八十一歳を以て病歿。

前島密

天保六年、越後高田藩士の子として生れ、十三歳の時江戸に出て醫學を修む。明治初年諸要職を歴任、特に驛遞頭として著名な我が郵便制度の開祖。明治十四年官界を去り、教育實業に功あり。大正八年、八十五歳を以て病歿。

前田正名

嘉永三年、島津藩士として生れ明治二年フランスに留學。

歸朝後、勸業局を振出しに、殖産興業に功ありしが、一時官を辭し、各地に一步園を起す。後、再仕官。大正十年、七十二歳を以て博多に病歿。

大隈重信

天保九年、鍋島藩士の子として佐賀城下に生る。幼名八太郎。大正十一年、持説「二百二十五歳」を俟たず八十五歳を以て病歿。數多い彼の業績の中でも、經濟、外交、教育に特異の功績を残した。早稻田大學の創立者。

松方正義

天保六年、鹿兒島藩士の子に生れ、久光公の近侍より身を起し、首相二回、藏相五回、大久保利通の後繼者として財政經濟に對する貢獻特に大だが、就中幣制確立の功は不朽である。大正十三年、八十九歳を以て病歿。

後藤新平

安政四年、岩手水澤町に生れ、醫師より衛生局長、臺灣民政長官、滿鐵總裁、逓相、内相、東京市長、外相等に歴任し昭和四年、七十三歳を以て京都に客死。

濱口雄幸

明治三年高知縣長岡郡五臺山村に生れ、大藏省の官吏を振出しに、藏相、内相、首相に歴任し、緊縮政策を旨とす。昭和五年、兇弾を受け、六十二歳を以て歿す。

井上準之助

明治二年、大分縣日田郡大鶴村に生れ、昭和七年六十四歳を以て兇弾に斃る。日本銀行總裁として、また大藏大臣とし

て、また財界世話業として、功績が多い。昭和五年金解禁断行。

明治三十四年四十八歳を以て病歿。三井銀行の總帥にして三井家中興の功臣。

高橋 是清
安政元年、東京に生れ、仙臺藩の足輕に里子にやられ、アメリカでは奴隸に賣られ、波瀾萬疊の行路を辿りつゝも終ひに大正、昭和の日本資本主義の爛熟、轉換期の最高指導者となる。二・二六事件により非業に斃れた。

古河市兵衛
天保三年京都東岡崎村に生れ、明治卅六年七十二歳を以て病歿。豆腐屋の伴から身を起し、小野組の番頭となり、澁澤榮一の知遇を得て足尾銅山を開拓す。

三野村利左衛門

文化四年、出羽庄内藩の浪人の二男に生れ、明治十年五十七歳を以て病歿。封建制より資本制への轉換期に於ける三井家の名舵手であつた。

藤田傳三郎

天保十二年、長州萩に生れ、明治四十五年、七十二歳を以て病歿。礦山業、農林業に於て大をなし、就中小坂銅山は彼の寶庫であつた。

五代 友厚

天保六年島津藩の儒官の子に生れ、幕末志士中で特異の地位を保つたが、明治政府を退官後、明治十八年、五十一歳を以て病歿するまで、高邁なる識見を以て關西財界を指導した

川崎 正藏

天保八年、鹿兒島城下の商人の子に生れ、大正元年七十六歳を以て病歿。川崎造船所の創立者。

三井八郎右衛門(高福)

文化五年生、明治十八年七十八歳を以て病歿。維新變革時の三井家當主。

松本重太郎

丹波國竹野郡間人村松本龜右衛門の子十歳、商家の小僧より身を起し、明治十一年第三百三十銀行を創立し漸次大阪商業界に頭角を現はし大阪紡績、阪堺鐵道等起し、一時四十餘社の經營に關係したが、日清戦後の商業不振による百三十銀行の破綻から關係諸會社銀行の倒産となり、晩年不振の裡に大正二年六月二十日病歿。

岩崎彌太郎

天保五年土佐國安藝郡井口村に生れ、明治十八年五十二歳にて病歿、三菱の始祖、海運王。

廣瀬 幸平

文政十一年、近江國野州郡入夫村に生れ、十一歳にして別子銅山勘定場の丁稚となり、維新當時の礦山紛擾に機宜の措置を過たず、本店に入つて總帥たること三十年。大正三年入

中上川 彦次郎

安政元年、豐前中津藩士の子に生れ福澤諭吉の甥に當る。

十七歳を以て病歿。

安田 善次郎

天保九年、越中富山町の場末に生れ、大正十年大磯の別荘に於て兇刃に斃る。銀行王。

莊田 平五郎

弘化四年豊後國北海郡臼杵町に生れ、大正十一年七十六歳を以て病歿。岩崎彌太郎及彌之助の股肱として三菱創建の功勞者である。

團 琢磨

安政五年、福岡藩士の子に生れ、昭和七年七十五歳を以て兇弾に斃る。米國留學生の先驅者として身を英語教師に起し鑛山技師より三井に入りて其柱石となる。日本經濟聯盟、日本工業俱樂部等の統率者として財界指導の最高位にあつた。

住友 吉左衛門(友純)

元治元年、右大臣徳大寺公純の第六子に生る。西園寺公の實弟。明治二十五年住友家に入り大正十五年六十三歳にて病歿

武藤 山治

慶應三年、尾州海部郡鍋田村に生れ、昭和九年、六十八歳を以て兇弾に斃る。鐘紡の大成者、實業同志會を創立して成功せず、時事新報經營の中途に挫折す。

大倉 喜八郎

天保八年、越後國蒲原郡新發田に生れ、昭和三年九十二歳を以て向島の別邸に病歿。大倉組の創設者、鑛業、土木をはじめ凡ゆる事業に關係し、特に支那、滿蒙の開拓を志す。

益 田 孝

嘉永元年十月佐渡相川に生る。文久三年十六歳にして幕府遣外使節池田筑波等一行に其父と共に隨行。歸朝後幕府騎兵隊長となり、轉じて横濱賣込問屋を自營し又外國商館員となる。明治五年造幣權頭を拜命、六年井上、澁澤の下野に隨て退官、翌年井上と共に先收會社を起し貿易に従事、明治九年三十歳の時三井物産會社を起し其社長となり、同二十七年三井鑛山創立の際其專務理事となる。明治三十六年退職後は三井合名顧問。昭和十三年十二月二十八日九十一歳を以て逝去

淺野 總一郎

嘉永六年、富山縣氷見郡敷田村に生れ、昭和五年、八十三歳を以て病歿。セメント業、汽船會社、造船所、鶴見埋立等の事業王。

澁澤 榮一

武州榛澤郡血洗島の子に生れ、幕末武士となり、明治初年官吏となつたが、明治六年三十四歳で退官以來、昭和六年九十二歳で病歿まで約六十年間、民間に於ける實業界の

森 有禮

弘化四年、鹿兒島藩士の子に生れ、慶應元年藩よりロンド

ンに留學、歸朝後、議事廳裁取調所に仕官、又八年、商法講習所を起し洋式商業教育を創む。明治二十二年、四十四歳を以て兎死に斃る。

井上毅

弘化元年、熊本藩士の子として生れ、明治二年上京、大學總舎長となり、江藤司法卿に隨行して渡歐、歸朝後、法制局長官として憲法、皇室典範其他の根本法典の立案に參畫、臨時帝國議會事務局總裁、樞密顧問官、文相等に歴任、實業教育の功績者。明治二十八年、五十二歳を以て病歿。

若山儀一

天保十一年江戸の旗本の家に生れ、初め緒方正、後ち若山儀一と改稱。大學助教より大藏省租稅補助となり、四年岩倉一行と共に渡米。明治前期先覺の一人として著書多きが、殊に其の首唱に係る保護貿易説は極めて重要である。又我國最初の科學的生命保險日東保生會社の創設者。明治廿四年逝去

神田孝平

天保元年、美濃不破郡岩手村に生れ、明治三十一年六十九歳を以て病歿、蘭學者にして先覺啓蒙の人。經濟の譯語を確定、著書多し。また考古學の先驅者。神田乃武は其養嗣子。

中江兆民

弘化四年、高知城下新町に生る。後長崎及び江戸に遊學、蘭、佛學を學び、明治四年佛蘭西に留學、民主主義的自由主義思想の感化を受く。歸朝後、佛學塾を創立。「東洋自由新聞」「自由新聞」其他に執筆著譯書多し。後、科學的唯物論無神論に傾く。明治三十四年、五十五歳を以て病歿。

鈴木藤三郎

工部大學應用化學科卒業、印刷局出仕より海軍技手に轉動下瀬火薬を發明。明治四十四年、五十三歳を以て病歿。

杉亭二

安政二年、遠江國周智郡森村に生れ、家業の菓子業の關係で、日本精製糖會社(大日本製糖の前身)の社長となり、又鈴木式汽罐並に乾燥器等發明、醬油釀造法を工夫。晩年は水産工場、澱粉製造所、農園等を經營。大正二年、五十九歳で病歿

手島精一

嘉永二年、沼津藩主水野侯の江戸梅田邸に生れ、明治三年米國遊學、東京高等工業學校の前身東京職工學校時代よりの校長で、明治工業教育界の第一人者。大正七年、七十歳を以て病歿。

高峰讓吉

安政元年、金澤藩醫の長男に生れ、長崎留學、工部大學入學。明治十三年應用化學研究のため英國留學、歸朝後、和紙製造、製藍、清酒釀造に着手。東京人造肥料會社創立。アドリナリン、タカチアスターゼ其他發明品多し。大正十一年、六十九歳を以て病歿。

鳥瀧右一

明治十六年、秋田縣に生れ、三十九年東京帝大電氣工學科

福澤諭吉

天保五年、大阪堂島の豊前中津藩藏屋敷に生れ、安政元年長崎遊學、五年江戸出府開塾、六年英學へ轉向、慶應二年の「西洋事情」其他多くの著書、翻譯等を通じ、明治時代最大の啓蒙教育家であり、思想方面に於ける日本資本主義最高の指導者である。明治三十四年、六十八歳を以て病歿。

田口卯吉

安政二年、幕臣の子として江戸に生れ、明治五年大藏省仕官、「日本開化小史」を著し、自由主義經濟論を體系づく。十一年退官、「東京經濟雜誌」により時權政治並に獨占經濟と戦ふ。大日本人名辭書、雜誌「史海」を發刊。明治三十八年、五十一歳を以て病歿。

矢野龍二

弘化二年、幕臣の二男として江戸に生れ、文久三年遣歐使節池田筑後守一行に譯官として隨行。維新後一時、代理公使となる。八年商法講習所創立に參畫、東京商大の前身なり。商業教育界の第一人者、明治三十九年、六十二歳を以て病歿。

津田仙

天保七年、佐倉藩士の子として生れ、幕府の翻譯並に通辯事務に従ひ、慶應年間アメリカに渡航、農事に著目、明治六年オーストリア萬博參觀後、八年學農社を設け、九年農學校を開き、「農業雜誌」を發刊す。築地ホテル館を建設。明治四十一年、七十二歳を以て病歿。津田梅子は其二女。

下瀬雅允

安政六年、安藝藩士の長男として廣島に生れ、明治十七年

卒業、電信技師となり、無線電話裝置完成。礦石檢波器も發明。電氣試驗所長となる。大正十二年、四十一歳にて病歿。

豊田佐吉

慶應三年、遠江國敷知郡吉津村に生れ、大工より身を起し刻苦精勵、兎ひに豊田式自動織機を完成す。昭和五年、六十四歳を以て病歿。

犬養毅

安政二年、備中庭瀬の郷士の二男に生れ、慶應義塾に學び西南役に從軍記者として名聲を博す。「東海經濟新報」發刊、保護貿易説を唱ふ。仕官せしも大限に殉じ、自由進歩主義を以て藩閥政府と闘ふ。政黨政治家の一異色たりしも、昭和七年五月十五日、首相在官中、兎彈に斃る。

御法川直三郎

安政三年、秋田の佐竹藩士の子に生れ、川尻組製造蠶種の検査監督より身を起し、次第に發明家の道に入り、「無切斷直線式多條製糸機」「御法川二九式燃燒機」等の發明を大成す。昭和五年九月十一日逝去。

天野爲之

安政六年十二月江戸に生れ、明治十五年東京大學文學部卒業。大隈侯を輔けて小野梓及び高田早苗と共に東京專門學校(今の早大)創設に盡力。大正四年早大學長を辭し早稻田實業學校を興し後半生を實業教育の爲に盡した。又明治三十年創刊者町田忠治の後をうけ東洋經濟新報を主宰す。昭和十三年三月二十六日逝去。

明治經濟文化關係歐米人一覽

◇明治全期を通じ、各方面に於て我國文化に寄與する所のあつた歐米人は、主要な人物と思はるゝものゝみでも一千三百名を下らなすと云ふ(重久篤太郎「Foreigners in early Meiji」The Japan Advertiser. 一九三九年十月廿八日)。又、「御雇外國人一覽」(明治五年三月刊)に據れば、明治五年に政府が雇備してゐた歐米人のみで、二百十四名の多數に達する。

蓋し、その大多數は經濟、産業方面に活躍し、明治新政府の急激なる資本主義化政策を助勢した人達である。

◇本社がこれ等歐米人の事蹟を調査し後世に傳ふべく企圖したのは昨年の事であるが、この一覽表はその蒐集資料中より明治經濟文化關係を主として歐米人約百十人を撰定したものである。忽卒の間に編したこととて不完全なるを免れないが、大方の御教示を戴き、將來の調査に御援助を乞はんが爲、敢へて不備なるまゝ、その一部

を編したのである。

◇尙、選擇と紙數の關係から

ボンプ (P. mpe van Meerdervoort, J. J. T. G.)
 <ボ>ン (Hepburn, J. G.)
 サトウ (Satow, E. M.)
 ベリー (Barry, J.)
 ニコライ (Nikolai)
 モールス (Morse, E. S.)
 ケーベル (Koeber, R. v.)
 バチエラー (Batchelor, J.)
 リース (Riess, I.)
 メツケル (Mekel, K. W. J.)
 ベルツ (Balz, E.)

等、夫々の分野に於て不朽の功績を残した人達を除外せざるを得なかつた。

一、來朝及び歸國年次欄中、括弧を附せるものは或る業務に携つた、若くは或る事蹟をなした年次。
 二、同欄中△印は大體の來朝期を、又―印は本邦に於て歿せるを示す。
 三、事蹟欄中の最初に記せる數字はその人の生年、歿年を示す。

事 蹟

米の駐日領事館員。一八六八(明治元)、岸田吟香と協つて「横濱新報」『もしは草』を發刊。布哇奴隸事件に關與。

一八四六(弘化三)―一九一一(明治四四)。獨人。父P・F・シーボルトに伴はれて來朝。初め英公使館付通譯官に就任。一八七〇(明治三)、工部院出仕として我が政府に雇備され、まもなく財政使節上野景範の秘書に任ぜられて渡歐。一八七二(明治五)、歸國したるも、再び奥國博覽會事務副總裁佐野常民の顧問として渡歐。後、在ローマ日本公使館事務預に任ぜられ、次いで大藏省に轉じ、諸事務の改善に努力し、財政事務、會計制度、土地其の他の直接租稅等に關し献替する所があつた。一八七八(明治一)、在ベルリン日本公使館在動を命ぜられ、後ローマに轉じた。終始我外交、政治、經濟、産業等の各分野に互り有益なる寄與をなし日本のため全力を傾倒して盡した。東洋關係の著述が多く、Narutaki(鳴瀧)の假名のもとに發表したのも可なり多い。伊太利で歿。

一八三〇(天保元)―一八九七(明治三〇)。蘭の宣教師、教育家。長崎府洋學局、次いで佐賀藩致遠館に教授し、一八六九(明治二)、政府の顧問となり、教育、法律其他諸般の制度に就き献策。翌年大學兩校の教頭と

來朝年次	歸國年次	氏 名
安政 六 一八五九		ヴァン・リード Van Reed, Eugene
同	明治 一一 一八七八	シーボルト Siebold, Alexander Georg Gustav v.
同	一	フヘルツック Verbeck, Guido Fridolin

なり、後、明治學院神學部教授となる。東京で歿。大隈侯、副島伯、後藤伯は門下中の人材。

英の新聞記者。一八六一(文久元)、長崎で「The Nagasaki Shipping List and Advertiser」を發刊、又同年横濱でG・R・ブラックと協同して「Japan Herald」を發行。

一八三三(天保三)―一八九一(明治二四)。英の軍人、動物學者。一八六一(文久元)、函館に着し、ブラキストン・マール商會をつくり、對支對露の貿易に従事。又、製氷、製材事業を始め、氣象觀測にも當り、一方鳥類の採集研究をなし、津輕海峽が北アジアと中部アジアとの動物分界線たる事を發表し、遂に同海峽がブラキストン・ラインと命名されるに至つた。

英の新聞記者。一八六一(文久元)、一、一、三三、英字新聞「Japan Herald」を發刊、後「Japan Gazette」の創刊に關係し、一八七二(明治五・三)、邦字月刊新聞「日新眞事誌」を創刊、一八八〇(明治一三)、横濱で客死。

一八三三(文政五)―一八九一(明治二四)。佛の醫師。一八六三(文久三)、長崎領事となり、一八七〇(明治三)、同地廣運館の佛語教師に轉じ、翌年京都府に招聘せられ、佛學校に教鞭を執る傍ら、府下の殖産興業に頗る寄與。一八七五(明治八)、東京開成學校に轉じ、翌年東京外國語學校に兼務、歸國後、一八八八(明治二一)、マルセイユ日本名譽領事

(文久元) 慶應 三)

ハンサード

Hansard, A. W.

同

ブラキストン

Blakiston, Thomas Wright

同

ブラック

Black, John R.

同

明治一〇

一八七七

ジュリ

Dury, Leon

文久元

文久三

パンペリー

Pumpelly, Raphael

同

ブリーク

Blake, William P.

文久三

一

タムソン

Thompson, David

(同)

ローザ

Rosa, Da

慶應元

明治九

ヴェルニー

Verny, Francois L.

に任せられた。富井政章、本野一郎、稻畑勝太郎等は其門下。

一八三七(天保八)―一九二三(大正一二)。米の地質學者。北海道の鑛山開發のため函館に赴き、鑛山探掘法、熔鑛法等を傳授した。

米の地質學者、パンペリーと共に來朝、北海道の地質、鑛山、油田等を調査し、傍ら探鑛法、分析法を講じた。

一八三五(天保六)―一九一四(大正三)。米、プレスビテリアン教會の牧師。一八七三(明治六)、東京日本基督教會を組織、後新榮橋に會堂を新築、八年獻堂式を舉行、所謂新築教會である。又石油事業に貢献し、石坂周造が石油採取事業を起したのも彼の勧めによる。

葡の新聞記者。維新前より我國に來り、貿易を營む傍ら、一八六三(文久三)、横濱で「Japan Commercial News」(慶應元、リックビー(Rickerby))に買収せられて「Japan Times」となる)を發行。

一八三四(天保五)生。佛の技師、横須賀製鐵所首長、横濱、横須賀兩製鐵所を立案設計し、一旦歸國、横須賀製鐵所首長を囑されて一八六六(慶應二)再渡し、一八七五(明治八)迄在職、今の海軍工廠の前身たる造船所の起工完成につき技術方面を統轄すると共に横濱製鐵所を監督した。維新創業時代の造船は勿論、觀音崎、野島崎、城ヶ島、品川等諸燈臺の設計建造、邦人技士の養成等功績著しく、屢々内謁恩賜の惠典に浴した。

佛の騎兵大尉。幕府に招かれ、佛式兵法を傳へ、後元老院の備となる。

一八三二(天保二)一八八八(明治二一)、蘭の化學者。最初長崎小島養生所の分離窮理所を督し、一八六七(慶應三)、江戸開成所に移り化學教師となり、我が國に於ける西洋化學の基礎を造る。一八六八(明治元)、大阪病院が創設せらるゝや聘せられて我が醫學界に盡す所があり、又、翌年大阪舎密局が開かるゝや入つてその教師となつた。

英の技師。鹿兒島藩に招かれ、磯濱の紡績所に司長となる。我國最初の洋式紡織業を興し、斯界に大きな足跡を残した。

一八四一(天保二)一八九二(大正六)。英の陸軍士官。日本駐屯軍に加つて來朝。一八七二(明治四)、海軍砲術學校教頭、一八七六(明治九)、工部大學數學教師、一八八二(明治一四)「Japan Mail」の經營者兼主筆となり、爾來三〇年日本の忠實なる紹介者として盡し、治外法權の撤廢、條約改正、日英同盟の締結等も亦彼に負ふ所が多い、東京で卒。

獨の軍人。大阪川口在留のレーマン・ハルトマン商會に勤務、一八六九(明治二)和歌山藩に軍事教官として、招聘せられ、獨逸式兵制を教授し、教練は素より操銃法から化學、火藥製法、機械組立に至るまで教導し、又、製靴術、鞣革法の移植を建議する等功績大であつた。

獨の化學者。長崎醫學校に化學及び物理學を教へること五年、内務省衛生局顧問に轉じ、東京に衛生化學試驗所を設立、次いで京都、横濱に同試驗所を設置するに功極めて著しかつた、其後横濱衛生試驗所長とな

慶應 元
一八六五

明治 四
一八七一

ジュ・ブスタ
Du Bousquet
ハラタマ
Gatama, Koenaad
Wolter

同

慶應 三
一八六七

ブリンクリ
Brinkley, Frank

明治 元
一八六八

ケッペン
(カッペン)
Köppen, Carl

同

ヒヤッ
Geerts, A.J.C

り終生その職に在つたが、製藥方面のみならず、日蘭親交にも盡す所があつた。

英の技師。燈明臺築造方の首長として明治初年に於ける數多の建設設計に従事、又鐵道敷設の必要を政府に建言、その急務を説いた。

一八三二(天保二)一八九二(明治二五)。獨の化學者。初め鍋島藩に聘せられ、有田陶業の改良を圖り、一八七二(明治四)辭して大學南校及び東校に理化學を講じた。一八七三(明治六)、埃國維納の萬國博覽會に出張、歸朝後は勸業寮の顧問として種々技藝を指導し、七寶燒の研究を企て、同時に東京開成學校及び文部省製作學校の教師となり、又東京博物館の設立に參畫した。一八七六(明治九)、米國費府萬國博覽會に出張。一八七八(明治一三)京都府に聘せられ、醫學校に理化學を講じ、舎密局に化學工藝品の製作を指導し、一八八一(明治一四)歸京して東京大學に應用化學を講じ、傍ら東京職工學校(後の高等工業、工業大學)陶器玻璃工科主任として、又農商務省の囑託として我が工業のために盡瘁した。一八八三(明治一六)、旭燒(元の名吾妻燒)を創製。東京にて卒。

佛の技師。横須賀製鐵(造船)所副首長。一八七二(明治五)、海軍省へ轉じた。品川、觀音崎、野島ヶ崎の三燈臺は彼の建設したもの。

英の鐵道技師。工部省鐵道寮に招かれ、建築副役として新橋横濱間を測量、次いで大阪神戸間を測量、又關西方面の工事計畫に參與、一八七七(明治一〇)、建築師長となり、在職中に歿。

明治 元
一八六八

明治 九
一八七六

ブラントン
Brunton, Henry
ワグネル
Wagner, Gottfried

同

同

チホシー
Thiebaudier, Jules

明治 三
一八七〇

イングラント
England, John

明治 三 一八七〇	明治 九 一八七六	キンドル Kinder, Thomas W.
同	同	ハイトケンベル Heidkampfer, Fredrich
(同)	明治 八 一八七五	ブリユナ Brunat, Paul
(同)	同	マ Maillet
同	同	モ Morell, Edmund
同	同	リ Ritter, Hermann

英の技師。分析師ツッキー(Tookay, C.)、銕解師アトキン(Atkin, E.)を伴ひ來朝。造幣寮首長となり、貨幣鑄造に貢献。

獨の製靴師、和歌山藩に招聘せられ、製靴術を傳へた。我が國製靴技術の濫觴である。

一八四〇(天保一一)生。佛の技師。一八六九(明治二)、來朝、翌年富岡製絲場教師となり、製絲界のため盡瘁したが、その小粋再練式の採用は卓見であり、影響最も大きかつた。

佛の教育家、一八七〇(明治三)大學南校に佛語學、窮理學教師として備聘され、七三(明治六)より諸藝學校物理學及化學教師として備用されたが、翌年病死。

英の鐵道技師、工部省鐵道寮建築師長。創業當時の我が鐵道計畫は殆どその手に成り、新橋横濱間及び大阪神戸間の工事に關係し、其の功勞くない、工部省、工學寮の設置も彼の建言に基づくといふ。一八七二(明治四)東京で死。

一八二八(文政二)一八七四(明治七)。獨の教育家、大阪理學所に理化學を擔當、後第四大學區第一番中學に轉じ、次いで開成學校に鐵山學を講ず。

明治 三 一八七〇	明治 七 一八七四	ルボフスキ Lubowsky
明治 四 一八七一	明治 七 一八七四	ウィリアムス Williams, G. B.
同	明治 三〇 一八九七	ホルドリッチ Aldrich, A. S.
同	明治 二四 一八九一	クニツピング Knipping, Erwin
同	明治 九 一八七六	クリステイ Christy, F. C.
同	明治 八 一八七五	ケ Capron, Horace
同	明治 七 一八七四	ゴールウエー Galway, W.

獨の鞣皮師、和歌山藩に招かれ、洋式鞣革法を教授した。我が國洋式製革の濫觴である。

米の財政學者。租稅寮に招聘せられ、我が政府の財政顧問として活躍。

英の鐵道技師、工部省鐵道寮に奉職、新橋横濱間の營業事務を掌り、次いで備外國人の中央部として萬般を綜理した。

一八四四(弘化元)一八九二(大正一一)、獨の氣象學者。本邦氣象學に貢献。初め大學南校數學教師、後遞信省に轉じ、更に内務省地理局地理氣象寮に勤務、日本の天氣豫報と暴風警報とを創め、各地に測候所を新設した。

英の鐵道技師、工部省鐵道寮に雇傭せられ、新橋横濱間の運轉及び工作の主任者として貢献。

米の農學者。開拓使顧問として北海道の經營、札幌本府の設置、農學校の設立を始め幾多の企畫を試みた。札幌農學校の設立はその建言に據る。

英の鐵道技師。新橋横濱間に運輸長として在勤、一八七四(明治七)、新線測量に従事、上越線及び飯山、松代、上田の線を踏査し、又大津長濱間を實測した。

明治 四
一八七一
明治 七
一八七四
コウニ
Coignet, Francois

佛の鑛山技師。鑛山寮鑛山職頭として招聘され、生野鑛山の開鑿に従事し、一八七二(明治五)住友家の依頼に應じて別子鑛山を視察した。

同
明治 八
一八七五
シエンク
Schenk, Carl

獨の教育家。大學南校に獨語、普通學を教へ、後鑛山學を擔當。

米の教育家、宣教師。熊本洋學校に教授たる事五年、後大阪英學校に轉じ滞在一年、歸國し、後年更に第三高等學校教師として來朝、在任三年、歸國す。一八七六(明治九)の「熊本バンド」の組織は彼の薰陶を語るもの、又彼は農業上にも寄與する所があつた。横井時敬、浮田和民、小崎弘道、徳富蘇峰はその門下。

同
明治 一〇
一八七七
ジーンズ
Janes, L. L.

英の鐵道技師。工部省鐵道寮建築助役として京都神戸間の橋梁工事に従ひ、一八七五(明治八)、新橋横濱間に移り、六郷川其の他の架橋に従事。一八七八(明治一一)病歿。

同
一
シヤン
Shann, Theodore

一八三五(天保六)一八九二(大正九)。米の地質、鑛山學者。開拓使に聘せられ、ケブロンと共に來朝、北海道地質調査主任として石炭、石油、硫黄等の探鑛をなす。又一八七六(明治九)、工部省に轉じ、政府の命により本邦の石油調査にも當つた。

同
一
ライヤン
Lyman, Benjamin Smith

英、東洋銀行社員。我が委託に依り鐵道事務に關係したが、一八七二(明治五)より五ヶ年の任期を以て鐵道管配役となり、萬般を統轄す。

明治 五
一八七二
カール
Cargill, W. W.

獨人。第一大學區第一番中學數學教師。一八七三(明治六)、博覽會事

同
グレイフエン

Greeven, C. F.

務局へ轉じ、後開成學校に數學を教へ、更に内務省勸業寮へ轉じた。

明治 五
一八七二
ストーン
Stone, William Henry

一八三七(天保八)一八九七(大正六)。英の工學者。工部省電信局にあつて、電信の架設指導に當り、一八八五(明治一八)逓信省に轉じた。常に中央の樞軸に膺り、内國法規の判定、國際規約の協定より、その技術に至るまでよく計畫獻替した。日清、日露の兩役に際しても、軍の樞機に參し、在職四〇年に及んだ。東京で卒。

同
ブラウン
Brown, A. R.

英の船員。一八七一、二(明治四、五)頃、明治丸を廻航して來り、臺灣征伐の際、高千穂丸其他の運輸船を命ぜられた。後管船課員となり、外人に對する試験委員長となり、晩年歸國してグラスコー日本領事を終身勤めた。

同
ボイル
Boyle, Richard Vicars

一八二二(文政五)一八九八(明治四一)。英の鐵道技師。工部省鐵道寮建築首長として、神戸に在勤、技術全般を統轄した。自ら中仙道を踏査し、又屋張線、信越線等を調査し、基礎計畫を定めた。

(同)
明治 九
一八七六
アンチセル
Antsel, Thomas

米の化學者、醫學博士。開拓使に招聘せられ、地質工作鑛山舎密長として北海道の拓殖に従事。一八七二(明治五)、紙幣寮にて印肉製造を教授、一八七四(明治七)印刷局に聘用された。

明治 六
一八七三
エルトン
Ayrton, William Edward

一八四七(弘化四)一八九八(明治四一)。英の電氣學者。工業寮(工部大學校)で物理學、電氣學を講じたが、彼の來朝により電氣工學界は急速の進歩を遂げた。一八七八(明治一一)、中央電信局(木挽町)の開業祝宴の際その燈火用として彼の指導の下に弧光燈を點じた。我が國最

初の電燈である。

一八三九(天保一〇)―一九〇四(明治三七)。獨の動植物學者。初めて東京醫學校に動植物學を教授した。又我が國に於ける魚類研究に力を盡し、間接ながら水産學の開發者としての功績も尠くない。

一八三七(天保八)―一九一二(大正元)。英の化學者、醫博。工學寮(工部大學)に化學を講じ、後ダイヤに次いで教頭となり、傍ら造幣司分析技師を兼任、又内務省石油取調査委員となる。工部大學が帝大工科となるや前職を繼ぎ、本邦無機化學研究の礎を作つた。

一八四八(嘉永元)―一九一八(大正七)。英の工學者。工業寮(工部大學)に土木工學及び機械工學を講じ、且教頭となる。爾來學科、諸規則の制定、校舎の構造、教場の配置等を企畫し、日本工學教育の基を作つた。尙歸國後も在留邦人を扶掖することが多かつた。

米の農學者。開拓使に招聘せられ、農事の調査施設に當つた。開拓使廢止後は札幌縣に雇傭され、後米公使館の書記官となり、更に公使に陞進。極めて日本に厚意を有し、その辭職後も猶日本に在留して我國勢發展に盡し、又、外資輸入により産業を振興すべきことを政府に進言し、その賛同を得て一九〇〇(明治三三)、インターナショナル・オイル・コンパニー(一九〇七(明治四〇)日本石油會社に買収さる)を設立した。

一八四二(天保一三)生。蘭の技師。内務省土木局に招かれ、大阪にあ

明治 六 一八七三	明治 九 一八七六	明治 三二 一八九九	明治 一五 一八八二	明治 三四 一八八二
ヒルゲンドルフ Hilgendorf, Friedrich	ダイヴァース Divers, Edward	ダイイヤ Dyer, Henry	ダイン Dun, Edwin	デレッキー

明治 六 一八七三	明治 一八 一八八五	明治 二八 一八九五	明治 一四 一八八一	明治 三 一八七四
De'Ryke, Johannes	ネット Netto, Curt	ボアソナード Boissonade, Gustave Emile	マクドナルド McDonald, John	アトキンソン Atkinson, R. W.
			シャンド Shand, Alexander Allan	

つて淀、木曾兩川改修事に當り、更に中央にあつて大阪築港計畫を初め各地の施設に與かり、一八八四(明治一七)、東京に分流式水道を敷設した。實に我が國に於ける西洋式下水道の嚆矢である。

一八四七(弘化四)、生。獨の鑛山學者。工部省に備聘せられ、秋田縣小坂鑛山に勤務。一八七七(明治一〇)、東京大學理學部講師に轉じ、探鑛金を教へた。

一八二五(文政八)―一九一〇(明治四三)。佛の法學者。明治初年に於ける我が國の法學及び立法事業に多大の貢獻をなした。舊民法(明治二二公布)、舊刑法(明治一三公布、明治一五―一四一施行)、治罪法(明治一三制定、明治一五―二三施行)等は彼の起草に成るもの、なほ、我が國の拷問を廢止し、證據裁判の必要を司法省に進言し、その實行をみた。

英の鐵道技師。工部省鐵道寮に汽車運轉方兼造車方として招聘せられ新橋に在勤、一八八〇(明治一三)以來職工長として工場に勤務。

英の化學者、東京開成學校に分析化學、有機化學、理論化學、工藝化學及び冶金術を講じ、又、「日本酒釀篇」を著し我が學界を裨益す。

英の經濟學者。早くより横濱東洋銀行の書記として本邦に渡來した人。一八七四(明治七)、紙幣頭外國書記官兼顧問長となり、七七(明治一〇)、銀行局に轉じた。在任中銀行検査、報告、帳簿其の他銀行事務の改良に盡力したのみならず、「銀行大意」「銀行簿記精法」等を著し、斯

界に貢献した、銀行雑誌の刊行は彼に負ふ所が尠くない。又、歸國後一八九九(明治三二)本邦公債を英國で募集するに際し頗る斡旋する所があった。

英の教育家。東京開成學校機械學教師。

英の鐵道技師。工部省鐵道寮に備聘せられ神戸に在動し、運轉及び工作を主管。

英の鐵道技師。工部省鐵道寮に聘せられ、神戸に在動、一八七七(明治一〇)の開業式に際し、御召列車運轉の故も以て賞を賜つた。後八九(明治二二)、東海道線全通後東京に轉動、全般の運輸事務に盡瘁した。

獨、ドンドルフ會社の銅版摺職工。印刷局に雇はれ、初め製肉試験に従事して製煉法を改め、凸版印刷を擔任し、一八七五(明治八)初めて見習工に凹版印刷法を教へ、功勞尠くなかつた。一八八〇(明治一三)歿。

獨の政治經濟學者。譯選寮顧問として郵便貯金制度確立のため來朝したるも、東京醫學校で獨語及びラテン語を講じ(明治九一二)、一八七八(明治一一)、大藏省兼務、翌年顧問となり、農商務省にも勤務。又、一八八六(明治一九)帝國大學に獨語を講じ、慶應義塾にも統計學を講じた。その間、金庫公債制度、火災保險制度、公債紙幣銷却制度、會計検査院獨立、備荒儲蓄制度等、明治一〇年前後の我が財政經濟上の重要事件に常に關與し、頗る獻替する所があり、その業績は枚擧に遑なし。

明治 一八七四

明治 一八七八

Smith, Robert Henry

同

明治 一一

Smith, W. M.

同

明治 三二

Page, W. F.

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同

明治 三二

Brich, Karl Anton

同 明治 一四 一八八一 Langgaard, Alexander

同 昭和 三 一九二八 Learned, Dwight Whitney

明治 八 一八七五 Chiossone, Edoardo

明治 七 一八七四 Liebers, Bruno

獨の化學者。東京醫學校製藥化學教師。藥學界に於ける功績はアイクマン並稱す。

一八四八(嘉永元)生。米の教育家。終始同志社に教鞭を執り、創業時代には經濟、天文、物理、政治、數學等を教へ、後には神學、聖書、教理史、ギリシヤ語等を教へ、その經濟學、聖書註釋等は廣く世に行はれた。一九〇三(明治三六)神學校教頭に任じ、一九一九(大正八)大學長となり、翌年三月に及んだ。

伊の彫刻家。印刷局技師として、新圖案及び彫刻法の發案と電胎整版の計畫を試み、業務の改善に當つた。地券狀、煙草鑑札の原版の圖案彫刻を作製し、紙漉寶の製造を教授し、銀行紙幣一圓原版を作つた。又、各地の景色、社寺の古器物を撮影模寫し、古美術品を蒐集してその一部を本國へ送り、日本美術を紹介した。一八八八(明治二二) 明治天皇の御正服御軍裝の御尊影を敬寫した。その他三條、岩倉、大久保、木戸等當時の大官の肖像を描いた。一八九一(明治二四)退職、一八九七(明治三〇)東京にて歿。

獨の技師。印刷局技師として一八七五(明治八)ブリュックと共に製肉試験を行ひ、製煉法の改善に成功、彼の指導により、我が國の凸版印刷機械の裝置、版面の据付、肉棒、製煉等は長足の進歩を遂げた。又、キヨソネの手になつた原版を以て地券狀、煙草鑑札を印刷した際にはドイツ製の機械を操縦して鮮麗な印刷をなすことが出來た。

明治 九
一八七六

コンドル
Condor, Josiah

英の建築學者。我が國洋風建築界の鼻祖。工學寮(工部大學)造家學科の主任教師として建築學を講じ、又東京に幾多の洋風建築を試みた。ゴシック派に屬し、皇室博物館、華族會館、海軍省、帝大法文館本館等は模範的建築として後世に範を垂れた。辰野金吾、片山東熊、曾根達藏等は其の門下。一九二〇(大正九)歿。

同

明治 三〇

トレヴィシッタ
Treviick, F. H.

英の鐵道技術者。工部省鐵道寮汽罐方頭取として神戸に在勤、後新橋に轉じ、汽車監察方助役となり、次いで監察方となる。

(同)

明治 四三

ファン・ドールン
Van Doorn.

蘭の技師。明治初年來朝し、内務省に備はれ、河川改修工事、築港工事に貢獻。一八七六(明治九)、野蒜築港を完成した。

明治 一〇
一八七七

明治 一八
一八八五

アイクマン
Eykmann, Johann

一八五一(嘉永四)生。蘭の化學者。我が藥學界の恩人。内務省衛生局に招かれ、長崎化學場で化學を教示し、始めて藥品試験をなし、後同化學場長に擧げられた。一八七八(明治二)内務省へ轉じ、衛生局司藥場長となり、次いで帝國大學醫學部で化學、製藥學、藥劑學を講じ、或は日本藥局法編纂委員となり、或は中央衛生會委員に擧げられ、藥學界に甚大な影響を與へた。

同

明治 一一
一八七八

ヴァン・ゲント
Van Gendt, Johan Godart
キンチ、エドワード
Kinch, Edward

蘭の土木技師。開拓使に招かれ、石狩川口改修、岩内港修築等の調査に従事し、一八七八(明治二)歸國の途中死去。
獨の農藝化學者。駒場農學校教師。本邦に於て初めて農藝化學を教授

明治 一一
一八七八

フェノロサ
Fenollosa, Ernest

一八五三(嘉永六)一八九〇(明治四一)。米の哲學者。日本美術研究家。東京帝國大學文學部で哲學、論理學、理財學等を教授し、ミル・スペンサーを論ずると共に他方カント、ヘーゲルを説き、我が思想史に甚からぬ影響を與へ、傍ら日本美術の鑑賞と研究に意を注いだ。一八八六(明治一九)退職、文部省の命を受けて美術取調委員として渡歐、次いで岡倉覺三と協つて一八八九(明治二二)美術學校を創立。爾來、日本畫復興のために盡瘁し、復古説を唱導し、日本美術研究をして系統的たらしめた功績は大きい。又その著「美術眞説」(大森惟中譯、明治一五年刊)の明治美術に與へた影響も著しかった。歸國後ロンドンにて歿。

同

明治 二六

レスレル
(ロエスレル)

Roesler, Karl Friedrich
Hermann

一八三四(天保五)一八九四(明治二七)。獨の學者。我が憲法制定に對する功勞者。初め外務省に職を奉じ、後内閣の法制顧問に轉じた。商法草案を編纂し、又我が憲法及び行政諸般の制度を樹つるに與り、頗る貢獻する所があつた。憲法、行政、經濟等に關する論著が多い。

明治 一二
一八七九

同

アッペール
Appert, Georges

佛の法學者。司法、文部兩省兼務。一八八七(明治二〇)より一八八九(明治二二)までは帝國大學で佛法學を講じた。

同

明治 一六
一八八三

デュエデルライン
Döderlein, Ludwig

一八五五(安政二)生。獨の醫學者、生物學者。東京大學醫學部植物學及び動物學教師。日本の魚類を研究し我が水産學に貢獻。

明治 一四

明治 二五

ケルネル

一八五一(嘉永四)一八九二(明治四四)。獨の農藝化學者。駒場農學

一八八一	一八九二	Kellner, Oskar
明治一五 一八八二	—	ウエスト West, Charles Dickinson
同	明治二九 一八九六	パウネル Powell, C. A. W.
同	明治二五 一八九二	フェスカ Fesca, Max
同	明治二三 一八九〇	ラートゲン Rathgen, Karl
明治一六 一八八三	—	パー Palmer, H. Spencer
明治一七 一八八四	明治二三 一八九〇	ルドルフ Rudorff, Otto

校（東京帝國大學農學部の前身）農藝化學科の教師として招聘され、授業、實驗を分擔する一方、木邦各種土壤の分析、稻の培養、養蠶、肥料の研究等にも力を盡し、我が國農業の改良進歩に貢献した。古在、鈴木農永、麻生の諸博士はその門下。

一八四八（嘉永元）—一九〇八（明治四一）。英の工學者。工部大學校機械學教師。後帝國大學工科に前職を繼ぎ、最も船舶機關學に精通し、同大學に造船學科を創設せしめた。又我が海軍を初め三菱、川崎兩造船所にも貢献した。東京で卒。

英の鐵道技師。建築師長として神戸に勤務。後東京に轉動。獨の學者。駒場農學校教師。農業、農政上の功勞者。又我が國初めての土性調査をなした。

一八五五（安政二生）。獨の法學者。東京大學で行政法及び政治學を講じ、傍ら農商務省の囑託として各國相場會所に關する法律規則の調査に従事した。

一八九三（明治二六）死。英の陸軍少將。水道技師。神奈川縣廳の土木技師として横濱の水道敷設に當り、又横濱築港工事を監督した。大阪、神戸、函館の水道調査にも従事してゐる。

一九一五（大正一四）死。獨の法學者。東京大學でローマ法及び公法學を講ずる目的で來朝したが、法律顧問として司法省に轉じ、歸國まで前

後六ヶ年、我が法制整備のために盡瘁した。裁判所構成法は彼の起草した原案によつたものである。

獨の技師。一八八五（明治一八）頃内務省に雇はれ、東京灣に築港を計畫、又、野蒜築港にも關係した。

一八四六（弘化三）—一九二五（大正一四）。獨の法律家。ベルリンの日本公使館顧問。一八八六（明治一九）來朝して内閣及び内務省の法律顧問となり、その間一八八八（明治二二）地方制度編纂委員を命ぜられ、地方行政制度の創設に盡瘁した。即ち明治二年制定の舊市町村制は彼に負ふものである。

一八四六（弘化三）—一八九三（明治二六）。獨の經濟學者。東京帝國大學法科にて理財學及び財政學の講義を擔當した。傍ら大藏省財政顧問となり、貢獻する所極めて大であつた。湘南で永眠。

一八二九（文政一二）—一九〇七（明治四〇）。獨の建築家。ベックマン（Böckmann, Wilhelm 一八八六（明治一九）來朝）と共に我が臨時建築局に招かれ、議院、司法省、裁判所の建築設計に従事し、我が國の古建築を研究した。その建築設計は實現をみなかつたが、臨時建築局には彼及びベックマンの斡旋により、チーゼ（Ziese, C. I. N. 煉瓦製造師）、ステヒミュレル（Stegmüller）チーツェ（Tietze, D. E. L.）等の多數の技術者が招かれ、又、妻木頼黄、河合浩藏等が留學、彼の工務所で指導をうけ、歸國後裁判所及び司法省の建築工事を督した。

明治一八 一八八五	—	ムルドル Mulder, R.
明治一九 一八八六	明治二三 一八九〇	モッセ Mosse, Albert
明治二〇 一八八七	—	エッゲルト Eggert, Udo
同 (五)	明治二〇 (七)	エンデ Ende, Hermann

明治二〇 一八八七 明治二八 一八九五

グラスマン
Grasmann, Eustach

同 一

バートン
Burton, William

明治一八八八 明治二四 一八九一

メルク
Meik, C. S.

同 明治二四 一八九一

マイエル
Mayer, Heinrich

同 ルゾオン

レボン
Revon, Michel

明治二二 一八八九 明治二五 一八九二

ルビリョウ
Revlilod, August

一八五六(安政三)生。獨の林學者。東京農林學校林學教師。後、東京帝國大學農科に職を繼ぎ、隨時全國を跋渉し、我が國に於ける林業の改善を計つた。

一八五五(安政二)一八九九(明治三二)。英の工學者。帝國大學工科大学に新設せられた衛生工學の講座を擔任した。又、内務省衛生局の顧問として水道及び治水工事の企畫經營にも參した。長崎、大阪、廣島、神戸の上水道はその計畫に基いて竣成し、東京、仙臺、名古屋、福岡、新潟、下關の上下水道も亦彼の意見書によつて實施された。一八九六(明治二九)臺灣に渡り、基隆の水源地發見。臺灣にて客死。

英の技師。北海道廳の招聘によつて來朝。諸港灣修築の調査に従事。一八五四(安政元)一八九一(明治四四)。獨の森林學者。東京農林學校(後の東大農科)に造林學の講座を擔當。我が國の造林學は彼の努力に負ふところが多い。

一八六七(慶應三)生。佛の法律學者。帝國大學法科大学の佛法を講ずる事七年、傍ら司法省名譽法律顧問を兼ねて我が法學上に多大の裨益を與へた。

明治二二 一八九一 明治二五 一八九二

レーンホルム
Löhnholm, L. S.

同 明治二五 一八九二

ウエルニツク
Wernicke, Johannes

明治一八九〇

ドロツバース
Droppers, Garrett

同 明治二八 一八九五

ミュレル
Müller, Albert

明治二六 一八九三 明治二八 一九二五

ウエンクステルン
Wenckstern, Adolph v.

(同) 明治二七 一八九四

ハース

同 明治四〇 一九〇七

ロイーン
Loew, Oscar

一八五四(安政元)生。獨の法學者。獨逸協會學校に法律學を講じ、一八九〇(明治二三)、帝國大學に轉じ、獨法を擔當した。又、司法省顧問として行政に資益し、他方大藏省の「財政經濟新報」に執筆し、其の編輯に力を致した。

獨の經濟學者。獨逸學協會學校專修科教師。國家學、經濟學を擔當した。米の經濟學者。慶應義塾に理財學を講じた。在職四、五年で歸國。

一八六五(慶應六)生。獨の蹄鐵師。東京農林學校に蹄鐵法を講じ、傍ら陸軍蹄鐵學舎の囑託となり、我が不完全なる蹄鐵術に新様式を採用せしむるに至つた。

一八六二(文久二)生。獨の經濟學者。東京帝國大學に理財學、財政學を擔當。

米の鑿井技師。日本石油會社に招聘せられ、我が鑿井法に一生涯を開いた。

一八四四(弘化元)生。獨の農藝化學者。東京帝國大學に農藝化學を講じ、一時歸國、一九〇〇(明治三三)再び渡來して前職を繼ぎ、幾多優秀なる農藝化學者を養成した。

明治 二八 一八九五	明治 三二 一八九九	明治 三六 一九〇三	明治 三二 一八九九	明治 三三 一九〇〇	明治 三三 一九〇〇	明治 三三 一九〇〇	明治 三三 一九〇〇	明治 三三 一九〇〇	明治 三三 一九〇〇
ツイッカーズ Vickers, Enock Howard	フォクスウェル Foxwell, Ernest	パールセン Bahlsen, Emil	グリフィン Griffin, Charles Summer	ブリデル Bridel, Louis	チャイルズ Childs, F. C.	パーヴィス Pruvis, Frank P.	ヘーフェレ Hefele, K.	ヘーフェレ Hefele, K.	ヘーフェレ Hefele, K.

米の經濟學者。慶應義塾理財學教師。又、日米親善に盡力した。

英の經濟學者。東京帝國大學經濟學及び財政學教師、又、東京高等商業校にも經濟學を擔任。

一八六二(文久二)生。獨の鑛山學者。東京帝國大學に採鑛冶金學を講じた。

一八七二(明治五)一八九九(明治三二)。米の經濟學者。東京帝國大學に經濟學、財政學を擔當した。箱根で永眠。

一八五二(嘉永五)一八九三(大正二)、スイスの法學者。東京帝國大學に佛法、特に親族法、相續法を講じた。フフミニストで、婦人の法律上の地位向上のため諸種の論文を書いた。東京で死。

米の製油技術。日本石油會社に招かれ、製油技術の改善を圖つた。

英の造船學者。東京帝國大學に造船學を講じ、本邦造船界に幾多の人材を作つた。又、在任中五回歸國し、親しく歐米造船の狀況を視察し、本邦船界の發達に資した。

一八六三(文久二)生。獨の林學者。東京帝國大學に林學通論、森林砂防工學、森林經濟の各講座を擔當し、傍ら實地に森林を視察して得たる識見を發表した。

明治 三七 一九〇四	明治 三八	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九	明治 四二 一九〇九
ホフマン Hofmann, Amurigo	スプレーグ Sprague, O. M. W.	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich	ウエンチヒ Wenig, Heinrich

一八七五(慶應元)生。獨の林學者。東京帝國大學にて森林治水砂防工學の講義、實習を擔當し、傍ら日本内地、朝鮮、臺灣を踏破して、その結果を發表した。

一八七三(明治六)生。米の經濟學者。東京帝國大學法科大學經濟學及び財政學教師。

一八七〇(明治三)生。獨の經濟學者。東京帝國大學法科大學經濟學及び財政學教師。歸國後プロシヤ内相となる。「Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister」編纂の主宰者。

獨の技師。京都梅津バビール・ファブリーク抄紙技師。

一八四九(嘉永二)生。獨の獸醫學者。駒場農學校教師、後、農科大學獸醫學教師となる。獸醫畜産のみならず、我が産業界に於て、乳肉検査法、馬匹改良法を制定する等裨益する所頗る大であつた。

白耳義人。一九二八(昭和三)迄東京高等商業學校にて外國貿易に關し教授し、我が商業教育のため大いに貢献した。一九三一(昭和六)歿。

明治・大正・昭和經濟略年表

附・明治前西洋交渉略年表

明一治以前 (年號下括弧内數字は西曆)

天文三年(一五三四) 一説に曰く、是年始めて西洋人(葡萄牙人)來朝す

十二年(一五四三) 八月 ビント、種子島に來り鐵砲を傳ふ

十六年(一五四七) ビント、豊後府中及び鹿兒島に來る

十七年(一五四八) 安次郎、ゴアに至り洗禮

十八年(一五四九) ザビエル、切支丹(耶穌教)布教のため鹿兒島に到着(西教初めて輸入)

十九年(一五五〇) 平戸開港

廿一年(一五五二) 山口に切支丹教會堂建設

永祿二年(一五五九) ビレラ、京都に上り切支丹會堂(南蠻寺)を建立

元龜二年(一五七一) 肥前大村藩、長崎を葡萄牙人に開港

天正十五年(一五八七) 六月 秀吉、切支丹布教禁止發令

文祿四年(一五九五) 天草天主教校、羅補和辭書刊行(本邦最初の歐和辭典)

慶長五年(一六〇〇) 三月 英人アダムス、豊後に漂着

八年(一六〇三) ロドリゲスの日葡辭書長崎にて刊行

九年(一六〇四) 十二月 幕府、長崎に譯官を置く

末次末藏、角倉了以に朱印狀下附

十八年(一六一三) 九月 伊達政宗、支倉六右衛門を西班牙及び羅馬に派遣

同月 英船王書を携へて平戸に通商を求め商館開設(コックス來朝)

十九年(一六一四) 正月 重ねて切支丹布教禁止令

元和元年(一六一五) 支倉等、羅馬に到り法王に謁見

寬永十一年(一六三四) 長崎出嶋を築造し葡萄牙人居留地とす

十二年(一六三五) 五月 外國貿易朱印船停止

十四年(一六三七) 十月 島原の切支丹教徒叛亂

十八年(一六四一) 六月 和蘭人を平戸より長崎出島に移す

延寶元年(一六七三) 六月 英船ターソン號、通商を求む

貞享元年(一六八四) 二月 將軍、甲比丹ヨングを引見

元祿三年(一六九〇) 八月 ケンペル蘭館醫員として來朝

寶永五年(一七〇八) 八月 伊太利人ヨハン・シローテ、屋久島來着(十一月江戸送致)

享保五年(一七二〇) 波斯馬等、外國馬始めて輸入

是年 切支丹關係以外の禁書解禁

元文五年(一七四〇) 初めて甘蔗を植多砂糖を製す

明和二年(一七六五) 後藤利春の紅毛談行禁止さる

安永三年(一七七四) 解體新書刻成(西洋醫學解剖書の最初)

四年(一七七五) 七月 ツンベルグ來朝

天明三年(一七八三) 司馬江漢、西洋銅版技術を創む

寬政四年(一七九二) 九月 露國使節ラツクスマン、伊勢の漂民を護送して根室に來り、通商を求む

八年(一七九六) 稻村三伯、ハルマ和解(蘭和辭典)を著はす(本邦人の手に成る最初の歐和辭典也)

十一年(一七九九) ヘンドリック・ドゥッフ(後ち蘭館長)來る

文化元年(一八〇四) 九月 露國使節レザノフ、仙臺漂民を護送し長崎に來り貿易を求む

五年(一八〇八) 八月 英艦フェートン號、長崎に入港し薪水を求む(給與して松平康英引責自刃)

八年(一八一二) 六月 露艦長ゴロニンを千島の國後に捕ふ

文政元年(一八一八) 五月 英人ゴルドン、浦賀に來り貿易を求む(拒絕)

五年(一八二二) 四月 英艦、浦賀に入津、薪水を所望

七年(一八二四) 五月 英捕鯨船、常陸大津濱に上陸、薪水を求む、水戸藩之を捕留

八年(一八二五) 二月 幕府、異國船打拂令布告

十二年(一八二九) 九月 シーボルトに歸國退去命令

天保四年(一八三三) 二月 幕府、高田屋嘉兵衛を追放し其船船を沒收

五年(一八三四) 二月 幕府、全國の戸口調査

八年(一八三七) 二月 大鹽平八郎、大阪に擧兵

六月 米船モリソン號、浦賀入津(浦賀奉行砲撃)

九年(一八三八) 六月 幕府、大判増鑄

十三年(一八四二) 七月 幕府、異國船打拂令停止

弘化元年(一八四四) 七月 和蘭使節コープス(軍艦バレンバシ號艦長)長崎に來り開國勸告の王書を幕府に呈上

三年(一八四六) 閏五月 米國使節ビツドル、浦賀に來り通商を求む(幕府拒絕)

八月 英船三隻、琉球に來る

嘉永二年(一八四九) 八月 佐賀藩主鍋島齊正、其子に種痘

三年(一八五〇) 十一月 將軍、琉球使節を引見

四年(一八五一) 八月 鹿兒島藩、製煉所設置

五年(一八五二) 二月 徳川慶篤、大日本史を天覽に供し、また幕府に獻納

五月 幕府、西浦賀千代崎の砲臺を幕府所管とす
 六月 和蘭甲比丹キユルチユス、長崎に來着し蘭領印度總督の開國勸説書を幕府に呈出、且米使ベリイ近く渡來せんことを告ぐ
 是年 鹿兒島藩、反射爐及熔鐵爐建設
 六年(一八五三) 二月 關東大地震
 六月 ベリイ浦賀に來る
 同 久里濱にてベリイより米國々書受領
 同 ベリイ明春の再渡を約し浦賀を退去
 七月 幕府、受領の米國々書につき諸大名並に諸有司の意見徴收
 八月 露國水師提督ブチャイチン、露國國書を長崎に齎す
 九月 露兵、唐太の久壽古丹に上陸を企つ。幕府大船製造を解禁
 十月 幕府、軍艦兵器の購入を和蘭に委託
 同 徳川慶昭、幕府に大砲七十四門を獻呈
 十一月 品川砲臺新設の守備番任命
 安政元年(一八五四) 正月 ブチャイチン、國境劃定及び通商開始申入を拒絶され長崎退去
 同 ベリイ浦賀に再來
 同 ベリイ艦隊を率ひ神奈川沖に進入
 二月 幕府ベリイと横濱にて開港談判
 三月 ベリイと日米和親條約調印(下田箱館二港開港)

五月 唐太駐屯の露兵退去
 七月 幕府、日章旗を以て日本總船印と定む
 八月 スターリングと日英和親約定調印
 十一月 畿内東海諸國地震
 十二月 ブチャイチンと日露和親條約並に國境約定
 安政二年(一八五五) 三月 ブチャイチン、戸里村に於ける造船成り歸航
 六月 和蘭、幕府に汽船を獻上(觀光丸)
 七月 幕府、英米露との條約謄本を禁裡に上呈
 同 勝安房、暮命により長崎にて蘭人に就き海軍傳習
 八月 英國、幕府に汽船寄贈方を進告
 十月 江戸大地震
 十二月 長崎奉行、キユルチユス領事と日蘭條約調印
 安政三年(一八五六)
 二月 洋學所を藩書調所と改稱
 七月 和蘭領事キユルチユス、長崎奉行に通商開始勸告
 八月 ハリス、下田玉泉寺に領事館開設
 安政四年(一八五七) 四月 幕府、火藥座を設置
 五月 幕府、ハリスと下田條約調印
 七月 幕府、軍艦操練所を講武所内に設置
 八月 幕府、長崎にてキユルチユスと日蘭和親條約附録に調印
 九月 幕府、長崎にてブチャイチンと日露條約追加調印

安政五年(一八五八) 正月 幕府、ハリスに條約調印を六十日延期方要請
 三月 幕府に對し條約不許可の勅諭
 四月 幕府、ハリスより七月廿七日迄條約調印延期を受く
 六月 ブチャイチン、下田に入港
 同 幕府、神奈川に於てハリスと日米通商條約調印
 同 徳川慶喜條約調印につき大老中に詰問
 同 主上、條約調印を鞫問震怒
 七月 英國使節エルデン品川に入津
 同 幕府、新に外國奉行を設置
 同 幕府、キユルチユスと日蘭通商條約に調印
 同 幕府、エルデンと日英通商條約調印
 同 暴瀉病(コレラ)大流行死者無數
 九月 グローと日佛通商條約調印
 十二月 幕府に鎖港猶豫の勅語下賜
 安政六年(一八五九) 八月 幕府、洋銀一分銀を鑄造
 九月 條約批准のため外國奉行新見正興、村垣範忠其他を米國に派遣命令(萬延元年正月出發)
 萬延元年(一八六〇) 正月 遣米使節新見正興等米艦にて神奈川出發
 三月 水戸浪士櫻田門外に井伊直弼を暗殺
 閏三月 大判改鑄
 六月 幕府、葡萄牙と通商條約締結

十二月 米公使館書記官ヒュースケン、古川端にて暗殺
 同 幕府、普魯西と通商條約
 文久元年(一八六一) 二月 露艦對馬に來り同島の占有を企圖
 三月 幕府、五ヶ年の條約命令
 同 幕府、江戸大阪の開市、兵庫、新潟の開港延期方の交渉並に露國との國境劃定を外國奉行に命令
 四月 幕府、外國奉行小栗忠順を對馬に派遣
 五月 幕府、外國奉行水野忠徳を歐洲に派遣命令(八月二十一日松平康直に變更命令)
 同 水戸浪士東禪寺英國公使館を襲ひ二名を傷く
 同 ナガサキ・シツピング・リスト・エンド・アドヴァ
 同 ータイザイ發行(本邦最初の英字新聞)
 六月 百姓町人の大船製造外國船購入認許
 八月 對馬の露艦退去
 文久二年(一八六二) 二月 和宮親子内親王徳川家茂に御降嫁
 五月 藩書調所を洋書調所と改稱
 六月 東禪寺英國公使館の守衛、英人二名を殺害自刃
 八月 薩摩藩士、生麥にて英人一名を斬り二名を傷く
 同 幕府參觀制を改革し妻子の歸國を許可
 同 幕府弓組を鐵砲組に改組
 十月 幕府、新に山陵奉行を設置し山陵を修理
 同 幕府、井伊直弼の封十萬石を削除
 同 幕府、朝命を奉じ安政大獄櫻田事變等の罪による諸

藩士を救免
 十二月 幕府、陸軍奉行新設
 同 長州藩士、御殿山英公使館を燒毀
 同 幕府、新に陸軍總裁及海軍總裁の兩總裁設置
 文久三年(一八六三) 正月 在京中の徳川慶喜に攘夷の期限奏
 上を勅命
 二月 士庶の學習院に至り時事を建議することを認許
 三月 將軍家茂入京
 同 幕府騎兵奉行を新設
 四月 幕府、朝旨を奉じ十萬石以上の諸大名に交替を以て
 京都守護を命令
 同 將軍家茂、五月十日を以て攘夷期限を奏上
 五月 幕府、生麥事件の償金を英國公使に交付
 同 長藩、米國商船を下關に砲撃
 同 長藩、和蘭軍艦を下關に砲撃
 六月 米艦、下關を砲撃
 同 佛艦、下關を砲撃
 同 蘭國公使フアン・ボルスブルック着任
 七月 英艦、薩藩の生麥事件に對する遺族扶助料支拂不應
 諾により鹿兒島を砲撃
 八月 攘夷御祈願の爲大和に行幸
 同 藤本鐵石等、大和に擧兵
 同 幕府、洋書調所を開成所と改稱

九月 幕府、米蘭の總領事、尋で英佛兩公使と横濱鎖港を
 談判せるも不應
 十月 平野次郎等但馬生野に擧兵
 十一月 薩藩、幕府より借入金をなし英國公使に生麥事件の
 遺族扶助料を交付
 同 幕府、外國奉行池田長發、河津祐邦等を歐洲に派遣
 命令(十二月出發)
 十二月 家茂將軍上京の爲江戸出發
 同 幕府、瑞西と通商條約締結
 元治元年(一八六四) 正月 家茂將軍入京、尋で屢々參内
 一月 英國公使オールコック着任
 二月 三條實美攘夷の議を上表
 三月 水戸藩士田丸稻之衛門、藤田小四郎等筑波山に擧兵
 同 佛國公使ロッシュ着任
 四月 幕府、朝廷尊崇の條目十八ヶ條及供御増貢(毎年
 十五萬俵)を奏請
 五月 幕府、海軍操練所を神戸に設置
 六月 長藩米國船を長門黃波戸浦に砲撃
 同 松平容保參内、宮門を鎖し出入を監察
 七月 幕府に長藩討伐を勅命
 八月 幕府、將軍の長州親征を布告
 同 英、米、佛、蘭四國聯合艦隊十七隻馬關を襲撃
 九月 幕府、參覲交代制度復舊を計るも實施不能

同 幕府、英米蘭佛四國公使に長藩砲撃の償金を約定
 慶應元年(一八六五) 正月 高杉晋作馬關に擧兵
 三月 幕府長州再征を決定し家茂將軍進發を布告(五月十
 六日江戸出發、閏五月二十二日入京)
 四月 幕府、外國奉行柴田剛中等に英佛二國派遣を命令
 閏五月 英國公使パークス着任
 八月 幕府、横濱製鐵所設置
 十月 家茂將軍辭職を請願、併せて條約の勅許を督促
 同 徳川慶喜參内條約の勅許を請求し、勅許
 同 家茂の辭表却下
 十一月 幕府、彦根以下三十一藩に出兵を命じ徳川茂承を征
 長先發總督に任命
 慶應二年(一八六六) 二月 外國貿易の自由取引許可
 三月 幕府、横須賀製鐵所起工
 四月 巴里博覽會への出品方を各方面に勸奨
 五月 幕府、英米蘭佛四國と改稅條約締結
 同 島津藩、鹿兒島の磯濱紡績所創立(三年操業開始)
 六月 幕府と長州軍と戦端開始
 同 パークス英公使鹿兒島訪問
 同 米國公使フアン・フアルケンブルグ着任
 七月 幕府、伊太利と通商條約締結
 同 家茂將軍大阪城にて薨去
 同 幕府、軍艦操練所を海軍所と改稱

八月 徳川慶喜、宗家相續
 九月 幕府、佛人を招聘し陸軍練習所を横濱に開始
 十月 幕府、外國奉行向山一履を佛國に駐在命令
 十一月 幕府、外奉行栗本鯉を佛國に派遣
 同 幕府講武所を陸軍所と改稱
 同 幕府、民部大輔徳川(松平)昭武を佛國に派遣
 十二月 幕府、丁抹と通商條約締結
 同 孝明天皇崩御
 同 幕府、製鐵所奉行を設置
 慶應三年(一八六七) 正月 明治天皇御踐祚
 二月 幕官小出秀實、露都にて樺太の共有を約定
 三月 西村勝三、伊勢勝製靴工場を設立
 同 麥及雜穀の他國積出解禁
 五月 小栗忠順、火藥製造所を江戸府下瀧野川に起工
 七月 江戸及大阪に國産改所設置
 同 伊國公使デ・ラ・ツール着任
 八月 商社金札發行
 十月 大政奉還
 同 慶喜、將軍職辭職
 十一月 幕府、露國と改稅約締結
 十二月 幕府、兵庫開港、大阪開市(勅許)
 同 王政復古の令を布く(十四日)
 同 萬機親裁を御布告

明治以降 (年號下括弧内數字は西曆)

明治元年(一八六八)
 一月 伏見鳥羽の戰
 二月 幕府締結の約定全部承認
 同 驛遞司設置
 三月 五箇條御誓文
 四月 江戸開城
 同 太政官札發行
 同 政體書公布
 同 商法司設立
 五月 上野戰爭
 同 商法大意布達
 同 商法會所(生産引立會所)を創立
 七月 江戸を東京と改稱
 同 大阪舍密局創始
 同 明治と改元
 同 御東幸
 同 築地外國人居留地設定
 同 東京砲兵工廠、横須賀造船所、長崎造船所及佐渡生野、小坂各鑛山等官行、○高島炭鑛開山
 是年

二月 通商司を置き通商會社爲替會社を其下に置く
 三月 公議所開設
 五月 北海道函館平定
 六月 版籍奉還
 同 關所撤廢
 七月 金穀出納所を大藏省と改稱
 十二月 京濱間電信開通
 同 横濱吉田橋竣成(本邦最初の鐵橋)
 明治三年(一八七〇)
 一月 廻漕會社飛脚船、東京大阪間開始
 二月 樺太開拓使設置
 四月 島津紡績所設立(堺紡績所)
 七月 普佛戰爭に局外中立聲明
 同 東京見付廢止
 九月 平民の苗字許可
 同 人力車營業許可
 同 工部省開設
 同 九十九商會設立(四年七月三菱商會設立)
 十一月 徵兵規則公布
 十二月 新律綱領公布
 明治四年(一八七一)
 一月 郵便規則制定、東京大阪間郵便局設置
 二月 大阪造幣寮開設

三月 太政官設置
 四月 四鎮臺設置
 同 戶籍法改正公布
 同 堂島米商會所開業
 五月 越後、米國式石油採油を始め
 同 新貨幣條例公布
 六月 上海長崎間海底電線設置
 同 九段物産會開設
 七月 廢藩置縣
 同 傳信局設置
 同 散髮廢刀勝手令
 同 ○○○の稱廢止
 同 京都西本願寺博覽會
 同 岩倉全權渡歐
 同 深川清住町に攝綿篤製造所を設置(十七年淺野へ拂下)
 十二月 赤羽工作所設立(六年赤羽製作所と改稱)
 同 兵庫製作所官行
 明治五年(一八七二)
 一月 戸口調査實施、戶籍簿編成
 二月 地所賣買許可、地券發行
 三月 新紙幣發行(所謂セルマン紙幣)
 同 兵部省廢止、陸海軍二省設置

同 湯島聖堂博覽會開催
 同 鉛活字の新開印刷
 同 開拓使農學校假校舎(芝増上寺内)建設
 四月 品川横濱間汽車開通
 同 雇傭外人二百十四人に及ぶ
 六月 陸運元會社創立
 同 富岡製絲所開設(二十六年三井へ拂下)
 七月 東京に小學校開設
 同 學制頒布
 同 政府郵便蒸氣船會社設立
 同 横濱市營瓦斯開始
 同 瀧野川紡績所創立
 同 内藤新宿勸業寮出張所(農事試驗場)設置
 十二月 徵兵令制定
 明治六年(一八七三)
 五年十二月三日 この日を六年一月一日とす(太陽曆採用)
 二月 基督教布教解禁
 五月 民法假法則刊行(漢國維府萬國博覽會へ始めて出品)
 六月 二本松製絲會社設立(株式會社の始)
 七月 改正地租條令公布(反別採用十年一月改正)
 同 日本坑法公布
 同 高島炭鑛官行
 同 第一國立銀行開業
 八月

同 日米郵便交換條約調印
 同 臺灣事件起る
 九月 三池炭礦官行
 同 岩倉便節歸朝
 十月 開成學校設置
 十一月 內務省設置
 十二月 郵便はかき封囊發行
 同 士族授産の太政官布告
 同 初めて豫算書見込會計表公表
 是年 主要鑛山、佐渡、生野、小坂、釜石、三池等官行

明治七年(一八七四)
 一月 民選議院開設建白
 二月 佐賀の亂
 四月 臺灣征討
 五月 釜石鑛山官行
 六月 有恒社洋紙製造開始
 同 日米郵便條約締結(八年一月實施)
 同 北海道屯田兵制度創設
 同 株式取引所條例制定
 十月 金融業者小野組島田組破綻
 十一月 起立工商會社設立、工藝品輸出開始
 是年 高島炭鑛後藤象次郎へ拂下○蠶種紙燒棄

明治八年(一八七五)
 一月 郵便爲替法實施
 四月 立憲政體の詔書頒發
 五月 千島樺太交換條約成立
 同 郵便貯金開始
 六月 新聞紙條例、讒謗律發布
 七月 王子抄紙局設置
 八月 東京商法講習所成立
 九月 金祿公債發行
 十一月 阿仁銅山、院內銀山官營

明治九年(一八七六)
 一月 バビール・ファブリック創業
 四月 品川硝子製造所設立、フリント硝子製造
 同 米國費府萬國博覽會へ出品
 五月 農事修學所開設
 同 ガラ紡機製作
 八月 米商會所條例公布(設立)
 同 三井銀行設立
 九月 憲法草案起草の詔勅下る
 同 札幌麥酒會社設立
 同 新條社(マッチ工場)設立
 十一月 工部美術學校創立
 同 神風連の變、萩の亂

是年 三井物産會社設立○秀英舎開業
 明治十年(一八七七)
 一月 地租(百分二・五に)輕減
 同 西南の役勃發
 同 千住製絨所設立
 二月 神戸、京都間鐵道開通
 六月 萬國郵便聯合條約加盟
 七月 擇善會設立(銀行集會所の前身)
 八月 第一回内國勸業博覽會開催
 九月 利息制限法公布
 同 マッチ初輸出
 十月 新町屑絲紡績所開業(二十年三井に拂下)
 十一月 電話器初輸入
 是年 品川硝子製造所拂下○木挽町に電信中央局設立

明治十一年(一八七八)
 一月 龍之口勸工場開設
 同 駒場農學校設立
 同 内務省、二千錠紡績機二基英國より購入
 三月 東京府會開會(府縣會の最初)
 五月 起業公債券募集○巴里萬國博覽會へ出品
 同 東京株式取引所設立
 同 大久保利通刺殺
 八月 東京商法會議所設立

同 竹橋騒動
 十二月 參謀本部設置
 是年 後藤毛織創立

明治十二年(一八七九)
 一月 共濟五百名社設立
 四月 自由黨結成(大日本國會期成有志會)
 同 集會條令發布
 同 東洋農會設立
 六月 備荒儲蓄金法公布(十四年一月施行)
 七月 刑法治罪法公布
 同 グラント將軍來遊
 同 上野興農競馬會開催
 九月 千住製絨所開業
 十二月 大阪手形交換所創設
 同 縱積社創立
 是年 東京海上保險開業

明治十三年(一八八〇)
 一月 交詢社發會(青松寺内)交詢雜誌一號發行
 二月 橫濱正金銀行開業
 九月 東京銀行集會所設立
 同 日東保生會社設立(不到開業翌年解散)
 十一月 紙幣消却資金増加の爲め法律第四十八號を布告
 是年 全國三府五縣に洋式紡績所設置 大阪に綿糖共進

會開催○工場拂下規則公布○横濱正金銀行、三菱
爲替店開業

明治十四年(一八八一)

- 三月 第二回内國勸業博覽會
- 四月 農商務省設置
- 同 高島炭礦、岩崎へ拂下
- 五月 太政官中に統計院設置
- 同 東京職工學校設立
- 六月 開拓使官物拂下事件起る(大隈下野)
- 七月 明治生命保險會社設立
- 十月 國會開設の詔勅下る
- 同 日本鐵道會社設立
- 同 自由黨結成(總理板垣退助)
- 十二月 大日本農會設立
- 是年 東京瓦斯會社、日本ベイント製造會社設立

明治十五年(一八八二)

- 二月 大日本水産會設立
- 三月 大日本山林會設立
- 同 改進黨結成
- 同 帝政黨結成
- 五月 東洋社會黨結成
- 七月 朝鮮事變
- 同 軍人勅諭

明治十六年(一八八三)

- 同 軍備擴張始む
- 七月 板垣退助襲撃さる
- 十月 日本銀行設立(十日開業)
- 同 紡績聯合會結成
- 七月 官報發行開始
- 同 大阪紡績會社開業
- 八月 紙幣整理着手
- 十一月 鹿鳴館設立
- 同 東京電燈會社設立免許(二十年開業)

明治十七年(一八八四)

- 二月 品川硝子工作所を西村勝造に貸下
- 三月 各地に農民騒動(物價低落、不況深刻、小作農増加)
- 同 長崎造船所三菱へ貸下
- 同 深川セメント工場淺野へ拂下
- 十月 加波山事件
- 十二月 高峰讓吉、人造肥料に着眼
- 是年 日本鑛業會社、大阪商船會社、古河鑛業所創立。

明治十八年(一八八五)

- 四月 專賣特許條令公布
- 七月 兌換銀行券條例實施
- 同 アークライト初めて點燈

- 十月 日本郵船會社開業
- 十二月 太政官廢止、内閣官制公布、伊藤博文内閣組織遷省設置
- 是年 阿仁及び院内鑛山を古河へ拂下○日本赤十字社病院創立(十九年、國際赤十字條約に加入)○東京瓦斯局拂下、東京瓦斯會社設立

明治十九年(一八八六)

- 四月 大中小各學校令公布
- 五月 條約改正準備着手
- 九月 近江麻絲會社設立(洋式製麻の初め)
- 十月 整理公債條例公布
- 同 鎮守府設置
- 年初來 洋風崇拜愈々熾ん(所謂鹿鳴館時代)
- 是年 小坂鑛山を藤田へ、愛知紡績所を藤田へ、兵庫造船所を川崎へ各拂下○米綿始めて輸入さる

明治二十年(一八八七)

- 一月 東京電燈會社、初めて送電開始
- 三月 所得税法公布
- 五月 取引所條例公布
- 七月 横濱正金銀行條例公布
- 同 保安條例公布(星亨以下五百七十名追放)
- 是年 新村紡績所を三井へ拂下、長崎製鐵所を三菱へ拂下

明治廿二年(一八八九)

- 是年 大日本人造肥料株式會社、内外綿會社、富士製紙會社、京都電燈會社、日本麥酒釀造會社創立
- 四月 市町村制、郡制制定
- 同 黒田(清隆)内閣組織
- 五月 鑛業紡績會社開業、大日本紡績開業
- 六月 高島炭坑事件
- 同 下瀬火藥創製
- 七月 條約改正、治外法制撤廢(大隈盡力)
- 同 米價暴落(期米最低四圓七十二錢)
- 十一月 メキシコとの通商條約調印
- 是年 三池炭礦拂下○日本石油、帝國生命創立

明治廿二年(一八八九)

- 二月 憲法發布
- 同 文相森有禮刺殺
- 三月 土地臺帳、地券廢止
- 七月 土地收用法公布
- 十月 大隈襲撃さる
- 同 東海道線全通
- 同 佐久間貞一、印刷工組合組織
- 同 職工組合組織せらる
- 同 北海道峰須賀農場米式農耕採用
- 十二月 山縣(有朋)内閣組織

是年	石川島造船所、日本生命、北海道炭汽創立
明治廿三年(一八九〇)	第三回内國勸業博覽會
三月	商法發布
四月	東京火災保險會社設立
五月	第一回衆議院議員總選舉
七月	教育勸語發布
十月	第一回國會
十一月	京濱電話交換局開設
十二月	東京職工徒弟學校を東京工業學校と改稱
同	第一次恐慌
同	工場操短實行
是年	三池炭礦三井買收
明治廿四年(一八九一)	東京商業會議所設立
一月	東京手形交換所設立
三月	大津事件
五月	松方(正義)内閣組織
同	東京青森間鐵道開始
九月	大日本紡績綿絲の輸出開始
十月	濃尾大地震
同	選舉干渉
十二月	横濱船渠創立○印棉直輸入開始
是年	
明治廿五年(一八九二)	豫戒令公布
一月	小包郵便開始
六月	メルボルンより兵器製造受託
同	第二次伊藤内閣組織
八月	琵琶湖疏水工事、同時に我國最初の水力發電を爲す○福島紡、日本棉花、岸和田紡創立
是年	
明治廿六年(一八九三)	製鹽費、官吏一割づゝ六ヶ年獻納勸助降下
二月	松方内閣選舉干渉
同	商法中手形法施行
七月	印棉積取特約成立
十月	東京米穀取引所設立
同	日本郵船ボンベイ航路開通
十一月	活動寫眞初めて錦輝館にて行はる
同	東洋自由黨(大井憲太郎)
同	富岡製糸所三井に拂下○三井鑛山合名、三菱合資
是年	磐城炭鑛創立
明治廿七年(一八九四)	英國と條約改訂
七月	日清戰爭
八月	東京商品取引所開業(杉の森)
十月	日本製鋼創立
是年	

明治廿八年(一八九五)	日清講和條約調印
四月	第四回勸業博覽會(京都)
同	三國干渉
同	臺灣債金二億兩受領
十月	芝浦横型千三百馬力三聯成汽機製作
同	東洋經濟新報創刊
是年	
明治廿九年(一八九六)	營業稅公布
三月	日本郵船歐洲航路開設
同	棉花輸入稅撤廢
四月	勸業銀行法、農工銀行法制定
同	新製シームレス式平爐製鋼法成功(吳工廠)
同	工場法案問題化す
同	第二次松方内閣組織
九月	大日本製糖、入山探炭、富士紡、東洋汽船、郡是製糸、川崎造船、函館船渠、日毛、日本製粉創立
是年	佐渡、生野二鑛山三菱へ拂下、印刷局内の硫酸製造所を日本工業へ拂下
明治三十年(一八九七)	東京高等農學校設立
一月	金本位制定(實施十月一日)
三月	「勞働世界」發行
七月	
明治卅一年(一八九八)	第三次伊藤内閣組織
一月	日鐵ストライキ
二月	勸業債券割増債券發行
六月	萬國郵便條約調印
同	大隈内閣成立(最初の政黨内閣)
同	收入印紙發行
七月	民法實施
同	常陸丸竣工(劃期的)
八月	第二次山縣内閣組織
十一月	日本ベイント、愛知時計、三河セメント創立
是年	
明治卅二年(一八九九)	東京大阪間長距離電話開通
二月	新商法實施
四月	大冶鐵鑛購入契約成立(日本製鐵機構の基礎、植民地鐵鑛)
同	ヘーグ國際平和會議へ帝國代表出席
五月	

六月 ベルギー移民八百名出發
 七月 條約改正實施、内地雜居
 十二月 北海道拓殖銀行創立
 是年 安田商事合名創立

明治卅三年(一九〇〇)
 三月 治安警察法公布
 同 産業組合法公布
 同 足尾銅毒事件
 五月 北清事變、京仁鐵道開通
 同 新式機械製糖開始(臺灣製糖會社設立)
 七月 馬匹の輸出禁止
 十月 第四次伊藤内閣組織

明治卅四年(一九〇一)
 五月 社會平民黨創立
 六月 桂(太郎)内閣組織
 同 日本平民黨創立
 同 星亨刺殺
 同 八幡製鐵所開業、轉爐製鐵法採用
 同 ストライキ節流行○第三回産業恐慌

明治卅五年(一九〇二)
 一月 日英同盟成立
 三月 日本興業銀行創立
 七月 吳造兵廠ストライキ

八月 砲兵工廠ストライキ
 同 東北地方凶作
 十二月 國勢調査施行の件公布
 同 教科書事件
 是年 第一生命創立○紡績會社組織兼營への轉換期

明治卅六年(一九〇三)
 三月 第五回内閣勸業博覽會
 八月 東京市街鐵道(電車)開通
 十一月 平民新聞刊行
 同 三越自動車初輸入
 是年 品川白練瓦、大日本鹽業創立

明治卅七年(一九〇四)
 二月 日露戰爭勃發
 四月 貯蓄債券法制定
 五月 第一回外債一千萬磅募集
 六月 百三十銀行の休業に發端、金融恐慌勃發
 七月 煙草官營
 九月 第一回貯蓄債券賣出
 十二月 三越デパート設立
 是年 租稅體系の變換○芝浦製作所創立

明治卅八年(一九〇五)
 五月 京釜線開通
 六月 鹽專賣法公布

九月 日比谷燒打事件
 十月 平和條約成立、樺太占有、關東州租借、南滿洲東清鐵道領有
 十二月 北海炭礦外債募集
 同 伊藤博文韓國統監就任
 是年 東邦電力創立

明治卅九年(一九〇六)
 一月 日本窒素肥料設立
 同 西園寺(公望)内閣組織
 二月 滿洲向日本綿布輸出組合創立
 三月 朝鮮向三榮綿布輸出組合創立
 同 鐵道國有法公布
 四月 東京市電燒打
 五月 鐵道開通五千哩祝賀會
 十月 桑港の日本學童排斥
 同 臺灣第一回彩票發行
 (秋) 東京競馬會
 同 關釜連絡開始
 是年 日本窒素、大日本麥酒、東亞煙草、宇治川電氣、南滿洲鐵道、京阪電氣創立

明治四十年(一九〇七)
 一月 生糸輸出額一億圓突破祝賀
 同 戰後の反動、株式崩落

二月 足尾銅山争議
 三月 銀行恐慌勃發
 四月 別子銅山争議
 五月 ヘーグの萬國平和條約に調印
 九月 十二ヶ師團を十九ヶ師團に擴張
 同 天洋丸竣工(本邦最初の巨船)
 同 ケヤ・ハーデー來朝
 是年 鐵道國有○第四回産業恐慌○明治製糖、日清紡、麒麟麥酒、秋田木材、日清製粉、日清汽船、日本皮革、帝國製紙、日本製鋼所創立

明治四十一年(一九〇八)
 一月 東株暴騰(鈴久の買占)
 二月 日米紳士協約成立
 同 辰丸事件
 四月 臺灣縱貫鐵道開通
 五月 銚子無電開始
 六月 赤旗事件
 七月 第二次桂内閣組織
 同 馬券發賣禁止
 十月 戊申詔書換發
 同 高平ルート協約成立
 十一月 東洋拓殖設立
 十二月 銀行取付續出

是年 高田商會、九州電氣軌道創立
明治四十二年(一九〇九)

- 一月 日糖事件發生
- 七月 大阪北野大火
- 同 伊藤博文暗殺
- 同 日本製絲世界水準凌駕
- 是年 東洋捕鯨、京城電氣、三井物産、三井合名創立
- 明治四十三年(一九一〇)
- 三月 地租條令改正
- 同 立憲國民黨結黨
- 五月 大逆事件
- 同 ロンドン日英博覽會
- 八月 日韓合併
- 十一月 帝國在郷軍人會發會
- 是年 「我國金利の革命」と稱さる〇戸畑鑛物、帝國製糖創立
- 明治四十四年(一九一〇)
- 二月 日米通商條約調印(七月實施)
- 三月 工場法公布(大正五年實施)
- 同 加州上院、日本人土地所有禁止案可決
- 四月 日英通商條約調印
- 五月 中央線全通
- 八月 東京市電車市有

- 同 第二次西園寺内閣組織
- 同 外米賣出
- 同 所澤飛行場陸軍飛行演習
- 同 マース氏飛行實演
- 同 電氣爐製鋼法使用(嚙矢信州土橋)
- 十二月 東京市電ストライキ
- 是年 住友電線、三井鑛山創立
- 明治四十五年(一九一〇)
- 一月 東京市外債九千萬圓成立
- 同 友愛會設立
- 二月 日本丁抹通商航海條約並に特別相互關稅條約調印
- 同 日露協會成立
- 三月 帝國農會設立
- 同 朝鮮關稅令公布
- 五月 山陰線全通
- 六月 カーチス氏飛行實演
- 七月 樺太縱貫鐵道全通、米價暴騰、細民窮迫
- 同 天皇崩御、大正と改元
- 十月 日澳通商航海條約調印
- 同 日伊通商航海條約調印
- 十二月 上原陸相、朝鮮二ヶ師團増設主張、内閣辭職
- 大正二年(一九一三)
- 二月 憲政擁護運動の焼打事件

大正三年(一九一四)

- 同 山本内閣組織
- 三月 木村徳田兩飛行中尉墜落
- 四月 オッタワ日本總領事、カナダ渡航の労働者制限及取締に關する宣言を發表
- 五月 米國加洲排日土地法案通過
- 同 (川崎)カーチスタービン七船、(三菱)ギヤードタービン船通航
- 九月 東洋移民會社のブラジル行移民千八百名出發
- 十月 滿蒙五鐵道敷設權獲得
- 同 支那共和國を承認
- 十二月 加藤高明總理の立憲同志會結黨式
- 大正三年(一九一四)
- 一月 シーメンス事件(海軍收賄問題)
- 三月 大正博覽會
- 同 山本内閣瓦解
- 同 東京停車場竣工
- 四月 第二次大隈内閣成立
- 七月 世界大戦開始
- 八月 歐洲大戦に参加、對獨宣戰布告
- 十月 南洋占領
- 十一月 ドイツの租借地青島占領
- 十二月 東京驛開場式

大正四年(一九一五)

- 一月 米價調節勅令公布
- 二月 北濱銀行事件
- 同 タクマ式汽罐創成
- 三月 山東省撤兵日交渉開始
- 同 蠶絲業救済に第一次帝國蠶絲會社設立
- 三月 獨善航艇に八阪丸靖國丸沈没さる
- 五月 山東省撤兵二十一ヶ條條約締結
- 六月 染料醫藥品製造(獎勵法公布化學工業勃興)
- 同 無盡業法公布(十一月施行)
- 同 無線電信法公布
- 八月 内閣改造
- 同 英佛露三國同盟に加入
- 十一月 即位大禮式
- 十二月 教育振興の御沙汰書下賜
- 大正五年(一九一六)
- 一月 大隈首相狙撃さる
- 二月 伊太利羅馬法皇特派使節ペトレタ僧正入京
- 四月 經濟調査會設置
- 六月 スミス飛行實演
- 七月 海軍八八艦隊發表
- 同 日露新協約調印
- 八月 工場法實施

八月 鄭家屯事件
 九月 露國大藏省證券一億四千萬圓(二回に互り)發行
 十月 簡易保險法實施
 同 寺内閣成立
 同 憲政會結成(加藤高明總裁)
 十一月 船橋無電局、桑港と開信
 十二月 英國圓公債一億圓發行

大正六年(一九一七)
 三月 日本工業俱樂部設立
 四月 理研に十萬圓宛十ヶ年下賜開始
 同 總選舉施行(政友會大勝)
 六月 臨時外交調査會設置
 同 我驅逐艦隊地中海の獨潛航艇を攻撃
 同 第三十九回帝國議會開會
 七月 製鐵業獎勵法公布
 同 工業所有權戰時法公布
 九月 物價調節令、暴利取締令、戰時船舶管理令各公布
 同 露國大藏省券一億圓調印(十月第一回六千六百六十萬圓引受調印)
 同 漢治洋公司日支合辦經營成立
 同 金輸出禁止(本位制離脱)
 同 小紙幣發行
 十一月 東洋製鐵會社設立

同 石井ランシング協定成立
 同 二十五ヶ師團八八艦隊の新國防案發表

大正七年(一九一八)
 三月 戰時利得稅法公布
 同 市町村義務教育費國庫負擔法公布
 同 軍需工業動員法公布
 同 兼二浦製鐵操業開始(三菱)
 同 外米補給令公布
 同 臨時國勢調査局設置
 同 米騒動勃發
 同 浦鹽出兵
 同 穀物收用緊急令公布(米騒動勃發)
 同 山東問題に關する日支覺書交換
 同 原敬内閣成立
 同 朝鮮殖産銀行開業
 同 歐洲大戰休戰條約成立
 十一月 英米鐵鋼解禁のため關西鐵商破綻多し
 十二月 西園寺公、巴里の講和會議全權委員に任命

大正八年(一九一九)
 一月 陸軍科學研究所創設
 同 都市計畫法公布
 同 國際聯盟、労働規約締結
 五月 支那各地排日運動熾烈

六月 米國金輸出解禁
 同 ズエルサイユ條約成立
 同 日英米佛伊五ヶ國再度支那に南北妥協を勸告
 七月 足尾釜石室蘭各ストライキ勃發
 同 寬城子事件起る
 同 米價暴騰甚しく米穀輸入令改正
 同 新聞社職工一齊ストライキ遂行
 八月 東京大阪間郵便飛行開始
 十月 物價戰前の三倍に昂騰
 是年 大小會社濫設著し

大正九年(一九二〇)
 一月 流行性感胃(スベン風邪)愈々猖獗を極む
 二月 八幡製鐵所二萬三千名職工大争議、續いて各地に小作争議頻發
 同 大恐慌起る
 同 尼港事件(ロシア過激派の邦人大虐殺)
 同 普選案上程で議會解散
 同 沿海州守備のため出兵、北樺太亞港を占領
 同 恐慌愈々激甚未曾有の混亂
 同 第一回メーデー
 五月 日英米佛の四國對支借款團組織調印
 六月 ゼノア國際海員労働會議開催
 七月 海軍擴張案可決

十月 第一回國勢調査施行
 同 八八艦隊建造計畫のため増稅

大正十年(一九二一)
 三月 皇太子殿下、歐洲御巡遊のため御出發
 同 米穀法公布
 同 足尾銅山罷業
 同 郡制廢止の件公布
 同 職業紹介法公布
 同 日英米佛伊の平和條約批准公布
 同 安田善次郎暗殺
 九月 ワシントン會議開催
 同 首相原敬暗殺
 同 高橋是清内閣總理大臣に就任
 同 東宮攝政

大正十一年(一九二二)
 十二月 日英米佛四國協定成立、日英同盟廢棄
 二月 ワシントン會議調印
 同 支那に關する九ヶ國極東協約成立
 同 國務調査、我國の總財産八百六十億圓と發表
 同 平和博覽會
 同 日本農民組合組織
 同 借地借家調停法公布
 同 健康保險法公布(實施は十五年)

六月 加藤友三郎内閣成立
 八月 日本經濟聯盟會創立
 九月 國民黨解黨
 十月 浦鹽撤兵
 同 自作農創設維持策問題化
大正十二年(一九二三)
 二月 南洋群島ヤップ條約公布
 三月 二十一ヶ條約破棄通告を拒絶
 四月 郡制廢止實施。恩給法公布
 中央金庫法公布
 石井ランシング條約廢棄公文書交換
 武藤山治等實業同志會組織
 日露漁業協約調印
 支那排日暴動
 六月 關東大震災(未曾有の大慘害)
 九月 第二次山本内閣成立
 同 帝都復興院設置
 同 第四十八回臨時帝國議會
 十二月 虎の門事件により山本内閣總辭職
大正十三年(一九二四)
 一月 清浦内閣成立
 同 皇太子殿下御成婚式
 二月 英米兩市場にて外債五億五千萬圓成立(國辱外債)

三月 暹羅國と通商條約調印
 四月 米國排日案可決
 同 帝國經濟會議設置
 六月 加藤高明内閣成立
 七月 小作爭議調停法公布
 同 メートル法實施
 同 鶴見臨港鐵道株式會社創設
 十月 内務省全國勞働調査
 十二月 支那宣統帝、北京の日本公使館に避難
大正十四年(一九二五)
 一月 日露條約調印
 三月 治安維持法公布
 同 放送局開始
 同 農商務省、農林、商工二省に分離
 同 大阪市實現
 同 北樺太派遣軍撤退
 五月 普選法公布
 同 四ヶ師團廢止
 同 對支文化協會創立
 同 第二次加藤内閣成立
 八月 正貨現送開始
 九月 國勢調査及び失業統計調査
 十月 復興建築助成株式會社設立
 十二月

同 日露新協約正式調印
大正十五年(昭和元年)(一九二六)
 一月 加藤首相薨去により若槻禮次郎總理大臣に就任
 (加藤内閣の全員留任)
 三月 日本勞働農民黨結成
 同 勞働爭議調停法公布
 同 濱松樂器爭議起る
 五月 自作農創設維持補助規則公布
 同 全國に青年訓練所設置
 七月 健康保險法實施
 同 日本放送協會成立
 八月 チェッコ共和国と通商條約批准公布
 同 勞働農民黨結成
 同 社會民衆黨結成
 十二月 天皇崩御 昭和と改元
 同 香川縣、新潟縣各小作爭議起る
昭和二年(一九二七)
 二月 大正天皇御大喪儀
 三月 金融恐慌起る
 同 北丹後地方大地震(大慘害)
 同 田中義一内閣成立
 同 モラトリアム實施
 五月 山東出兵

六月 立憲民政黨發會式
 同 日英米三國軍縮會議開催
 八月 軍縮會議決裂
 十二月 東京地下鐵道開通(上野淺草間)
 是年 獨占の進展
 同 支那日貨排斥惡化
昭和三年(一九二八)
 一月 衆議院解散
 同 加奈陀と公使交換に決定
 二月 普選初總選舉
 三月 三・一五事件(日本共產黨大檢舉)
 同 日ソ漁業條約調印
 同 日獨通商條約調印
 四月 濟南事件(日支兵衝突)
 五月 張作霖横死
 六月 治安維持法改正勅令公布
 同 リトヴィヤと通商航海條約批准交換
 八月 日加改訂移民協約實施
 九月 即位御大典
 十一月 産業合理化の進行著し
昭和四年(一九二九)
 一月 日支關稅協定成立
 同 濟南事件協定正式調印

一月 日本航空輸送株式會社開業
 四月 資源調査法公布
 同 神戸商業大學、大阪、東京兩工業大學開學
 五月 山東派遣軍引揚命令
 法制審議會設置
 同 拓務省新設
 六月 濱口内閣成立
 七月 深夜業廢止
 同 旅客航空開始
 十二月 東京大阪間超特急車運轉
 昭和五年(一九三〇)
 一月 金解禁
 倫敦海軍軍縮會議開會
 同 帝都復興祭
 三月 日本埃及暫定通商協約成立
 同 日支關稅協定調印
 四月 ロンドン軍縮會議協定成立
 鐵道メートル法實施(同法に依り貨錢算定)
 同 臨時產業合理局設置
 六月 日澳通商條約正式調印
 八月 東京大阪間電送寫眞開始
 同 濱口首相狙撃さる
 十一月 豆相地方大地震被害甚大(所謂豐作飢饉)
 十二月

昭和六年(一九三一)
 二月 南京漢口事件の日支交換公文成立
 同 全日本商工黨成立
 四月 第二次若槻内閣成立
 產業合理局設置
 同 官吏減俸決定
 六月 行政財政審議會官制公布
 重要產業統制法公布(十一月七日施行)
 同 滿洲事變勃發(支那兵滿鐵線爆破)
 九月 北海道及び青森縣地方飢饉
 十月 金輸出再禁止
 十二月 犬養内閣成立
 昭和七年(一九三二)
 一月 衆議院解散
 同 上海事變
 二月 我軍上海總攻撃
 血盟團事件(井上藏相暗殺)
 同 團琢磨暗殺
 三月 滿洲國成立
 同 五・一五事件(犬養首相暗殺)
 五月 齋藤内閣成立
 同 農漁山村中小商工業者救済三ヶ年計畫樹立
 八月 第六十三回臨時帝國議會
 同

九月 日滿議定書調印、滿洲國承認
 同 隣接八十二ヶ町村を合併せる大東京出現
 同 産業組合五ヶ年計畫樹立
 同 失業救済土木事業開始
 同 滿鐵の疏安計畫成る
 同 郵貯三分に引下(劃期的低金利始む)保證準備發行
 限度十億圓に擴張
 昭和八年(一九三三)
 一月 日支軍山海關にて衝突
 二月 國際聯盟より脱退
 三月 外國爲替管理法公布(五月實施)對英一志二片釘付
 農林負債整理組合法公布(八月實施)
 同 米穀統制法公布(十一月實施)
 同 印度稅關引上、對日壓迫加重
 同 紡聯、印棉不買決議
 四月 大阪地下鐵道開通
 五月 丹那トンネル開通
 六月 支那對日關稅引上
 同 滿鐵八億圓に増資
 同 關東防空大演習
 八月 日蘭棉業會商開始
 十二月 日印通商協定成立
 昭和九年(一九三四)

二月 日英通商會議開催
 武藤山治射殺
 三月 函館大火(被害甚大)
 同 日關會商(交渉進展せず行惱)
 六月 岡田内閣成立
 七月 日印新協定成立
 九月 關西大暴風(被害甚大)
 同 第六十六回臨時帝國議會
 十一月 ワシントン條約廢棄
 十二月 對滿事務局設置
 昭和十年(一九三五)
 一月 町田忠治民政黨總裁就任
 北鐵讓渡交渉調印
 三月 在支帝國公使館、大使館に昇格
 五月 對加通商護法發動
 七月 政府、國體明徴聲明書發表
 八月 紡績鐘數一千萬鐘達成
 十月 支那幣制改革
 十一月 日滿通貨等價安定聲明
 十二月 倫敦にて軍縮會議開催
 昭和十一年(一九三六)
 二月 總選舉、民政黨第一黨、政友會第二黨となる
 同 二・二六事件勃發(東京府下戒嚴令)

二月 二・二六事件のため岡田内閣總辭職
三月 廣田内閣成立
四月 低金利工作、五分利國債發行
同 低利借換を行ふ
九月 輸出入品臨時措置法實施
十月 東北興業株式會社、東北振興電力會社創立
十一月 日獨防共協定成立
同 帝國議事堂落成
同 煙草値上實施
同 秋田尾去澤鑛山ダム決潰(被害甚大)
昭和十二年(一九三七)
一月 輸入爲替許可制實施、商品市場動搖
二月 林内閣成立
三月 第一次金現送(以後續送)
同 衆議院解散
同 總選舉執行(政友會慘敗)
四月 東京市電從業員怠業實施
同 輸出入品臨時措置法改正
五月 近衛内閣成立
同 商工省外局燃料局開設
同 朝日新聞社機神風號ロンドン安着
同 蘆溝橋事件勃發(日支事變の端緒)
同 七十一臨時議會開會(北支事變のため)

九月 第七十二臨時議會開會、二十五億軍事費可決
十一月 日獨伊三國防共協定成立
同 日蘇漁業暫定協定調印
昭和十三年(一九三八)
一月 近衛聲明發表
三月 電力國家管理案
同 中華民國維新政府樹立
同 職業紹介所法改正、國營となる
四月 國家總動員法一部施行成立臨時物資調整局設置
五月 物動計畫第一年發表
六月 暴利取締改正省令公布
同 外國爲替基金設定
同 金使用一切禁止
七月 我軍漢口突入
八月 蘇聯日魯三漁區閉鎖を通告
十月 蘇聯日魯三漁區閉鎖を通告
十一月 興亞院設置
十二月 汪兆銘香港より重大聲明發表
同 汪兆銘香港より重大聲明發表
昭和十四年(一九三九)
一月 平沼内閣成立
同 滿洲移民會議新京に開催
同 職業能力申告開始
同 東大醫學經濟學部潰滅
同 中央物價委員會大改組
二月

同 在滿領事館閉鎖
同 中支振興、北支開發二會社設立
同 勞務需要調整令公布
同 日本發送電會社設立
同 産業報國聯合會設立
同 華興商業銀行開業
同 ノモンハン事件(日ソ軍激戰)
同 事變國債四億圓發行
同 滿洲土地開發會社設立
同 日華直通有線電話開通(世界最長)
同 汪兆銘、對蔣絕緣聲明
同 國民徵用令施行
同 工場事業技能者養成規則公布
同 日本米穀會社創立
同 米國、日米通商條約廢棄
同 人口問題研究所開設
同 獨ソ不可侵條約締結
同 日英會談決裂、阿部内閣成立
同 大日本航空會社設立
同 第二次歐洲大戰、獨波兩軍戰端開始
同 歐洲動亂不介入聲明、日ソ停戰協定
同 價格停止令公布(九・一八物價)
同 爲替、磅リントクより弗リントクへ轉換

十一月 米穀強制買入令公布、照國九事件
同 英國、佛國、獨貨拿捕令公布
同 精白米禁止(七分揚勵行)
同 産業報國會、協調會より分離
同 東亞船業協議會設立、日滿支石炭聯盟結成
昭和十五年(一九四〇)
一月 日ソ通商本交渉モスクワにて開催
同 米内閣成立
同 日米通商條約更新安結せず無條約狀態となる
同 遞信省、電力調整令發動し、消費制限を告示
同 燐寸製造生産命令及び共販會社配給指令
同 農相、産組の保險會社經營計畫に中止命令
同 石炭増産應急對策に八千三百萬圓の補助金支出方
同 閣議決定、鐵鋼需給統制規則公布
同 純計百五十億圓の豫算案成立
同 物價對策初審議會、米穀強制出荷命令發動
同 エクアドル政府日本各種織物輸入に從價七五%の
同 禁止的課税を發表
同 獨逸對話宣戰
五月 輸出資金及び輸出品製造資金融通損失補償法施行
同 規則公布
同 獨軍、白耳義、和蘭、佛蘭西へ侵入
同 伊太利參戰、佛國、獨逸に降服。
六月

編輯後記

一、本目錄編纂後に陳列決定せるものは別紙に印刷してあるから併せ見られたい。又會場の面積の關係上目錄に掲載し乍ら陳列し得ないものを多少含んでゐる。

一、本目錄の編纂は大部分後出の展覽會委員及び展覽會事務局員が當つたが、明治二十六年以降の書目編纂には加田博士關係の慶應義塾大學講師及助手各位の助力を得た。この部分の選擇のために同氏らは先づ約三萬冊の書目を作られ、この中より約一千一百冊を選擇された。

一、目錄中、版畫は日本實業史博物館及び築比地仲助氏の出品書籍は明治二十五年迄は大部分が竹森一則氏、一部分が加田哲二氏、築比地仲助氏の出品である。

一、本展覽會の委員は左の如くであり、社外から多くのプレートの参加を得た。

- | | | | |
|------|-------|-----|---------|
| 會長 | 石橋湛山 | 事務長 | 小熊孝 |
| 常設委員 | 土屋喬雄 | | 加田哲二 |
| | 清澤一則 | | ○築比地仲助 |
| | ○竹森一則 | | (○印は常任) |
- 同時に委員外の左の方々からも屢々貴重な助言及製作の御援助を得た。この方々及別記出品者諸氏に厚く御禮を申上げる
- | | | |
|-------|--------|-------|
| 石井研堂 | 長谷川如是閑 | 尾佐竹猛 |
| 脇村義太郎 | 渡邊幾治郎 | 野村兼太郎 |
| 福澤一郎 | 小林輝次 | 遠藤佐々喜 |
| 三井高陽 | 三井高維 | 澁澤敬三 |
| 樋畑雪湖 | | |

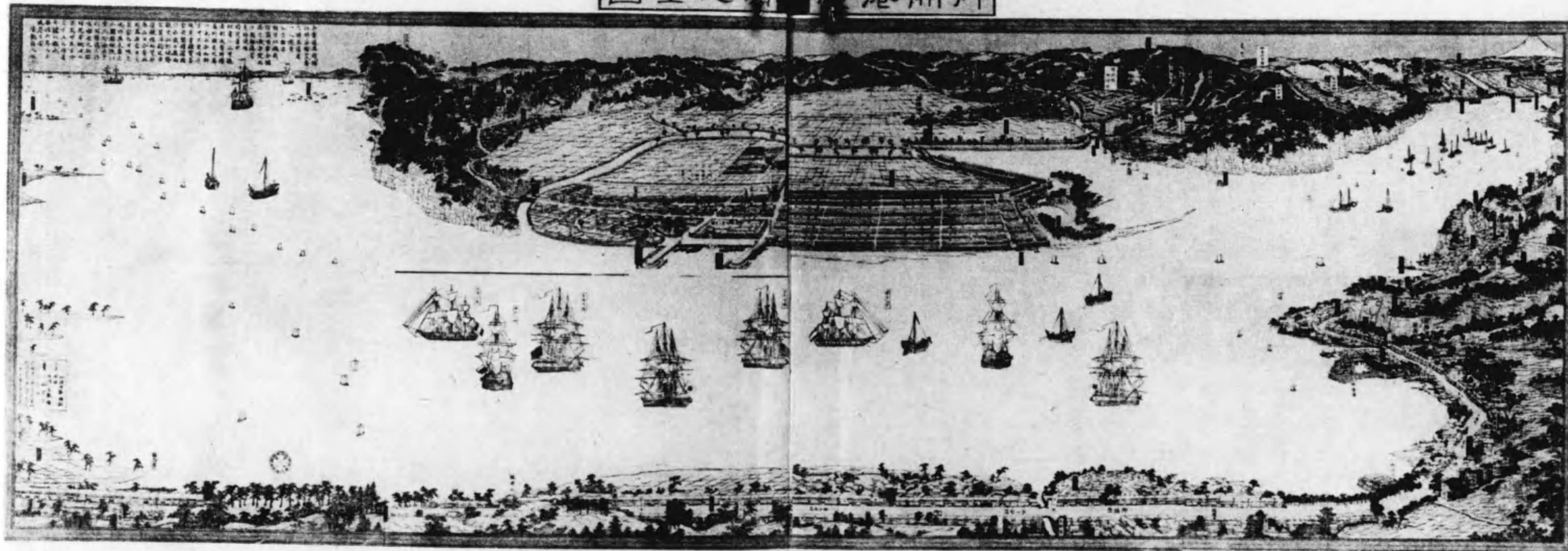
一、なほ本展覽會は紀元二千六百年を紀念し、且つ小社の滿四十五周年を紀念するため計畫されたものである。參考迄に小社四十五年の略史を左に掲げる。

東洋經濟新報社略年表

- 一、明治廿八年十一月十五日、町田忠治氏に依り創立さる。同時に東洋經濟新報發刊。本社を東京市牛込區新小川町に置く。
- 二、明治卅年三月、町田氏に代り天野爲之氏編輯門脅を統督す
- 三、明治四十年五月一日、組織を合名會社とし、植松考昭氏代表社員主幹に任ず。
- 四、大正元年九月十四日、植松考昭氏逝去、三浦鎮太郎氏代表社員主幹に任ず。
- 五、大正七年十一月廿五日、大阪市に關西支局を設置す。
- 六、大正八年十月、從來月三回五ノ日發行の東洋經濟新報を週刊に改む。
- 七、大正十年十一月十日、組織を改め従業員を株主とする株式會社とし、三浦鎮太郎氏事務取締役主幹に任ず。
- 八、大正十三年十二月、石橋湛山氏事務取締役主幹に任ず。
- 九、昭和五年、日本經濟年報を發刊す。
- 一〇、昭和六年六月八日、日本橋區本石町三丁目二番地に新築せる社屋落成し本社を移轉す。同年七月經濟俱樂部を起す。
- 一一、昭和九年五月、英文經濟雜誌オリエンタル・エコノミストを創刊す。
- 一二、昭和十二年九月一日、名古屋市に名古屋支局を開設。
- 一三、昭和十三年三月神戸に、又同四月京都に各支局を開設す。
- 一四、昭和十四年三月四日、福岡市に九州支局を設置す。
- 一五、昭和十四年四月、東洋經濟統計月報を創刊す。
- 一六、昭和十四年九月、横濱支局を開設す。
- 一七、昭和十四年十月四日、京城に京城支局を置く。

403
414

圖全之濱 廣港開御



終

